滑稽雜抄

六

大正十五年八月上流起義

特別
イ8
1919
384

176652

清河雅物

大正十五年八月上旬記事

○八月十六日　雨ふる。陶器一冊を繙いて出版せんことを心がけ、あるいは枕辺の挨拶に取かゝる。大正十一年以来折々覗んで書き敬らしとなるこの少からず、日々書き録する雅事は四五十冊の多きを及び、史内ふと取るべきこゝもあれども、石油時報と三年間分月登載し陶器は雅事の内ふとや、稍を抜きゝるこゝもあれども、こゝのものもの三百頁をたらずべく、他に多の玩味に関する折々の挨拶二十則程あり、こゝ七二百頁を下

橋上の盲人　豐國筆（桐畫の七）

藏書印譜（三）

江戸金地院開山
本光國師印影

38- 9173

らるべし、北海道に関する事あり、余之を
つゝる物の基と成りたるものなれども、石油時報
に載せたる全部余が海外を内山者三の名を称し
係る、一下商ゝ後めるやうに紹しまんと書き直し
追補、訂正等を要するものゝ多く、材料は一
冊にて以上丈を文会にゆんど、取捨するは拙者の時
乃ち要し、記事の按排する拙者の面白あり、
大正十一年以前の隠者は資料は早稲田出版
部の花とあるは当国書の面と混しあり入り
換言すること面倒なれば北海は他日の機
会の外なし、刊行北海の思ひ立ちは隠者
全部収めかたきつき或は他日更に一巻を

十二行

刊行せんか、若し「回顧録」と題することの出し得べくん
ば今次、拙稿者きしるるもの、皆是れに加へ得べし、たの
しきものい皆回顧録とおもふるもの也

一 明治文学の回顧　一 雲英抄
一 明治初頃の新聞紙　一 都を去るの記
一 新潟学校時代　一 高崎学校講演記
一 明治初頃文化の回顧
一 獄窓書物談　一 演劇回顧
一 明治政治史　学記の文
一 新潟に於ける回顧　一 初期面録
一 初期面録　一 一ツ橋回顧
一 余が印時見た前原と奥平

一、二葉大生活時代の涙浜紙練習

一 遊京紀行　一 伯耆紀行

一 九州紀行　一 養父紀行

一 山陰紀行　一 浜家生活

一 十和田湖紀行　一 鞍馬の紀

一、一山房雅義を懐ふ　一 紅葉を懐ふ

北海道あるべし皆自分の経歴が関するものであるべ

けれど刊行はかなり多く今刊行の物をもうん、荒しこんを

刊行し得ることあれば、自然「廣懶庵」の内容と趣味あ

る余が経歴を随筆体にも加へもし、各項目と

長い篇ものや、大なる一冊となる得ん、項目の上に點

を附し各の皆一冊に新しく若くは旅行に載せるもの

也

今次刊行せんとする随筆にも材料の性質上、俗

三種に分ち左の如き題下に載せんを優むべきか

一 雅俗折々録

一 雅閑録

一 就味海書

石油時報に載せる随筆中余が随時雅趣を

談ずる得べきものあり此等を雅閑録と名くべ

きか、趣味海書の目は左の如し

一 印の妙味

二 印の交

三　古書あさり
四　王本蕉集
五　反故扱味
六　書簡扱味
七　日記に就て
八　芋の蕉集
九　紙に就て
十　寺ハ扱味の開源
十一　茶から芋の扱味
十二　包裝法
十三　聽秀の扱
十四　洞谷の扱味

十五　酒石則
十六　掘出し物の扱
十七　書簡六面觀

八月三の記

扨中旬と雅間録の題いこるる上るとつき爰に一の紙を結ばず、

陶芋の材料ハ石と豊あるも、多分今次の陶芋に取るべし、換出したるも拾尚多きなる き物ハ、あらう、芋と陶と追に換なし だら優に一冊位陶から、或ハ時手こ の関係あるこの扱ハ、未年あらう 出すにしても可ならん 自分ハ陶芋山陽を出しても陶芋家とても漸や

く世上に認められらしく、直来法華経から特
に隨筆などを頼まれも来たり、春城隨筆も
楽の読者をはるも知れぬが多の期待があ
るばかり自重を要する、一篇の隨筆実に
妙味の隨筆ひあり、今時の人が多く知らぬこ
とが材料となりたる、えんが果して受けるか
否やが疑問である。

○後芝田萬長溝口健吉の雑稿差手を得た
其目左のごし

自有隨筆　賞賛の花の説

得益和

女楽説

勧学の説

学の改革と戒

朱天子青像副記

教育要旨

外に寫真鏡説い前の得字時期者こ和しあ
まりに漢文なる自筆にあるとも雖黄斑々なる
あ而流の学の伝をひきたる長のるとも言ふ和
頗る真面目なる、但し時勢に従さえて五敬言海
防の事に意を注きたりと見く、此等のことの関す
る文章のあるい賞賛和い人と文を示して待を
得たるを収め自有隨筆の経歴の一斑
を陳ぶ体裁廿四頁にあるしことをつを得
益和こい交友のるを多く挙ぐ其内い浅田梅

十二行

者と交りを結ぶに後命を戰はし自著の序跋を乞ふることなどを記す、又秋月種樹の父佐土原老侯秋月菊岡守種任と壯年ともの親友なり其関係なる其三男種樹を送り其人と性復たる文書を收め種樹年十九、徒者と始るの文をもうえ徒者を遠くるあり、種樹の倚るを書かん時此の得益ねやりの文を引くを要す、

八月四記

十二行

五十公野に新たに営める墓石に刻すべき文章を森鴎外に漢文に譯さしむ左の如くなる不備のものなれども、自ら省みる所なきにあらず、其儘を之を収めおく、今次墓地の周囲に石柱を建てんとし石工に命じ試みに一石を作らしめ、其の刻字の拙の後世に伝ふるを恐れ、其の表面の字のみは未だ思ひあらざるに、田村を煩す、四字は如何あらん、或は「蒼有流轉」の金の刻法の字を採り、或は「泰山磨崖」を倣ひて勾勒して刻すべきか、未だ決せず。

○熱海を発する時坂西道場迄送られ車中にて酒を酒すの具
として野口来次郎の松の木の果実といふ書を送られる車
中にて、そもそも野口の言及せることを考へて人を
思ひ立ち、思ひ出るまゝを手帳に記して十数則を
得たり、其のヘッドはザットたの如くにして、岡を得て
敷衍し、後味後の一として美の国と空の雲数

十二行

一 日本の風景松か無ければ 後味の七分を失ふ
一 日本の名勝に多くは松の名称也 三保、天橋
松島等是なり
一 日本を飾るものは松の木也 海岸道路の行松
堤防、山川、鉄道、城堡、寺院境内、庭園
皆松を以て飾る
一 庭に多くなる樹木あるも 松が中心なり
庭に権威を添へるものは 松
一 庭園の松は手入を要す、松を首として
その手入の費用を要するかなり
費用をかけても此ものを保護せざる可
ず

十二行

○松の話（海岸通）

一 城堅に風致を添へるもの松なり、栄と風致を
添へるものなり、別健の長巣を宮まへ
松の樹也 江戸城を始め各地の城址皆な
松の名所 且つ戦争を経る

一 大師宅の周囲を飾るもの松、四囲の四
家の外部の堂々たる松あるが故

一 田圃の間とコンモリと聖年を以つて一郭を
為すものあり中と社祠あり、これも松を以つ
て飾さるなり

一 寺院の境内殊に山つの前に松の風致を
以て飾さい寺の一特徴也、三緑山の山つ前の
松庵の松今は皆な滅ひんとす惜乎哉

長田氏の松も亦同じ

一 内体なる感するい山路なる風致の松、無住の
庵を飾る松、貧弱な茶庵を飾る松な
どとなる

一 嵐山の松、月の風の松、海岸の
の松なる松かなり見るに堪へ
ず

一 松の陽性と砂地をこれ好む日光をもめ好む
気を高ともす、故に四季蔭ず

一 松の男性なる別地の気象あり、石雖と活も
る気魄あり、雪に虐げられ風と虐げられ
ながら長日い戦闘を続き、そして勝利を得て

るを語る

一　松の白肌を本色とし巖石を別荘とす、彼等八風波を助くる為めの生え出るなり、海の白肌を洗れ松の根を浚へも、根を露はしても枯す、海風松を虐げ奇しく其の姿態を屈曲す而して却つて趣味あり

一　松の色は深緑なり、緑色の深さは美と測る可き日本の絵画の北の深味も画する能はず、洋画も亦之れを写す能はず

一　支那寺院の光景の常と時絵の下絵とする松あり、京都の四條流の松あり、九州の南宋画家の表とする松あり、松は茶流に画に用ゆる料と供す

○八月十三日帰京今次旅行は一言にして之れを評すれば楽也然れども多少の意味あり、第一次有三を訪ひて彼の接待大厚なり、陪席の才二世婦人郷土の風色を同席す二十歳許りの女子為め新聞と山田教授とを出版嘱す、主人也而して旅館次頭城の大池邸前島男爵の生地也と称して紀念郵便局を又

且つ四日市の古年を今も一場の演説を試みることと高田藩と新潟新聞社の塔牧を目撃したることと高田藩の塔牧を作りて陳述を試し且つ異常なる酒樽ニ三を傾くること、中異然後を経て初めて金沢の東山温泉に入りの趣を述べたること次の如き歴史

一高田藩に於て寄席業者（明治）今より数年前人名の食出席の人名を加外と余と四縁ある人多く陪席し席上余に高田藩士第二の称号とする所以を語る曰く余が先祖代々に於て初めて英語教育を受けたる事

英語学の教い高田の四藩士柳原康次の藩邸にて教授したること（当時の藩邸共使用する改修を加へたるもの）第二帝大立四の中高田の先輩室長次郎と共に二原答えも前島男の永田町の邸と招えん初めて高田と縁故ある第一人者と交を厚くしたる事、第三高田新聞の創立に無分業初罪を買い入獄の身となる事、第四余が政治的社会的の経歴に高田を養生とも初まりたること青生堤男を脱して交りたる人名塔高田の人たること第五自分の印名

雄こ助と名乗りて病を医するなる論信
の二字を明らかにすること又高田新吉氏に入
る時友人が無つて春城の號を春日
山に因み春城と名乗ることなど頗る深あり
とぞ談話交りに談ずる

一　下池部の方年令と縮んひへ余ハ方年
の勢力を説き保せ先者の方年の及ぶ
さる所以を論じ先壮者敬すへしと論し
終に農村経済と説き及び労働本義
を説かず労働の神聖なる所以、労
働ハ金銭と換し得さる貴きこと
ること等を説き所謂る労働第一義ハ

十二行

多く感情より出すものも勘定より出
勘定より出るも解決さんが為めなること
をいふ感情と勘定と両方ともけんを
争論に於て大切なるファクトんであること
を忘るゝなかるべしといふ

一　高田と同行せる高田中村二博士の外に去
田田伝二郎なる者、北人なりと高田の
話なりと聞く茅蔦に就て一場の講
談を目為すに説明くまなきこと
なりこゝに概略を筆けんとす高
田氏なりの記事なるべし

芭蕉翁の藝術に就て

古田氏談話大要

芭蕉翁が若し豫州に生れられたとしたら、日本の芭蕉翁よりも一層高名であつたであらうと思ひます。何となれば、之を外國の作者の何人に比べても、あまりに偉大であるからであります吾人は我々の祖先にかゝる偉大なる藝術家を出したのを喜ぶのであります。

翁は、十月十日、大阪の花屋で病死した時、弟子達が辭世の句を乞ふたら、……我が一生中吐きすてたる言ゝ句々、皆辭世なり。と喝破しました。世界の文學史をたづねても、斯る言葉を發したる者があるか疑問です。

無殘やな兜の下のきりぎりす

我眼の心に似たり秋の風

翁の、三十歳までの句は、談林派の俳句――言葉の遊ぎ、――思想の遊ぎ――であつたが、……三十六七歳以後の作句は、老莊哲學に能くきたはれ、佛教の無常觀に觸れて、所謂萬有流轉、諸行無常、寂滅爲樂の趣を加味し、所謂言々句々、皆辭世の句と爲るべき、純藝術であつた。佛の哲學者、「モンテーヌ」は、常に「私は私の著書の外他人の書を讀まず」とかう語した程の人であつたが、……或人、芭翁に俳の妙諦を問ふたら、翁は、言下に「作句の前に、必ず童心に歸り子供等の爲す所を見よ」と答へたさうだ。……是れ、萬卷の書を讀破して自分の物とした、佛の哲學者の心理と、同巧異曲です、

一茶は、翁に比べては、圭角が、あつた。一品が多かつた。翁は、其角、嵐雪の作句は、桃と櫻に比べられたが、翁の句に比べては天地の差があります

英の「アーサ」は町を評して「魂で作られた町」人の手で作られた町」の二つがあるといひましたが、一翁と一茶の句は全く魂で作られた句が多いと思ひます要するに、……何人でも童心さへ受け入れた作句ならば翁にも一茶にも追從が出來ると思ひます。

翁は常に、人と語るに俳談の外爲す可からず、人か雜談をする間は、居眠りをせよいひました

東の細道の中に弟子の曾良が病む時に行きくて倒れ死すとも萩の花と詠みました

又俳諧は老後の樂みに作れと言つて居ます

翁が、信濃の旅路で、秋山を越ゆる時路傍に眠つた、乞食を起すといつて起きな起きな起きぬ浮世の秋や

起きなく起きぬ浮世の秋や

見ん、とよんだのも――畢竟寂滅無常觀に滿されて居る思想の表現に外ならぬのであります、又翁程弟子より敬愛せられた人も稀れであります、大阪花屋で病死した時も十二人の弟子に守られて、大往生を遂げました――斯くも弟子等より慕はれた藝術家は全く世界無比であります

○余が高田と入るの前日余を祖とする高田新聞社なる左の記事を掲ぐ過褒の言あるとも聞くに耐へざるを得ざるも、則ち左に收めおく

正義の士 本社創刊の社長

春城市島謙吉氏

八日岡島校で講演

春城 市島謙吉の名はその文才に於いて天下に轟く。蓋し裏日本が生んだ文人として我等の誇りであり、殊に我が上越にとつては永久に忘れる事の出來ない偉人である。

× × ×

春城市島謙吉氏は本縣北蒲原郡の出身にして、つとにその文才と俊々諤々の論陣は尾崎行雄氏等と共に、當年論客としては混沌たる時代の指導者として、天下に喧傳され後世恐るべき俊敏の士と目されてゐた。時もあれ、明治十六年四月一日

高田 事件に刺激されて中川源造、倉石知藏、高橋慶二郎、上田岩之助、竹村良貞、古橋包正、齋藤謙治の諸氏に依つて我が高田新聞が創立せらるゝや、氏は社長兼主筆として聘せられその健筆を高田新聞紙上に發揮し、上越文化に貢獻する事となつた。その頃は未だ震災布以前の事として時の潮流政府は横暴至らざるなく、その弊は郵城の官吏にまで及んでゐた。時ち我が市島春城氏は高田新聞の牙城に據つてその非を責め、大に民權論者の爲に

氣を 吐いたのであつた。

然しそれは遂に官權の忌避にふれ官吏侮辱罪として竹村良貞氏と共に新潟の獄に投ぜられ、後長野の獄に苦役を余儀なくされた。然し正義の血にもへる若き志士はそれに屈する事なく獄を出ずるや、又高田新聞に歸り大にして上越文化の爲に、小にしては國家の爲、その筆をまげなかつた。その正義の筆は光輝ある我が高田新聞の歷史と共に深く上越人士の忘れがたい所である。

× ×

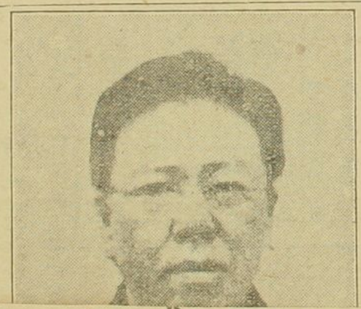
高田新聞を辭するや尾崎氏の後を受けて新潟新聞に主筆として聘せられ、後讀賣新聞に轉じ、早大教授となり、博士、高田早苗博士、天野爲之博士等と共に早稲田大學の最高幹部として、故大隈重信侯を補佐して早大をして今日の如く世界的に有名な大學に盛り立てたのである。今日早大圖書館は日本の各官私立大學中その藏書、部數、設備等に於いて最大且最前の名を有してゐるがこれは最近まで我が市島氏が館長として鋭意これにあたられたからである。

今日 市島氏が早大名譽理事として一萬五千の學徒は勿論、教職員に至るまで慈父の如く慕ふもの又然の事である。氏はかくの如く各方面に活動されてゐるのであるが、尚ほ特筆すべきは明治二十七年より三十一年に至る前後三回の代議士生活であらう。その憲政の爲に功勞ある事は既に何人も知る所である。

× ×

以上の如く氏は時に寫客として時に學者として、その至らざる所なき有樣であるが、非常に多趣味な人であり一方頼山陽の

研究 家としては名著頼山陽



正義の士
本社創刊の社長
春城市島謙吉氏
八日岡島校で講演

春城 市島謙吉の名はその文才に於いて天下に轟く。蓋し裏日本が生んだ文人として我等の誇りであり、殊に我が上越にとつては永久に忘れる事の出來ない恩人である。

× ×

春城市島謙吉氏は本縣北蒲原郡の出身にして、つとにその文才と侃々諤々の論陣は尾崎行雄氏等と共に、青年論客としては混沌たる時代の指導者として、天下に喧傳され後世恐るべき俊鋭の士と目されてゐた。時もあれ、明治十六年四月一日

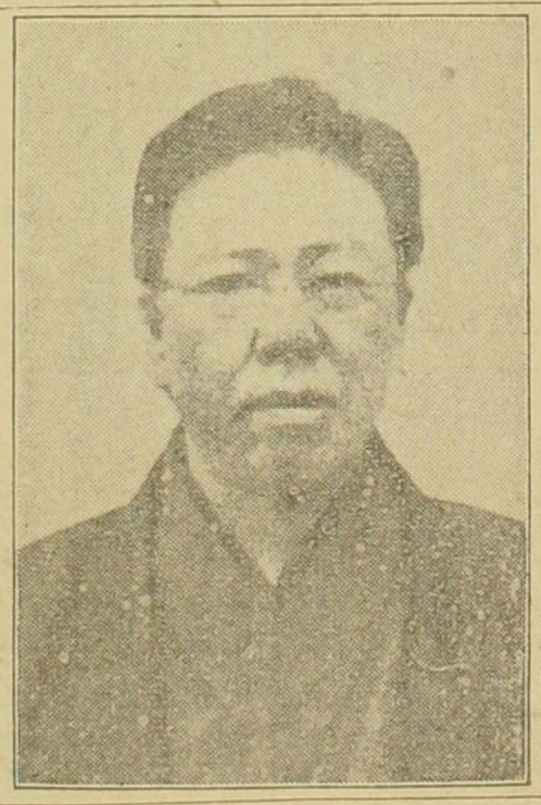
高田 事件に刺激されて中川源造、倉石知藏、高橋慶二郎、上田岩之助、竹村良貞、古橋包正、齋藤謙治の諸氏に依つて我が高田新聞が創立せらるゝや、氏は社長兼主筆として聘せられその麗筆を高田新聞紙上に發表し、上越文化に貢獻する事となつた。その頃は未だ憲法發布以前の事とて時の藩閥政府は横暴至らざるなく、その弊は野城の官吏にまで及んでゐた。即ち我が市島春城氏は高田新聞の牙城に據つてその非を責め、大に民權論者の爲に

氣を 吐いたのであつた。然しそれは遂に官權の忌避にふれ官吏侮辱罪として竹村良貞氏と共に新潟の獄に投ぜられ、後長野の獄に苦役を余儀なくされた。然し正義の血にもへる若き志士はそれに屈する事なく獄を出ずるや、又高田新聞に歸り大にしては國家の爲、小にしては上越文化の爲に、その筆をまげなかつた。その正義の筆は光輝ある我が高田新聞の歴史と共に深く上越人士の忘れがたい所である。

× ×

氏は 高田新聞を辭するや尾崎氏の後を受けて新潟新聞に主筆として聘せられ、後讀賣新聞に轉じ、早大教授となり、坪内雄藏博士、高田早苗博士、天野爲之博士等と共に早稲田大學の最高幹部として、故大隈重信侯を補佐して早大をして今日の如く世界的に有名な大學に盛り立てたのである。今日早大圖書館は日本の各官私立大學中その書籍、部數、設備等に於いて最大且最前の名を有してゐるがこれは最近まで我が市島氏が館長として鋭意これにあたられたからである。

今日 市島氏が早大名譽理事として一萬五千の學徒は勿論、教職員に至るまで慈父の如く慕ふもの又當然の事である。氏はかくの如く各方面に活動されてゐるのであるが、尚ほ特筆すべきは明治二十七年より三十一年に至る前後三回の代議士生活であらう。その憲政の爲に功勞ある事は既に何人も知る所である。



× × ×

以上の如く氏は時に論客として時に學者として、その至らざる所なき有樣であるが、非常に多趣味な人であり一方頼山陽の

研究 家としては名著隨筆頼山陽に於いて知らるゝ通りである。記者は一日氏の逸話を聞かんとして氏と親交ある倉石知藏翁を訪ねた。翁はいふ。

市島君は溫厚の君子であつた、然し酒豪の方で氏が高田を去る前夜別れの盃を交した事があつたが、二人で五升位飲んで私の母を驚かしたものだ、新聞社時代には高田事件を始め色々面白い事も多かつた、長野の獄舍では市島君も竹村君も隨分ひどい目にあつたものだ、兎に角市島君が上越文化の開發につくした事は非常なもので、特に信越鐵道問題は我等が永久に感謝すべき事だ、信越鐵道問題と云ふのは室孝次郎、大井茂作、矢澤綱四郎氏等が

信越 鐵道會社を起し政府に認可を請願したが、時の井上鐵道長官は之を許なかつた、この時の上越地方民の失望は非常なもので室孝次郎氏の如きは東京から歸國する時「いざさらば雪降る里に歸りなん都の春も心憂き世や」と歌を作つた程悲觀したものだ、この時市島君は得意の麗筆を振ひ上越文化の爲に或は産業上の見地から鐵道必要論を一月以上も新聞に發表した、之は大に時の政府を刺激した、なく信越鐵道計畫に着手した、この信越鐵道によつて如何に上越民が利便を受けて居るかと云ふ事を思ふ時、我等は市島君をわすれる事は出來ない云々と

上越文化の恩人としてはた學者として趣味の人として或は

論客 として一世に轟く春城先生が來る八日高田市に於て因縁深き上越人士に何を語られるか演題が未定である丈け我等の興味は益々先生に集中する。あゝ越後が生んだ偉大なる文人よ。上越の恩人よ。我等は擧つて先生を迎へやうではないか。

りと喝破しました。世界の文學史をたづねても、斯る言葉を發したる者があるか疑問です。

無殘やな兜の下のきりぎりす

我獄の心に似たり秋の風

翁の、三十歳までの句は、談林派の俳句――言葉の遊ぎ、――思想の遊ぎ――であつたが、……三十六七歳以後の作句は、老莊哲學に能くきたはれ、佛教の無常觀に觸れて、所謂萬有流轉、諸行無常、寂滅爲樂の趣を加味し、所謂言々句々、皆辭世の句と爲るべき、純藝術であつた佛の哲學者、「モンテーヌ」は、常に「私は私の著書の外他人の書を讀まず」とから語した程の人であつたが、……或人、芭翁に俳の妙諦を問ふたら、翁は、

一茶にも追從が出來ると思ひます。

翁は常に、人と語るに俳談の外爲す可からず、人か雑雑談をする間は、居眠りをせよいひました

奥の細道の中に弟子の曾良が病む時に

行きくて倒れ死すとも萩の花と詠みました

又俳諧は老後の樂みに作れと言つて居ます

翁か、信濃の旅路で、秋山を越ゆる時路傍に眠つた、乞食を起すなといつて

起きな起きな起きば浮世の秋や見ん、とよんだのも――畢竟寂滅無常觀に滿されて居る思想の

言あるも、何ぞ之を得ん、浮世の秋、則ち左し

收めおく

十二行

○高田に於て相馬流風と金子流風と早稲田の校歌文武を以て名を馳す、早稲田の校歌は此人の作也、流風又郷里のたゝえ スキーの歌を作る、幕府の巷こゝに唄流行す、新潟人なる塚本此唄を作る又スキーの高踏を云ふ、富士見の流風と心の酒掬と称す、流風金のとゝえ みつかう唄ふ、添石と風味を共に高田へ入れり、高田に於ける酒席の一快事なり 歌の一枝を隔てたる紀田に収めあり

新潟の酒を絞り枝を得とす何時も然らざるなし、新潟の後味にこゝに存す、今次矢吹氏に伴れたるまゝ情と酒と枝とを任得とし、唯に一吉、陰おのゝのあり、左の紀るが是也

今次伊藤中新潟に於て図らず一冊書手に入る、北越歌史なるものゝ自から来る、其の者の元禄和歌の三体詩と市河寛斎が伊藤に来る、和歌の首新朱色し乞寛斎の文を棄すゝ寛斎早く三体詩の講書を對照校讐するの意あり第七山相如亭と詩論数次立山等地方に遊び且くく毎年亭しるを更る校讐を繙け漸やく成るとあり、北書刻本の底本なるや否や、未だ定論あらずと是、弱る意の跡を存す、校訂本としても特に珍とすべきを云へり、次人や北書発が一族の舊花ろることも芝田縦里市治氏収花の印記に明かなること枝とおもへ、余之れを特ひ為の二十金を投すといふ

高田日報社募集當選スキー民謡

さらさらと

○

さらさらと
こゝろ細かに雪がふる
スキーで行かうよね
行きませうよね
廣い野原をどこまでも
ツッツガツー　ツッツガツー

○

さらさらと
遠いこゝろに雪がふる
スキーで行かうよね
行きませうよね
銀の山越にどこまでも
ツッツガツー　ツッツガツー

○

きらきらと
空は晴れたよ日はまぶし
スキーで行かうよね
行きませうよね
野越に山越にどこまでも
ツッツガツー　ツッツガツー

○

ちらちらと
星も遠くに見に出した
スキーで戻ろよね
戻りませうよね
杜の高田へ灯の影へ
ツッツガツー　ツッツガツー

○余随筆、頼山陽を著わしける時、新潟の山田教授に、その所を整理せしめ、なる史例に倣らん、北斎の画業を、第一集に稿を脱せんことを庶幾し、稿本十数冊を送りて、新潟と刻する、毎朝早起、注意未だ刻せざる間、随筆中、入るべきものを抜萃し、換出し、之を節り抜き、取捨併合を附箋し、数冊と交付す、其項目、十七行、十二行、四段、百数枚と上る、高使、撰出せば、合格するものあらんも、猶疑と、忙はしきと、酒宴に、倫むこと、数年なりしが、為めに、時日を、経過せしも、僅に二回の打合をなして、已めぬ、新潟、新多の、長井、其行を、新潟、新多に、掲出せんことを、請ひ、余、之を、諾す、

十二行

○今次の北前、奥味を、感じたるものの二あり、阿彦参拝の、帰路、出雲を、過ぎ、綿屋と、一面したることと、其一、新潟を、訪ふて、芸術家、若松、東山温泉、田なのの、游を、試みたること、其二也、岩室、阿彦附近、物産、華の地、戸数、三十二、戸、きさんたる、数の、数、五十口、無人とす、昔、のことを、表示するも、当地、余、頃、年、一二を、知る、氏中、より、知る、綿屋、壮時、老ひ、変を、留連す、当、学、校友、観習、修、其の、新潟、新多、主、学、し、時、北海、北海、を、訪ふて、北海と、飲む、後、二、宿す、庶、指、ままに、二十年、前の、ことを、高き、今次、回らず、北家を、訪ふ、庭、国、北家、依、北、家の、前代、に、風、を、解、する、主人、あり、しか、北家の

掛茶屋）活板味あり、余こりを仰て活字を一読し其の
茶屋の法とかくるを説き、丸大を縁側の板に充てた
ること、床側の窓に屏風と因んで絵車をハメコミた
ることなどを指摘す、高き橋より田園の見晴しあ
り、長三洲の揮毫に係る綿々亭の扁額あり余又
尤も名残の惜しき、坐定まり和盤出で校書列り
而して主人七兵衛に来る、主人年未だ壮、余初めて見る、
役の西余を知らずと曰ひしが、余の名を知りあるを
喜ぶ一盃を喫し、主人曰く前年中條の招ぎに
勧移し丹長達三と相謀り中条と於て有面を
得ることあらんと曰ひ、達三は余が文人（星野哲郎）なる事を知り三四
歳の長者なりしが数年前既に余達三の名を少

十二行

き感懐禁ずる能わず主人と酒を酌す、北行矢吹石塚山
田（穀城）を伴ひ酒酣にして漸やく猥談に移る、北橋実
は猥談に最も長ずるの憂あり、余俗模糊詩謡を弄
す一坐絶倒す、夕陽自動車を招き新潟に入んば
日既に暮る

○金谷津の東山温泉の勝を少く久し、而して未
だ嘗て金谷津を（なかつたる）ることなきを始けんて未だ潟
なることなきを、今次午前十一時は新潟を発し
三時荒橋に下車、日北温泉に浴び即夜十一時の
汽車を待つて帰東の途に就くを便とすと説く
るものあり、即ち其言に従ひ初めて一浴の機会を
得たり、北温泉荒橋を距る僅に一里停車場なる自

鉄車を傳ひ疾馳二十分にして達す、北地巨館名あるものこゝに向瀧流彼岸流彼岸こゝ也、前者に投ぜんとして定まらず後者に投ず、高橋の欄に憑り景物を眺め、地勢甚根の塔の沢に似たり、一帯の渓流を挾んで両岸に横を起す、橋三層のものあり、四層のものあり、沿る甍を連ねつらなる軒をならぶ崖高く樹鬱し、三角山を以て圍み積雪半滴んとす、渓水清冽奔流聲を発し快哉風を仰ぐ大雨を冒すが如く涼氣骨に徹す、浴後節を曳き漫歩渓流を溯り二三町行く千人風呂と掲榜する彼を見る、又渓底に新たに館を起さんとす工事中のものあり他日の繁昌想見すべし、余初め北地の勝景を尋ぬるに風景の美

十二行

いはんや浴館の規模小なりとも論ずるなきをいはんと回らさるき）無き想像に裏切られん（浴館の規模に）後の浴を缺まるものあり、数年を経ず現在十六七の浴館に倍加するに至らん歟、最初北地に沸湯の賀朴粗野の温泉場に過ぎざりし人に喜ばんものの今日の繁昌又新潟にも未だ嘗て各館地を置き、客の地を買さいるものを冷遇するに反り、家族を率へる浴客の迷惑少からずと、最近七八年の変化に驚くべきものあり、光亮東京を距る到底の感化に換ぬる北国を都会化したる也、為に故に飲食設備清野なるべし、其の等級箱根に優劣して

[illegible]くるものあり、而して涼味を帯びたる冷と拭く[illegible]を帯びたる冷と拭く[illegible]

[illegible]、酒中之吹ハ日く新潟の温泉[illegible]

体に浸潤し[illegible]脂粉の氣と[illegible]来り洗ひ去られて清

浄を覚ふと、然り此地ハ温泉[illegible]

[illegible]十四時[illegible]十一時の汽車に投

し直ち[illegible]

○仮後宮[illegible]の[illegible]

[illegible]を流し[illegible]

の実を被ちるこの数千町[illegible]

[illegible]

十二行

[illegible]

堅溝悉く具はり、要害無比の雄鎮なるは去る戊辰の亂、天下の大兵に抗拒し籠城三旬に至るも陷落せざりしを以て知るべし、溝壘は今に昔時の俤を存し轉た追懐の情を起さしむ。

○小田山　鶴ケ城の東南十二丁餘に在り山上には舊藩士の墓石多し戊辰の役西軍の率先占領して城内を瞰射したる有名なる山にて所謂二百三高地に當れり。

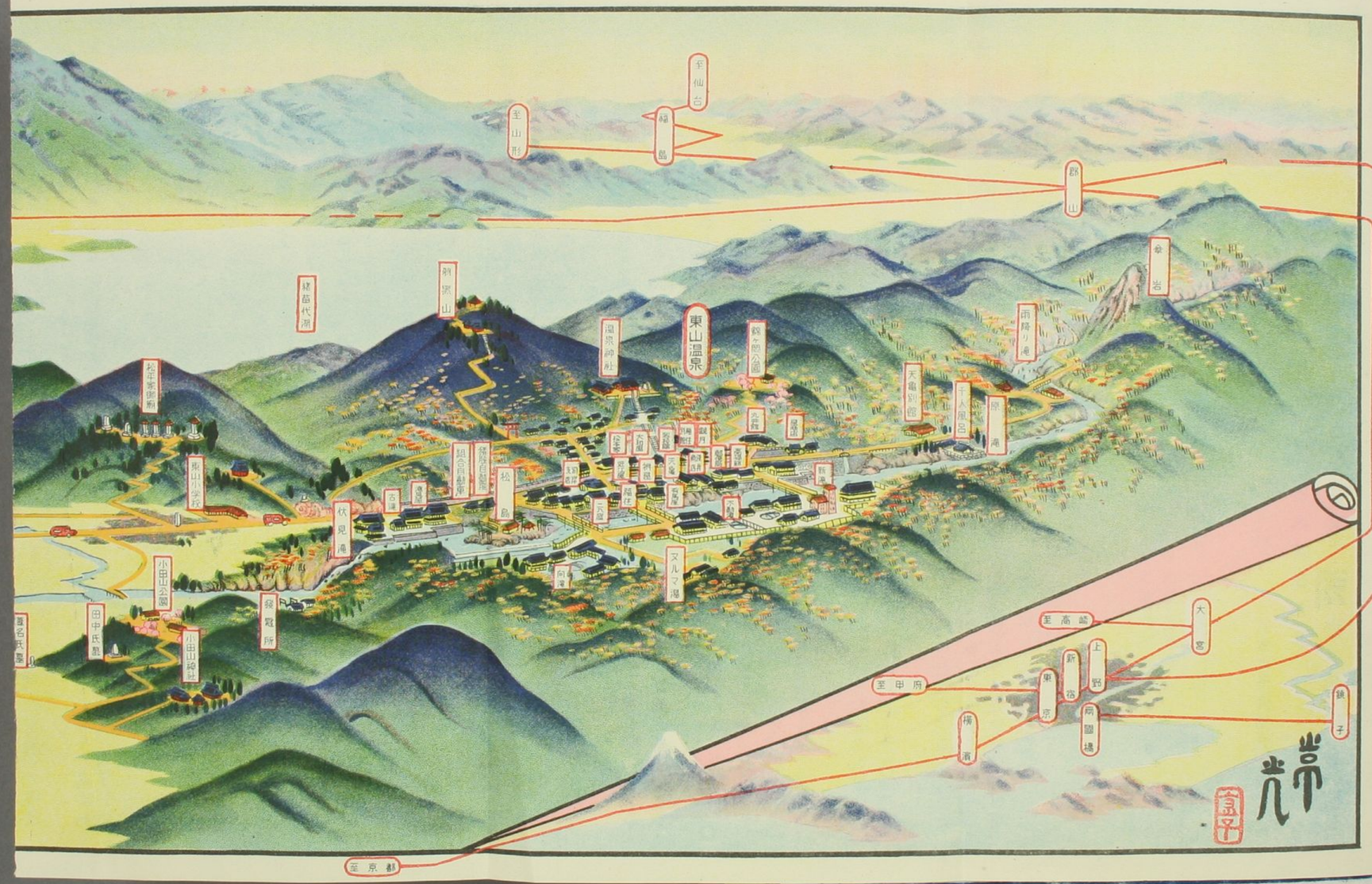
○葦名家の墓　若松城趾の東南湯川を隔てたる舊小田村（門田村黒岩）に在り杉木立の内に二基の五輪塔存し東なるは盛氏西なるは盛隆にして其西北に在る二丘は盛氏の息盛興と盛隆の子龜王丸の墓なりと云ふ。

○猪苗代湖と翁島御別邸　岩代國耶麻、北會津、安積の三郡に跨り、郡山の西方、若松市の東方猪苗代町の南方に在る、全國有數の一大湖なり、東西四里、南北三里十一丁、周圍十七里、北方長瀬川南部赤井川等の諸流に注ぎ東方安積郡に疏し、西北日橋川に瀉き、新陳代謝して水量常に溢涸の患なく、灌漑に便を與へ今は此水量を用ひ猪苗代水電を起し遠く東京市迄送電す。

湖畔の風光は小平潟、山潟、見稱山の眺望等佳絶なり、白鷗鴻雁の類、常に游泳し鮒魚、鱒、鯱、鯉、鰕等常に漁る、味ひ頗る美なり。戸ノ口十六橋は若松市より二里二十八丁、翁島驛より十餘丁、戸ノ口に至る此處風景秀清にして漁場なり。

夏期の漁納涼に好適地なり。二三の茶亭あり樹下一碑あり、芭蕉の句を鐫む、こゝより長濱に至るに有名なる十六橋あり、[illegible]

[illegible]



し直ち寢台に眠る

○仮役宮内の御宴七時頃終り直

ちに汽車に乗じ、三條公爵が西

原を流れて死者百五十人を出

の害を被らるるの報千四百

餘人に及ぶ、今次の洪水

の時ここに偉大なる車窓から若干佳

○妙法寺　市内甲賀町の北方に在り寶塔山と號し法華宗日什派の本山にして洛の妙滿寺及遠江國見附の玄妙寺と共に一派の三本山と稱せらる、日什上人入寂の場所なり。

○妙國寺　市外舊瀧澤村の北裏に在り妙法寺の末寺にして元日什上人の屋敷の在りし處寺内上人の廟あり什物としては刺繍の涅槃像日什上人筆の軸等を藏す、また戊辰の役會津藩主が暫く蟄居されたるは此寺なり。

○天寧寺　市の東天寧山に在り應永二十八年葦名盛信僧傑堂（楠正行の弟正義）の爲めに建立したる處往昔は七堂伽藍悉く備はり宏壯を極めたりしも屢ば兵燹に罹り今は只梁上菊水の紋章に遠き昔を偲ばしむるのみ寶物としては毘首筆の達摩、牧溪筆の寒山拾得東坡筆の竹等あり何れも豐臣秀吉會津下向の砌り白銀を寄進して其保管に注意したりと云ふ珍品なり。

○戊辰役戰歿士の靈場　市内七日町淨土宗阿彌陀寺（慶長八年良然上人開基）境内にあり戊辰の役に一藩の罪を負ふて死を得たる國老萱野長修を始め戰歿藩士及各藩戰死者の靈碑を建て茲に祀り後ち西南役の戰死者の靈をも合祀すまた市内西名子屋町眞宗長命寺境内にも戊辰役殉難藩士の墓碑あり毎年八月二十三日を以て追弔祭を三月二十三日を以て花祭を行ふ附近は戊辰役激戰の地なり世に之を長命寺の戰と云ふ。

○御藥園　市内徒之町の東端に在り舊藩主の別邸にして構内は老樹奇石に富み泉石の配置樹木の植栽亦其の技を盡せり今尚ほ松平家の有に屬す。

○若松城址　至德元年蘆名直盛の築く所にして鶴ヶ城と名づく、又は黑川城とも言ふ。平城にして周圍凡そ二十町。後蒲生氏郷改築を企て天守閣を建立し文祿年中工を竣へたり、堞壁塹溝悉く具はり、要害無比の雄鎮なるは去る戊辰の亂、天下の大兵に抗拒し籠城三旬に至るも陷落せざりしを以て知るべし、溝壘は今に昔時の俤を存し轉た追懷の情を起さしむ。

○小田山　鶴ヶ城の東南十二丁餘に在り山上には舊藩士の墓石多し戊辰の役西軍の率先占領して城内を瞰射したる有名なる山にて所謂二百三高地に當れり。

○葦名家の墓　若松城趾の東南湯川を隔てたる舊小田村（門田村黑岩）に在り杉木立の内に二基の五輪塔存し東なるは盛氏西なるは盛隆にして其西北に在る二丘は盛氏の息盛興と盛隆の子龜王丸の墓なりと云ふ。

○猪苗代湖と翁島御別邸　岩代國耶麻、北會津、安積の三郡に跨り、郡山の西方、若松市の東方猪苗代町の南方に在る、全國有數の一大湖なり、東西四里、南北三里十一丁、周圍十七里、北方長瀨川南部赤井川等の諸流に注ぎ東方安積郡に疏し、西北日橋川に瀉き、新陳代謝して水量常に溢涸の患なく、灌漑に便を與へ今は此水量を用ひ猪苗代水電を起し遠く東京市迄送電す。

湖畔の風光は小平瀉、山瀉、見稱山の眺望等佳絶なり、白鷗鴻雁の類、常に游泳し鮒魚、鱒、鯱、鯉、鰕等常に漁る、味ひ頗る美なり。戸ノ口十六橋は若松市より二里二十八丁、翁島驛より十餘丁、戸ノ口に至る此處風景秀清にして漁場なり。

夏期の漁納涼に好適地なり。二三の茶亭あり樹下一碑あり、芭蕉の句を鐫む、こゝより長濱に至るに有名なる十六橋あり、川幅廣くして架するに便ならず、中流に石を築き十六の圓洞を附けたる壯麗の橋なり、附近の最も眺望よき高地に高松宮御別邸あり。（是を翁島御別邸と云ふ）磐越線、沿道阿賀野川附近は風光に富み晩秋の候は連山照紅にして其壯觀掬すべし。

○柳津虛空藏　若松市より六里、東北第一の靈場にして風光も又壯絶を極む。

複製
嚴禁

大正十五年七月廿二日印刷
大正十五年七月廿五日發行

東京市日本橋區濱町三ノ五
著作權者發行兼印刷者　日本名所圖繪社　小山吉三
印刷所　同所　日本名所圖繪社印刷部

會津東山温泉
一手發賣元　岸東山支店

濱に至るに有名なる十六橋あり、川幅廣くして架するに便ならず、中流に石を築き十六の圓洞を附けたる壯麗の橋なり、附近の最も眺望よき高地に高松宮御別邸あり。（是を翁島御別邸と云ふ）磐越線、沿道阿賀野川附近は風光に富み晩秋の候は連山照紅にして其壯觀掬すべし。

○柳津虛空藏　若松市より六里、東北第一の靈場にして風光も又壯絶を極む。

複製
嚴禁

大正十五年七月廿二日印刷
大正十五年七月廿五日發行

東京市日本橋區濱町三ノ五
日本名所圖繪社
著作權者發行兼印刷者　小山吉三
同　所
印刷所　日本名所圖繪社印刷部

會津東山溫泉
一手發賣元　岸東山支店

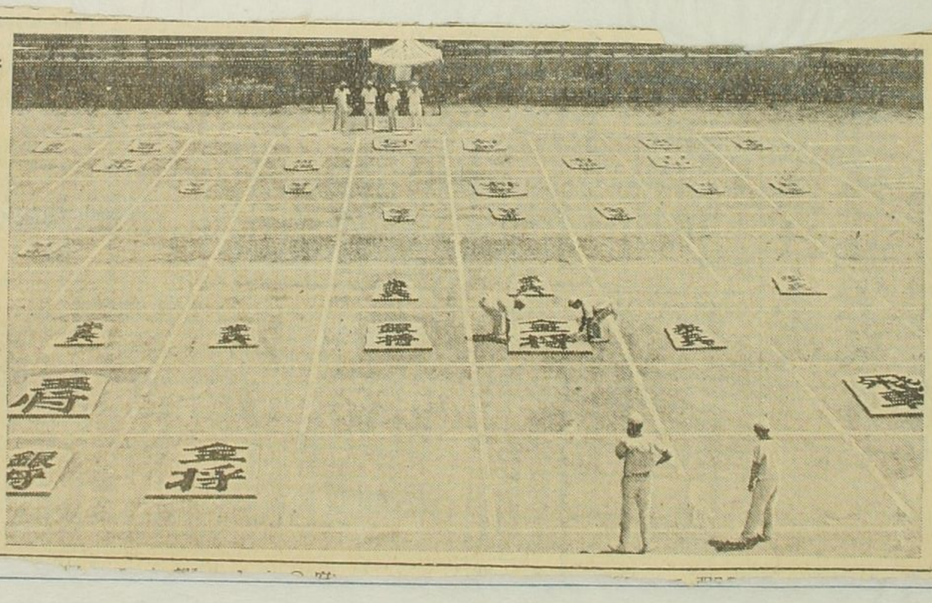
湯川上流ノ渓尼ヨリ八千八風呂ヲ望ム

新潟港

たく所也と三條市中私宅の一現如斯し、此人余が
随筆、山陽を翻譯さんと讀ち、偖この書中一冊
ヲ取り出す事、

金壺瀧高サ十八尺潭壺ノ形ヲナス

（四ッ十五ノ）



五千人に見える大衆將棋

大阪淀寺の庭球コートで五千人にみえるやうに大衆將棋、指手は遠しい座敷でパチ〳〵やるとメカホンで駒の動きを通ずる、同時に二人がゝりで駒を動かす觀衆歡呼

一の宮詣で

（上）　山花

□恵まれた一日が、自分の上に訪れて來た。

□新潟に來遊した矢吹男爵と市島春城先生とのために、石塚代議士が東道で、月の十一日、彌彦參拜を企てたのに參加して――といふよりも參加させられた氣味で、自分もまた同勢の一人となり、この感興に滿ちた淸遊を共にしたのは近來寂寥の住家に似た自分の胸に極めて懷かしい印象を鏤み込んだのであつた。

□午前十一時、風をきつて出發した自動車は一路靈地彌彦に向ふ。車中は例によつて春城先生が該博の知見を窺ふに足る趣味沸くが如き廣長舌を中心に、一行の談笑は絶えず賑はつて、山水の逶迤もいつしか閑却した形ちである。殊に自分は彼の地に賽する事一年三、四回、熟路邇く成し難く、途上の眼目も格別詩懷を喚らぬので一層興味を談話に傾けてゐたのである。

□處が內野へ來て見ると、頗る厄介な事が起きた。

□それは自動車の故障ではない。內野は折柄の盆市で、あの狹い通路の左右兩側に市が立つてゐるのはよいが、日除が双方から張り出されて、それに張つた青竹の尖端が×形に三四丁も續いてゐる始末だから、とても自動車ではこの難關を突破するどころか、殆ど微動だも出來る筈がない。

□一時は降りて步かうかとも考へたが、車體そのものが動かされぬとすれば、人間だけ降りたところで寸効もない。結局運轉手が警察へ談判に及ぶと、矢吹外務政務次官ありと知つてか知らずか、兎に角二三の警官が匆惶として飛び出して、片ツ端から件の日除を引つ込ませるといふ騷ぎとなつた。

□けれども三四丁に亘つてゐることの日除が、一時に撤去されるものでもない警官が少しづゝ途をあけさせる跡から、自動車はヂリ〳〵と隨づゝ動いて行く。悠長なることおびたゞしい。

「併し市場の男女にとつては大恐慌で、彼等は突然にも平和の攪亂者に闖入されて、狼狽と不安と困惑とに度を失はねばならなかつた車上で見てゐて氣の毒であつたが全体國道や縣道に自動車も荷馬車も進行出來ぬやうな、このあからさまな交通妨害を、警察で看過してゐたのが抑初から不注意極まる當日大汗になつて骨を折つてくれた警官諸君に一休ならばその勞を謝すべきであらうが、自分は寧ろ今後の爲こうした放任に不滅の鑿を放たねばならぬ。

□「僅に一時間で行けますよ」と、腕時計を睨んで頻りに保證した石塚代議士も、圖らざる「日除の厄」に豫定を裏切られた上に、內野を外れても水害後の通路は動もすれば凹凸が甚だしく、竹野町では屢が危險で降車を余儀なくさせられたりしたなどの事もあつて、意外に遅れたので空腹を抱へた一行はヒヨロ〳〵として彌彦に着く、但しお陰樣で參拜を後廻しにして先づ卓上に運ばせた彌彦軒の洋食が大牢の美味にもひとしかつたのはまたこれ他日の思ひ出として忘れ難い語り草の一つとならう。

一の宮詣で

（中）　山花

□彌彦軒に午餐の間も、春城先生は酒とゝもに氣焰の量を加へて行く。矢吹男爵も華族で政務次官だと聞くと何となく隔想を禁じ得ない官臭や貴族臭など微塵もなく、快談縱橫、思ひ切つた平民ぶりに一見舊知の感がして、いつのまにか自分までが饒舌の客となつてしまつた。

□輕い浴衣に着更へた一同は、欄頭に、廊角に、或ひは窓下に適意に寛坐して語りても尚ほつきぬ趣味の談を續けた。煩累を脫して炎塵の全くいたらぬこの淨區に、襟を披いて淸風に對し會心の士と會心の事を話す。心神おのづから爽然として暢びざるを得ない。酒味を解せぬ自分迄が、つい沸き起る欣悅の情から、神社參拜の時間も忘れて、いつまでも遠山近水を好下物に歡談笑語の人となつてゐたい氣がするのであつたが、石塚代議士から促されるので、一同は始めて夢からさめたやうに、出發の用意に及んだのである。

□軈て一同は社殿に賽した。靈岳の雄、神域の莊、足跡しば〳〵この地に印する自分等にこそ必ずしも耳目を聳ばだてるには足りないが男爵にとつては生面の境として流石に感興を惹いたらしい。參天の老杉、颯々の涼風を送り來つて幽寂のおもむきも一入深きに、折柄白雲徂徠して高きものは山巓を鎖り、低きものは樹梢を掠め模糊たる風趣は正にこれ米家の巨筆を目のあたりにする眺めである。乃ち寫眞撮影の嗜ある石塚代議士がこの煙雲の搖曳する風光を背景として一同を立たせて得意の撮影に、記念すべき同遊の人々をレンズの中に收めることを忘れなかつたも無理はない

□一行の足は更に公園に向つた。園成つて未だ年所を經ず、密樹茂林の物寂びた趣にこそ乏しいが幾たび來てもその規模の壯大と設備の充實とには驚かずにゐられない。一行は橋上を步し水畔に語り、飛泉を掬したり、小亭に憩ふたり、悠々自適の快をつくして、やがてこの靈境を後に、再び自動車上の人となつた。

□ところで、この行に珍とすべきは、兎に角斯うした催しには既定條件とも稱すべき脂粉の氣の絕無なことで、全く精進潔齋の旅行であつたと、豪語か愚痴か分界不明の評言を試みるものもあつたが、何ぞ料らん自動車が例の著名な遊仙窟、名に負ふ岩室に入つたかと思ふと、ピタリと或る家の門前に停つた。或る家とは即ち綿屋。詩人の呼んで隱々亭といふこの境第一の酒樓である

一の宮詣で

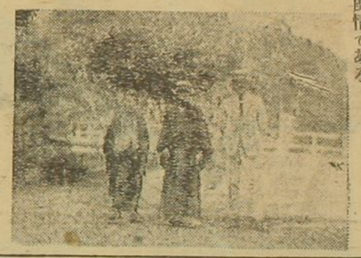
（下）　山花

□導かれる儘に更に角一同綿々亭の客となる。

□憩いたことは、一群の美人が忽ちわれ〳〵を迎接し、直ちに奥二間に案内すると、即座に杯盤が運ばれるといふ早業である。蓋しこれは東道の役を承はる敏な花塚代士が、時間を豫定して既に命じてあつたのだから、仔細を問はげば必ずしも不思議でない。マサカに一意われ〳〵をこの温柔郷に緩を下させて或る種の試練を行ひたまふ譯でもないと知れて見れば無理にも「精進潔齋旅行」を徹底させやうといふ硬派も出ず一同わるくない顔色で納まるのだから妙なものである。

□席に侍する仕八五六。この地の粋を鍾めたのでもあらうけれど、容姿態、皆とりく〳〵に特色をもつて、舉止何となく閑雅なのは意外であつた。村舎茅屋の間にこの一塊のみかうまで訓練され醇化されて來たのは、今更ながら奇觀に直面する心地に堪へない。

□長三州の書いた「綿〳〵亭」の三字額はこの家にとつて無上の誇りとしてゐるところで、自分等眼から趣味を解する方面には殊にこの額に計興の動くを覺えるのである、一行はこの額の下に冷しビールの滿を引きつゝ、相變らず春城先生の滾々として盡きぬ談話を序曲きに男爵の外遊當時の帝都談などで一座は又もや戯笑に渡を移すのであつたが、綿々亭上、別に綿々の恨を殘す人もなく一同未練なく此亭を辭して薄暮近いころ麓途に就た。一驟りも矢張り自動車であつたが、小酌に豫定の時間を狂はせたとて往復共に意外の伏兵か一行を



□ところで本日この行に奇とすべきは、往路に於ては内野の繁市街を阻まれたが、歸途も亦岩室の小酌に豫定の時間を狂はせたとて往復共に意外の伏兵か一行を待つてゐたのであつた。歸つて晩に憩ひ起すとは、春城よりも御光とに結婚した旅行とあつた次、繁盛の滿足をから傳て、司會者堀代士の心づくしも、然に感なくの滿足をから傳て、司會者堀代士の心づくしも、然に感なくの滿足をから傳て、司會者堀代士の心づくしも、然に感なく

□新潟に歸つて別るゝに際し更に一旅亭に小酌し、盃を擧げて互にこの日の滿興を說讃し合つた。翌彦行の前日も前々日も、連續先生と錦茶屋の饗宴に列してゐて重ねて此遊を試みた自分はさすがに渡れて翌日先生一行の歸京を見送るべく餘をさへ逸するまでに、昏々として深い眠りに落ちてゐた。男爵と先生と、おそらくはこの非禮をとつて寛假することであらう。

（寫眞は左より彌彦公園に於ける矢吹市島氏及び本稿記者）

十二行

○五十八歳と新たに言ひたる基礎の前面に時を
刻すべきやと思ふ果しなく月餘にもうんぬ
と思ふ話を得るうちに大石氏に佛典を讀べき
七比結果、左の數語を得た、

真如宮

蓮花

華嚴世界

常寂光土

無量壽國

如來之境

動靜一源

寂光刹

北等八海の内、無量壽國」の四字較々心に今すく
○恒河ともに東西に恒くの一日神田の玉座を過る
中別に珠藏摩尼佛と左の二點を

一 志くんの文人　三冊

鳥の子写本列帖つくり　表紙絵が
挿入さんと云ふ、書名は外題あるとも
りとあるが、書中の題は志くんの文人
とある、まぶよ後人ひえうのが雨宿りが
情交の蝶とうつたといふ面白あらう
よくある方法の題の如く、字は鉄
りんさうさうしくようこふのん小形本で
猶表紙に三冊別々の彩画がある、挿
絵も丁寧に書かれん、北斎の本では上乗
のものである、故和田重村の出版で価
四十四

一 琢華堂遺稿　眼鏡　二冊

椿山の物語を門人野口縄谷が版行
したものである、巻首の標紙に縄谷の自
題がある、内容は一四ようう転政
かある

○恒者ら恒子及ひ此ひとりとは隆華の号名と手入もて
はやや四五年及び昌板を志んと朱筆を加く
もやや七分通り校正を終らは何合活版を使へ
て業紙さもとれまのる痕かうく手数のかくること
が必要ひあるふひうち年を自ら満足するま
ひるもの四もと思ふ、吉んいとて全部みつから書

き直すとなるとは数日の労を思ふ然ばたとへ、気を
敢てする程の氣魂も無い、出来る限り米を入れて
底稿とするとまんべんなく四畳を使れば出来上
るであらう、どんなものの書頁となるか、多くの原
稿は一旦旅宿に収めて印刷相成るから一寸見南
かつき西洋紙なるが、随筆山陽の形式すんべ別庵
全部の稿を収め難い、多分のしく大きな形の
ものとする事となるであらう　（八月十九日記）

○先頃加人となられ内義様に多のの交りもあられ
が其の雅や花鳥の由来なども聞かせ申さる様に
聞の旅宿に見る様に雪の降り行きを伯母も
る宮家あり、志摩の殿の狼狽の言

十二行

を宮しとあるとある　　日上記

○家庭の書籍は全部屋敷にして一室し、唯此僅る所
しとみるものの花家書簡の帳十数程も書簡の束
が十数程で、此の書簡のなかに執着の念もあ
つたが村山秋浦が高く売られて出でて新めるを任
かせて千円を貰いたい事らしと勝手を附して
のれ直ち千円を貰ひたいとなれば二万円を
年数割で出すとの事、書簡のなかに重大なる英
の金を隠匿したるものと思ふけれども
換くらうと思ふけれども同書なるも
こ便する程のものが無い、差支あり強まるまで千円
○直着の慧星江戸生流研究（続き）

　　日上記

が寄稿者が完結を告げ、江戸の酒と
外国人が好奇心を日本の酒に記事が、他の
の参考となることもあるからこゝに収めるのである

誤　十二行

敎ほどにも參らざりしなるべし。それでも殉敎者などゝ有難がるべき代物なりや。さても其後、夜見世を覗けば、十字のついた陶磁の觀音像ざらに出現ます事いと不可思議なり。『法華經化城喩品』に梵天王が大通智勝佛を贊する頌に、聖主天中主とあり、勿論大通智勝佛が西洋の所謂神には非じ。又聖母と申は、皇帝の母の尊稱にて、元來は則天武后を申す也。されど支那人も崇拜する聖母といふは、一に天后とも天妃娘々とも天上聖母ともいひて、媽祖の事なり。此人は宋朝興隆の乾隆元年三月二十三日酉刻に降臨したるおみき婆さんなり、されば聖母とあつても天中王とあつても、うかと早合點したまふ可からず。

――大正十五年七月二十日
驟雨一過夕涼如水――

酒のお江戸

忍項寺　務

白鷹とか菊正宗とか云へば、我々とても我慢出來ぬ譯だが、百年前の話であるから何分お靜かに願ひ度い。「足下の得栄は如何、不佞は大ドロンコに及び、大なる情頭あり」（繁々千話）。さてドロンコとは紅毛の言葉、醉た事とは京傳老人も少々くどい。私も負けぬやう管を蒔繪の色に、一寸古の通人氣取りで銘酒を調べて見よう。

「常に山屋あたりの名酒を取よせておきの、ソレなんぞちよつぴらとした物か、又は近所だから武藏屋あたりで呑かけの、とゞつまる所が北國の魔界サ（夷國滑稽羽栗毛）

「酒はいゝのがいゝぜへ、木倉屋で琉球の三ノ字か、谷やの白菊がいい（而美知之媤）

「こいつアあんまりあめへ、ヲテラかスヤマだらう、タキがあらばちつとわつてくんねへ、したが三河へ水をかめちやアあやまるぜ。（仕歷文庫）

北國と南品、それから辰巳あたりのセイザ、遊女に伴ふ酒は斯うでもあらうか。或者は之を評して、

「半可に劍菱の辛口あれど、極婆に味淋酒の甘口なし、傾城隅田川のながれの身なれば心あさしといへど、艶男に滿願寺のうまみある事は、味ふべし（通客一盃記言）

といへば、他の人は伊豫節の聲美はしく、

「これは新川名酒の名寄せ、強い劍菱、男山、泉川には四方の瀧水、白菊、泡盛、玉みどり、宮戸川には滿願寺、七つ梅には三國山、かみやの菊に壽、めでたい老松、養老酒、萬年酒。

と謠歌するのである。一口二口飲んで見て、『こりやアあやまる、いつものロを取りに遣りな』（大通契語）、といふのは大の半通だと聞くが、先づ何をがな試みよう。田舍の鬼殺しでは情が無い。

○隅田川

浮寢の鳥も下戸ならず、其醉心地は猪牙舟の柏餅となつて、窮寇の華の盛るを夢に見た。

「飲兮歌兮。直往徑歸。墨水之流。酌而不竭。（小說土平傳）

「彼松江之鱸。不如日本橋之初鰹。
彼新豐之酒。焉及隅田川之諸白乎。
（彙軌本紀）

「墨水美酒。我豈敢不拜哉。（雜文穿袋）

「長崎屋のこはんが所から、隅田川をもらつた、さちせ、かんをさせや。（通言總籬）

此酒は明治元年の「當代全盛格段付」にも、淺草隅田川諸白と記される。明和頃から盛んに文人墨客に嗜好せられたと思はれるが、發賣元は淺草並木町の山屋半三郎といつた。

○四方の赤

此比まで木曾街道の玉味噌の如き汁に、一膳めしひさぎし家も、ヨモの赤に古みりんを加へ、よし原豆腐のでんがくに、鶯菜飯も最うふるしと四季の献立（妓娼精子）、などゝあり、之れは味噌であらう。いや元來酒の名であつて後に味噌の名に移つた杯と種々議論もあるが、酒として使つたものには、

「四方の山のどかなる春に遊びて、四方の花にちつと忍れみ〳〵申すぢや。（鸚帶一寸德兵衛）

「露草の玉と光る月の宵に、マルニの清酒をのんで樂しみ。（花の下長物語）

劍菱は四方久兵衛も賣つてゐたやうだが、神田昌平橋外の内田屋が有名であつた。前記のマルニは内田屋の商標丸の中に二引を云つた。

○滿願寺

攝津川邊郡滿願寺村から出た滿願寺九郎右衛門が池田に移住して造つたもので、酒造業を創めたのは遠く戰國の初期、應仁時代であつたと傳へられる。伊丹の鴻池よりはずつと早く、既に文祿慶長の頃には、將軍家の御用酒として江戸表に移出してゐたといふ。慶長十九年家康が池田郷に御朱印を下附された節、この酒に「養命酒」といふ名前を賜うた。その商標は小判の中に三引きで、俗にお寺と呼んだ事は、前記の仕懸文庫の記事にも見る通りである。

○七つ梅

「ひろふ神」には、「夕に七つ梅を御す巴人の曲を謳ふ（四方の巴流 狂歌堂の文）

「このふみや、四方の赤の一本氣にして、かりにも水くさき駄酒をまじへず、……きたりて名酒の味をなめよ。暖簾にしるき扇巴、これを居酒屋の門にかけて、一字の損益をまつといふ（宿屋飯盛の文）

「見切若殿忍姫家。礫打忠臣働命涯。鯛味噌津四方酒。一杯呑掛山寒鴉。（寢惚先生文集）

などで明白といつてよい。併し酒銘としては受取れぬ所もあり、或は四方の瀧水の俗稱かとも考へるのである。

「第二番目にて鯛の味噌ズに四方のあかの化物、ちよびとした所が龍門の瀧と云所さ、味噌ズの中に打込れた上から、四方の瀧水はほんのたとへにいふ板木やの難義（辭闘戰新根）

此本には酒樽に扇巴を付けたり、四方の赤と瀧水を同一に取扱つた如く見える。

○四方の瀧水

和泉町の四方久兵衛が販賣したものこしなされ、朝に袖の梅をあがる」と記す。古川柳には、

神酒の名にいゝは木綿屋七つ梅

とあり、木綿屋の製品であつたといふ。「川邊郡誌」によれば、池田の酒銘を擧げた中に、

木綿屋の三寶、木屋庄兵衛の老松
小西の白雪、大鹿市の三國山、
木屋定の男山、紐屋の白菊、
紙八の菊印

など數限り無い。そして此等は各〻江戸の新川あたりに取引店を持つてゐた事であらう。さりとは餘りに煩はしい、ア、醉た〳〵、「鶴さん水を上げよふ（大通契語）イヤ又酒の事か。唄を一つうたつて轉寢とせう。

「酒はてんとくさ、何であふるべいていな、やれさて〳〵、尤もぢや、さすが押へべい、肴がない、おややれ醉ふたでおんぢやるさ、いけぬ口舌、おりやくすぐるべいとの、つて〳〵つて〳〵〳〵このほんかえ。（四天王楓江戸粧）

「守貞漫稿」によれば、天保府命前下川柳には四方の瀧など〻呼んでゐる。

「一樽われにす〻むるに、瀧水をもつてし。（四方のあか伯樂宴集序）

「御祝儀には、鰻でもお奢りなされませ、瀧水の一升もお買ひ遊ばされませう。（時桔梗出世請狀）

「新酒か古酒か、劍菱か、但しは四方の瀧水か。（四天王產湯玉川）

瀧水と劍菱は似寄りの酒で有つたらう。或は前記「仕懸文庫」中のタキがあらばちつとわつてくんねへといふ文句が、劍菱の商標を畫いてタキと訓ましてゐる所から考へて、同一の酒であつたのかも知れぬ。

○劍菱

「三河へ水をかめちやアあやまるぜ」

三河ものへ水を割つて劍菱と飲めるといふが、之れは似た山の詮議、伊丹の津の勘の劍菱といへば、頼山陽のお好物で、その戯作攝州歌にも、戰血滿地化嘉禾、伊丹劍菱美如何と氣焰を擧げたもの、

「そこでなア、劍菱を一升引みんたんと喰はしたワ。「イヤ一升では二

り酒の樽數は、毎年大概八九十萬樽、江戸近郷にて釀す地酒大暑十萬樽といつてゐる。その値段は文化文政中、上酒一升に付き二百四十八文許り、安政に降つて一升三百四五十文より四百文であつたといふ。現今のやうに稅金を飲まぬ昔は美しい限りである。

（一五、七、二二）

古ばくち打（狂言記輪講追補）

「神田本太平記」康安元年十二月細川清氏叛逆によつて足利義詮都落ちせし時、楠正儀、佐々木道譽の邸宅に入る。後正儀また都を退き、道譽再びその舊宅に復したる事を記して「例のフルばくちうちにだしぬかれて楠太刀ト鎧チナクサレタリと笑ふ族もおほかりけり」と。當時すでに佐々木道譽の如き權謀衒策に富みたる人をもさしていひしこと知るべし。

（仙秀）

性畫の流出入

（五號二八頁參照）

南方熊楠

紀州日高郡鹽屋村の醫者羽山維碩の彗星夢物語八編上は文久元年の手記に係り、清國人羅森の續日本日記を收む。開港當時横濱下田間を視察した記事で下田に就て云く、再日往遊街市、見舖屋或編以茅草或乘以灰瓦、比鄰而居室內通達、故曾入門見其人、再入別屋而亦見其人也、女人過家過巷、男女不分、雖于途間招之亦至、婦人多有裸裎、傭工者稠人廣衆不差見下體、女看姪畫爲平常と。是れ下等婦女の記載で、看姪畫爲平常とは外客が試みにそんな者を見せたと自白する者、つまり自分の恥曝しだ。廣東人の間に良〻起居したが、其輩みな穿公（ツエンクン）と稱し春畫をもちあり、出來さうな女とみれば私かに之を示して春意をそゝつた。又龍動に在た日、故中井芳楠氏（横濱正金銀行龍動支店支配人で明治卅五年頃死なれた）の話に、柳河春三は春畫の文句を英譯するに妙を得て夥しく金儲けをしたから、春三と言はず春畫と通稱されたと。是は明治初年の事で有らう。甲子夜話續八七に天保三年琉球來聘の節、隨員江戸の寒さに苦しむをみて伽に出た人が彩描の春畫を懷中より出し示し、是は如何と問ふと、斯る者を抱かせ賜はらば寒さを厭はず三年は居るべしと答へたと見ゆ。吾が慶長十四年頃成つた明の謝在杭の五雜俎七に余從番舶購得倭畫數幅云々、又有春意便面一摺、其衣冠制度甚爲殊詭、設色亦不類中國也とあるは源氏繪抔を指た樣だが、其三百餘年前元の周公謹の癸辛雜識に倭人云々、其裏扇用倭紙爲之、以雕木爲骨、作金銀花草爲飾、或作不肖之畫於其上と云るをみると、どうもほん物のわ印しを扇に描いて日本から支那へ渡す事、元明數百年の間、絶なんだと判る。明の楊守陳の議倭に且其所賈刀扇之屬非時所急、價不滿千、而所爲蹂國用敝民生、而過厚之者、一則欲得其向化之心、一則欲○其侵邊之患也とあれば當時支那人が買つた日本扇は夥しい物、隨つて春風を送り播がした力も大な事だつたらう。

外國から本邦へ不肖畫を傳へた例は予一も知ず。但し日本の春本に紅毛男女乘戰の體をよく描いたのは往々みた。曾てアーサー、モリソン氏（大英百科全書十一板に其傳あり）を其宅に訪た時右樣の板畫數葉を示され、鎖國時代に和蘭より入た物に據て畫いた事歴然だと語られた。昨今ポート、サイド抔でフレンチ、カードを往復の水夫が多く買ふ通り、昔もそんな繪カルタ抔が水夫の身に添て渡來し、之を得て蜀を望む日本人が高價を懸て優等品を望んだから、追々小形ならぬ繪も秘密に輸入されたのだ。司馬江漢の春波樓筆記に云く、松浦侯予に向つて曰く、

朽木隱岐守の所書あり、ウエイレルドベシケレイヒングといふ、此畫を求めん事を欲す、余爾を以てす、余江漢諾して應命、則朽木侯に謁して此事を話す、竟に其書を松浦侯に贈る、其中にイギリス船平戸島に入津したる事を誌す、其頃松浦法眼といふ人隱居して政事を取る、或時婦女を從へ、イギリスの船にのる、船の內數品の額あり、其中に春畫ありけるを婦人是を熟視せずして拜す、イギリス人以爲く、嚮の頃吾國の佛法この日本に來る事あり、其ならん事を思ひて春畫を拜するかと。此件本とカピテーン、セーリスの日記に出で、此人東洋から猥畫を英國へ持歸つて物議を釀し、其品燒却された事は林君既に述られた。其日記に一六一三年（慶長十八年）六月十二日セーリスの乘船クロウヴ號平戸港に著た時多くの男女見物に出かけた、セーリス較や上流の婦女數人を許し自室に入しむるにそこに掛けた額に嬌女神ヴエヌス其子クピツドと戯るゝ圖較や放恣に畫けるを見て聖母と其子基督と心得下座して歸命頂禮した、且つ同伴中の異教者に聞れぬ樣セーリスに耳語いて自分等は基督教徒だと告げた、それで此女共は葡萄牙のゼスイトに教化された天主教徒と分つたとある（一七四五年板アストレイの水陸記行全集一卷四八一頁）天主教は口でこそ希羅の古教を排擊し盡したれ、人心を和らげ坊主の禁慾調節の必要より聖母を初め諸女尊者の像を專ら希羅の諸女神より寫した者多く佛國ツールの全美聖母寺の本尊の如き古希臘名工が嬌女神ヴエヌスを畫いた法を襲ひ、ツール市內の美女艶婦苟くも一點の觀るべきあれば洩さず聚め、額は誰眼は某顏は誰鼻は某と、よい女のよい所のみ撰集して聖母像を畫き成した。隨つて親兄弟の不同意をかこつ相思の男女を添遂げしめ、子無き夫婦に子を授くる靈驗灼然たりと評判高し（一八一二年パリ板コランド、ブランシーの遺寶靈像評彙、二卷二三八頁）英國のナショナル、ガリーの如き、風儀上より展覽繪畫の採擇尤も嚴正と稱せらる。それにすら掲ぐる所の聖母の像に信心よりも姪想を起さしむる樣な物無きに非ず。去ば十七世紀の初め日本に入た聖母像には多少放恣相の者有て、信徒は有難いてふ一念より邪想を起さず、或は寧ろ邪想を起すが有難さに隨喜一層を加へたので、其輩ヴエヌスとクピツド相戯るゝ畫をみて聖母と基督と心得禮拜したとみえる。件のセーリスは英皇ジエイムス一世の信書と贈品を持て將軍秀忠に謁すべく來朝し實に英國船に乘て日本へ渡つた最初の英人なるに——是より前キリアム、アダムスあれどそは西班牙船に乘てきた——來る時も去る時もか樣の畫を携へたから察するに、其頃東洋へ往復した船には必ず多少斯る畫を積で有つたのだ。その前秀吉の治世に渡來した葡萄牙船客の淫行多かつたは德富氏の豐臣氏時代乙篇七六章にみえる通り、此輩の內にはヘンな畫を持來つたのも多かつたゞらう。

是等より古く畫像や雕像で異態な物を外國から傳へたは佛教で有らう。喇嘛宗の歡喜佛に限らず、瓜哇の佛像に

男女根を備へたが少なからず。立川流の密教など決して日本人の創作でなく祕密相經に金剛嬉戯は和合出生之義とか當知彼金剛杵住蓮華上者爲欲利樂廣大饒益施作諸佛最勝業、是故於彼淸淨蓮華之中而金剛杵住於其上乃入彼中發起金剛眞實持誦然後金剛及彼蓮華二事相擊成就二種淸淨乳相一謂金剛乳相、二謂蓮華乳相於二相中出生一大菩薩善妙之相など述べ最後に大毗盧遮那如來偈を說て曰く、快哉妙樂無有上、諸有正士應當修、今此祕密妙法門、有罪染者不應受、祕密蓮華此無上、金剛嬉戯卽彼法、金剛蓮華敎亦然、總攝毘盧遮那智、如來說是頌時、有無數百千殊妙瑞相一時出現と結びをる。經玉の稱ある華嚴經には菩薩が童女寶女等に現する事多く何れも妙相を示し妙說を吐く。婬女婆須密多の如き、婬事の諸相により攝一切不捨離等の三昧を衆生に得せしめ、其前生に見て感じた妙門城は如來其の閻(ケハナシ)を踏むと其城一切悉皆震動、忽然廣博、種々寶花散門だ。こんな事ばかり佛經に多いから、ひまな坊主は種々と妙想を馳せて作り上た所謂祕佛の內には一目みると卽身成佛する樣なが少なからず。予が內覽した某大寺の降三世明王足下の大天夫妻像の如き瞥見して忽ち氣絕せんとした。又明治廿九年頃予が京都骨董商藤田彌助氏より買て大英博物館に寄附した掛軸彩畫の本尊は、愛染明王に兩翼を添たやうな飛天夜叉形の奮怒神で左右に立た四夜叉あり。其一つが片手で鉢を擎げ、其中に公家の男女對坐して女は袖で口を蔽ひ有た。何といふ神か知り得なんだが男女敬愛を司どる者に相違なく、奥羽觀跡聞老志十に見えた赤澤山の天狗佛はこんな者かと思ふ。是等何れも根本は佛敎と共に輸入された者で、希臘の諸神像が多く後世歐洲祕畫の手本と成た如く、本邦此種の畫をかく者に少なからず所據を與へた事と惟ふ。(七月三十一日)

黃表紙輪講を讀んで疑義一二

山椒生

○三田村先生のきん〳〵について御說大變面白い御說だと思ひますが、これはちと力負けの方ではありますまいか。きんは寧ろ金看板などの金でぴか〳〵光るといふ方から來たのではありませんか。無論だらうですが、思付いた儘を書付けて、御意見を伺ひます。

○要從一次

これは[illegible]といふ意味にあてはめた杯と[illegible]理窟から來たのではなく、うろ覺えのまゝを、少し加減に書いたのから來た誤でせう。

○とんちき

とんは鈍の轉であらうといふ御說に賛成したいと思ひます。「鈍太郎」「鈍

○春城氏の修行と千日間没頭し追々拾取るこ
と、出版部倉庫に残りたる舊稿を出し拾す
るの必要を感じこの頃前面倒を思ひ出で漸やく前
年新版や発行と掲載せしの切りぬきの
ものを入帳せし、追て頒くべき見本全
部悉くみる抜味淡薄なるものもあるが
あることが見出せり、可なり長篇にて抜味淡薄
かるべきものが四五篇もあり、又隠書
も雅俗おのおのあるもの可なりに得た
る印刷物の切り抜もあるから組版本の形
に組直しも弐頁位なるものもあるが
つきこの頃なりけれども抜味淡薄なるものは
一冊を省く分量があり、殊に隠書に充つべき
稿も一冊この多きなるべくしてくるものもあり、伝つて二冊と
して[illegible]を異にし[illegible]刊すべきやの思案中
なり、二冊とするときは何のを先きに出すべき
やなんも一考を要する、何んでやはり北海に充分四
稿を整理し取捨を要重す、他の巻の編
のあるべき必要あり、回顧録の入るべきものも
日多く捜し出したんだ北の一類の後の刊す
る[illegible]八別にもこんも元編の[illegible]要あり、
[illegible]と既往の経歴を記り編集を急くに後悔も
あれ八時間[illegible]易行の後んも自重が肝要
也、

八月廿四日記

十二行

○八月廿四日　晴　朝食の後のち、昨日の課として修めつゝある随筆の稿を編輯し終る、午後高麗版大蔵経に関する日本人に就て執筆、日本人に高麗版に関する論文を出版したるもの、即ち之れを以て高麗版大蔵経の研究に関する論文を出版したるもの、三徳山花を高麗経の研究に関する論文を出版したるもの、川瀬氏の他へ移して保護したること、曝山の方式、朝鮮海印寺に今北版の存在すること等を記す、夕方茅原三樹（東吾）あり、初見の人なり、大概如電不花の栗山神武陵を拝する詩を先輩版に附しくるるを喜ぶ、北人僧雪堂の経歴を記き、雪堂研究し居ること即刻物を

贈る、余雪堂の書を五べる其閲歴を詳悉せず、北印刷物発売に関することを得、橋崎幸一郎氏を訪ふ、山洋俊夫の貴物を高らし来る、此人俊夫の新編（也遺）物概物二幅等珍とすべき所の古瓦器一冊、掃雪物を極め居る、と称して孫花する、其平八王伝後と共に送る、人也、北日又春陽堂より三田村鳶魚の尾殿大やり唄一冊を貸与せる、鳶魚の考証に解んとる也、夕刻歌数首、

○近く随筆の稿を修めつゝ、見て、数味に関する回

稿可ようゝ出来り最初の稿を見て三分の一増加ます
試みゝ順序を立て排列して見ます約三倍の如
し、余の趣味いや、興味かあれば、こん丈を一冊と
て出しても世人に受けるや否や疑問也、あり考量
と雲す

一寺の趣味の測業　（去一冊）
一茶人の趣味教育
一閑香
一包装と製地
一書間の六趣味　（去一冊）
一書荷蒐集より得る三十則
一書荷の八難

一書荷龍侯　（去一冊）
一日記の趣味
一日記をかく習慣を養へ
一反故趣味　（去一冊）
一古書蒐集
一囲碁の趣味一斑
一囲碁發生法十二則
一豆本蒐集　（去一冊）
一印の趣味
一印法一則
一紙
一蒐集の心得

一 含蓄の妙味
一 掘出し物の弁
一 書画六面觀
一 弾の文様
一 骨董の歴訪
一 昔しの旅
一 旅の昔楽 （長寿）
一 物名礼賛
一 酒中趣 （長寿）
一 天百酒 （長寿）

○今日下谷の文物堂を訪ひて左の目録を購入す 近年の大漁なり、中に就き珍らしき尼子任久の納経法華経八巻 黄表紙家本 第五花物語外二種、生田萬手校抱朴子等とする、左に書目を掲ぐ

一 法華経 八巻
各巻首部に長方形の左の印記あり

三千部内 佐々木伊豫守源経久

巻尾に左の識語を刻す
佐々木伊豫守源経久

月叟居士
往生六方有縁字刊梓功勝積接天
人無非人受持者齋戒佛道幾千年
永正十二年乙亥正月吉日
尼子往久与天文十四年十一月八十四歳
歿家康の生んだ年は天正十一年也

一徒然草　二冊

巻尾に左の識語を刻す
北抄者壽命院主安法印法眼家
故廣之暇廣見表聞而漸終篇
余投筆最寄之餘揮短毫耶

慶長第六辛丑孟冬九日也足皮素然
徒然草と慶長二版与北書所傳表十六
本ヲ以和四〇清法所の印記与

一應仁記　詩巻合一冊
北書歌俳刊
也十二行本ヲ以片假名本也北書稿
歟と

一栄花物語　十九冊

慶長活字本に北の大部の書あり、徳川期の末に小本を刊したれど大本は全部完成
こゝもらず大本の版本はこれあるのみ、惜しむ
べし十七巻一冊を闕く、

一全文抱朴子　内外　八冊

此書生田道満の手づから校する所往々
自家の義を挿むも、各巻の末に校勘に関
する識語あり、才一巻の末に云く
奥書　文政九年　四月以矢部希賢之本比校
道満
異本　文政十年　閏六月八日以井原正孝之本
十二行

比校
元本奥書
右抱朴子内篇一冊以平津館之本校合訖
文政十三年　三月十四日　正孝　花押
生田道満

生田萬ハ平田篤胤門なれども城後柏崎に住し
大塩平八郎の乱に応き乱をおこす、其の仕末
ハ五巻の北城清話に詳、北書寫乱系
の神田息軒の家にも出づ、蓋し偽乱
あるべし、而して北書の末巻に柏崎橋口花
右と録してあるとゝ柏崎橋口花
こたゝ〳〵こと知るべし　右もと柏崎

各巻に「利錦屋蔵書印」の印を捺す
とがまや蔵書印 生田の羅也
所謂祇園社の祇園子 生田と同門なれば生田の師匠 桂口宗羅名は英哲
こすりこの植口の慈恵による、寺院なれば道場 熱烈満座とす

一 桂林漫録 二冊

北斎屋代弘賢の「不忍文庫」の印記あり、巻中弘賢の考証を闡源かしなる
こゝの少かるべ

一 口授 一冊

北斎天禄の古刻本を其後文化四年に模刻せしなるべし元本の大須文庫にあるこ
と巻尾の左の識語にて知らる

寛政十一年己未仲冬以大須文庫古
謄本摸寫 令平安書写業 上木傳
不朽云

大館高門

勅署口授 といふの朝廷の儀式 音楽 其
他万般 記臆を要すること 歌謡体
なし 故に記臆 所詠 こ便なるしめ
こゝにて十九門 こなる ミる七十八曲あり
左衛衛相公の弟一小郎 幼ら聰慧
遊戯の工風こ成ること 唐 こあり 此
書多得ること 西難し

十二行

一　官版扶桑略記　十五冊

余此書を家蔵と比するに一本あり、重複を辞せず更らに購ひ入れるなり、狩谷
望之の校勘本に據り校合したる書なるが故也、官版の此書は注本を
基とせし刊したるものなれども、尚ほ古
鈔本に對校すれば誤りあるものあり
うす板者は尾張真福寺本其他と
對校し、好る当るものあり、此書正
板に比べしと云べし、此書は神田息
軒の蔵本の書入を自寫

十二行

しるしたるものなり、外一冊の巻尾に云く
以影尾張真福寺本比校畢　校語
云原書是也、不倣之　又次古写鈔本
変校、校語云鈔者是也、不倣之
望之

右以校本自書写了
時文政十二年四月廿五日
息軒

一　六書通　唐本　十一冊

此書各巻に「楊氏蔵書」の印記と「楊」
の陰印あり、楊は濱村の姓なり、

大澤[illegible]六の手写本なること知るべし
首巻索引一冊補寫各巻の数題頭
に[illegible]六の考注あり古印人の紀念なるも
孫[illegible]すべし

一 古暦沿革略志　写本　一冊

山崎美成輯る所の古暦天正寛永
芳[illegible]の暦[illegible]流寛文延
寶天和貞享の暦本を摸写
したるなる也、馬琴等の催しなる歌書
今に出しなるまき巻末に双六のるも
数めあり

北外三四の書を以なれども此の如く脱するまでなるの、双上梅入出の
内経と六書あり神田息軒四巻あり北人の抄録
人余もまた全部の出をまとめるとのことなる文行堂と余
の名をかし引元ら七北其内ら巻千冊入へなる

八月廿七日記

○前年稀書複製会なる新めて上梓す影と謄しも
北游都西美遊の一書漸く複製出来つれ来しい
ことい出と数ヶ月前に説と流るる各紙幅に巻
めの紙幅のある提灯を[illegible]
かなる

○日本及日本人の嘱と應し高橋花圃のもと
紀一七主の稿す、偶と緑山の三大花月録を獲

て其序を省き、余の本書を訓讀するに
一二行正すべきあり、此序文は三大部の由来者
を省く

宋本　ハ湖州路思溪法寶寺彫刻南宋
理宗嘉熙三年の版なり日本後宇多院
建治元年近州安山寺僧傳曉宋に入り
將来したるもの

元本　杭州路南山大普寧寺の藏版なり後
の至元十四年なり二十七年に至り殿堂
元の末五世宗の時以思溪藏の二本
校正す故に元本と名くこの此藏ハ未詳
何將来何寺も記載なし云云至物走湯郡

十二行

稀書複製會々報

第四期　第廿二回

大正十五年八月

第四期第廿二回配布本解説

猿蟹合戰　一冊（原本林若樹氏藏）

これは鳥居派の中にて特に有名なる浮世繪師清長の筆に成れる赤本なり。原本の下部ところ〴〵毀損して不明となり、又猿の顏に濃墨を塗沫したるもあり。それ等は複製に際して濫に筆を加へず、其儘になし置きたり。題簽は全く失はれて其形を明かにせず、複製本に附したるは三村竹清氏の考案並に揮毫に係るものなり。詳細なる解説は次回に讓る。

滸都洒美選　一冊（原本三村竹清氏藏）

本書は志水燕十の著、天明三年正月新吉原大門口細見改所板元蔦屋重三郎の梓刻に係り、特殊形式の遊女評判記を兼ねたる洒落本なり。序文七丁、本文三十丁、計三十七丁より成る。安永六年に出版されし『娼妃地理記』の後篇と見做すべきものにして、新吉原廓内を州郡に見立て、前篇の趣向を踏襲し、これに著者の新意匠を添加して、各丁上欄には仲の町張りの遊女の提灯を掲げ、各樓の紋所、遊女銘々の合印を現はし、下段には種々の文體にて綴れる評判記を收む。また序文には著者一流の漢文體の洒落文、四方山人、朱樂菅江、並に前篇の著者朋誠堂喜三二等の輕妙なる讃辭あり。

本書を説明するには、簡略ながら此時代の新吉原の概要を語るの要あり。吉原の歴史に就いては今期刊行の『吉原戀の道引』や『傾城鵰』等の解説中にて述べたる如く、明暦の移轉後萬治二年に漸く家並も整ひ、延寶度に至りて全盛を極めしが、彼の堀田正俊が斷行せし天和の大改革によりて痛撃を受け、

武家の吉原は一變して町人の吉原となり、散茶、局の跋扈となりて元祿の舞臺を飾りしも、再び衰微して明和に至り、吉原の華と謠はれし太夫は滅びてその影を隱し、いよ〳〵寂寞裡に餘喘を保ちたり。されば廓内に豪華なる氣分は次第に消え行きしも、低級化せる吉原は明和安永より又々擡頭して文化文政度に於ける最後の隆盛を實現したり。この時機にあたつて『娼妃地理記』は安永六年に出で、更に六年の後この『滸都洒美選』の發行を見たるが、當時の吉原は純然たる民衆的歡樂鄕と化し、太夫は全く廢絕し、格子も亦た昔日の面影を失ひたれども、なほ餘燼再燃の時代ともいふべく、安永四年には吉原に『俄』の興行あつて江戸八百八街を聳動せしことは、『吉原春秋二度の景物』に據りてもその一端は窺はれ、また安永六年版の『明月餘情』を見ても『俄』の如何に大掛りなりしかを追想し得らる。此頃の所謂粹人通客の多數がこゝに吸込まれて廓を賑はし、隨つて當時の戲作者流は筆を花街の事情に染めざれば、粹といひ通と呼ぶこと能はざるかの觀ありて陸續出版されし黃表紙や洒落本の題材は殆ど皆娼婦遊里に關するものなりき。

『滸都洒美選』は『娼妃地理記』の跋文の末に後篇として「右明年出板入御覽可申候そこでことしやみせんにて御座候」と洒落交りに豫告しながら、遙におくれて六年後の天明三年に著者も志水燕十と變りて出でたるは如何。蓋し朱樂菅江の序文に「月成（喜三二）硯と墨を斷物にするとも、燕十が筆さき猶世界を書まはすに足りなん乎」とあるを見れば、喜三二は此のころ筆を戲作に絕ちしが故に、後篇の著作を果さゞりしものならん。而して此書も前篇の趣向其儘に繼承し、吉原を月本國と總稱して五州に分け一ヶ町を一國、妓樓を一郡として名ある遊女を名所舊跡に見立て、なほ衣紋坂、大門等を始め茶屋、商家などを島嶼とする事前例に同じけれども、上欄には前に述べし如く仲の町張りの遊女の提灯を揭げ、その紋所や合印を以て全盛の姿を偲ばしめ、また評判記の文章は或は謠曲めかし、或は戲文體に綴りて新趣向を加へたり。されど和歌俳句を籍りて、岡眼八目の評を輕妙に書き流したる點は前篇の例を追ひ彼れの『大月本國之圖』、『月本國地理』に對して是れには『月本六玉川』と題し、其名に川の字のつく遊女六人を六玉川に見立てたる一圖を挿めり。

卷中に擧げたる妓樓遊女を天明七年版の細見に對照すれば、江丁國卽ち江戸町一丁目にては、額伊勢屋、竹屋、松金屋の三樓は見えず。遊女は松葉屋の花紫、歌姫、歌之助、松風、若紫、花里、島之助の名なく、彌八玉屋は白糸一人お職に殘り、角玉屋は小紫、松浦のみ存し、扇屋には花扇、瀧川、夕榮、七越、田村の五人見え、佐助萬字屋は全部入替れり。二丁國卽ち江戸町二丁目にては、家田屋は削られ、遊女は、角蔦屋は姫浦、丁子屋は和歌島、龜菊、秀鶴、靜玉屋は梅の井などが殘り、若那屋は若那、松山の二人削られたり。角丁國卽ち角町にては中萬字屋の一樓を存するのみ、こゝの四名妓と謠はれし繪合、初紫、みつ綾、名にしほの四人中、みつ綾は細見には隱れたり。京丁國卽ち京町一丁目にては小松葉屋、四ツ目屋は影を留めず、遊女は若松屋にて、吾妻路、小泉、姫綾、名ひき、松山、菊の井削られ大俵屋は全部入替り、岡本屋は歌町、大崎が去り、額俵屋は連山一人猶お職を張り、丸海老屋は卷篠、在原、富高、松風隱れ、大文字屋は二藍一人お職にて殘り、鶴屋は雪ます、紅梅が見えずなりたり。新丁國卽ち京町二丁目にては、角金屋、大菱屋、桐屋の三樓を存し、他の仲の町張りの樓名は失はれ、遊女も角金屋に七綾、大菱屋に象潟、明石、桐菱屋に姫鶴、萬菊が細見を塡めぬ。この對照によりても、此書の開版より僅に四年間に妓樓の興廢、遊女の出入斯くの如きを見ても、廓内の變遷いかに早きかを知るべし。

著者志水燕十については、『狂歌知足振』には「鈴木庄之助、根津住、戲作者」と記し、『青本年表』には此說を否定して、燕十を喜多川歌麿の戲號なりと斷定せり。されど今日に於ては歌麿と燕十を別人とするの說、識者の間に是認せらる。今その詳傳を得るに難けれど、『萬歲集』には「志水つばくろ」と署し居り、志水裏町齋燕十と稱し俗稱は鈴木庄之助なり。好んで漢文體の狂文を書きし如く、本書の序文もまた漢文體にして、臺閣西之隱士としたるは、按ふに現今の根津の清水町の裏町に住せしよりの名ならんか。印章の文字も「志水裏町」とあり。また「志

水裏町齋燕十子は雜談本の戯作者にて常に凡上の草稿を刻す」と記せる書あり。なほ三村竹清氏の藏書中に、算術書の『塵切記』を改竄して『利得算法記』と題し頗る詳細に算法を説明したる書あり、「天明四年甲辰春大簇丁子中西後學志水裏町齋採筆於大堤下耕書堂」とし、印影二個のうち上は「志水裡町」下は「燕十之印」の文字あり。これらより推定するも燕十は戯作を其本領とする者にあらずして有數なる算家なりしが如し。

前々回配布本解説

抛入狂花園　一冊（原本米山堂藏）

本書はその序文にいへるが如く、漕川小舟の『見立百化鳥』に倣ひ、其頃江戸に名高かりし人物を、それに因める器具、商品等に配合し、之を活花に見立て、最初の一圖には色摺をさへ加へたる所謂江戸趣味の繪本なり。版元は本石町四丁目堀野屋仁兵衞とあれども、筆者の署名も刊行年月も明記せず。然れども跋文中に「瀨川何某、其人とその花と對したるを書集め、予に端書せよといふ、素よりふつゞかなれども求めに應じて筆をとり終に小冊と成す、號けて抛入狂花園と云」と記し其終りに蓬萊山人と署名せり。これ恐らくは本書の作者なるべし。また開版の年代に就いて原本の前所藏者は表紙裏に「此書明和二年以後の出版也」と記入しおけり。こは五丁裏鈴木春信の條に「明和二年酉三月繪合云々」とあるに據りしならんが、四丁裏中村仲藏の「さかづ木」を傍證とすれば、刊行年月を推知するの便あり。即ち先づ花器に見立てたる藁束は忠臣藏五段目の稻むらにして、秀鶴（仲藏）が當時大當りを博せし定九郎に利かせたるなり。こは明和初年の事なれば刊行年度の證としては尙薄弱なれども、更に菊花に擬したる盃は曾我對面に用ふる小道具にして、文中の末に「此花當春はじめて生けられ出來よく見る人うれしがる」とあるより推せば、明和七年の春狂言に秀鶴は釣狐の工藤を勤め、狐の面とれて對面になる趣向大當りにて好評なりしを取入れたる如し。故にこの書の刊行は明和七年又は其翌年と見て誤なからん歟。

本書は序文一丁、本文は三十六瓶の活花と跋文、

及び豫告にて廿一丁、合計廿二丁より成る。而して活花の第一圖に限り之を色摺としたり。かゝる樣式は此時代の繪本に珍しからず、追て複製せんとする『役者手鑑』も其第一圖と最後圖とは色摺なり。又時代の稍古きものには其一圖だけに筆彩色を施したるもあり。貞享五年版の『友禪ひながた』の如き是れなり。寶曆明和頃の繪本に所謂摺込彩色を工夫したるは橘珉江にして、其後明和二年に板木師と摺師と協力して板木に見當を附くる事を工夫して色摺を摺出したるは『燕石雜誌』などに見ゆる如くなり。されば本書は色摺の發明後間もなき產物なり。

三十六瓶の花體を通覽するに、池の坊の心、副、留、未生流の體、用、留、遠州流の天、地、人、松月堂古流の眞、行、走などの規律正しき方式は認めがたし。蓋し各流派ともに未だ整然たる規律なかりし時代なればなり。要するに活花はもと立華と抛入の二體にして、池の坊の立華の外は各派を通じて抛入と稱したるが、此抛入は後世いふところの文人花なげ入花とは別なり。花道の各派はその流祖を遠きに求め系統の綿々たるを誇れども、活花の勃興は實曆度にあり、殊に江戸に於てこれが民衆化し廣く行はれしは明和安永度なれば、その流行を當込み抛入花に見立てゝ、こぢつけの器用さを誇らんとするが本書の主眼なり。こぢつけは當時の通人間に最も喜ばれし遊戯に屬し、安永六年三月には兩國廣小路に「とんだ靈寶」の見世物ありて滿都の人氣を湧かしめまた黃表紙には山東京傳作『呑込多靈寶緣起』の如きも出でたり。されどその先驅は寶曆五年の『見立百化鳥』にして、『抛入狂花園』はそれに倣ひて著されしなり。

跋文に署名せる蓬萊山人は、洒落本の作者にして蓬萊山人歸橋その人なり。『戯曲小說通志』には「戯作者なり、河野氏、歸橋と號す、上州高崎の藩士なり、江戸に居る、安永年間洒落本を著し吉原深川及品川三遊里の情態を穿ちて最も妙を極めたり、寛政の初め主君の命あり戯作を絶つ」とあり。寛政二年には風敎上に害ありとして洒落本は禁ぜられ、山東京傳は『娼妓絹篩』を出して五十日の手鎖をうけ、版元蔦屋は罰せられて從來版行のものは悉く絶版を命ぜられしなどのことあれば、洒落本などの戯作に

水裏丁簪熊十子ま雀談本の戯作者にて常に凡上の草一を書集め、予こ端書ま…

筆を執るは藩士の體面に關するものとして差止められしならん歟。然れども歸橋の洒落本としては、『洒落本目錄』には安永八年の『伊賀越增補合羽の籠』、『家喜長命四季物語』、『龍虎問答』の三種を始めとし、翌九年に『美地の螺殼』、『遊里會談』の二種、天明元年に『通仁枕言葉』、同二年に『富賀川拜見』、同三年に『愚人貧漢居續借金』の八種を擧ぐるのみ。更に『小說年表』に對照すれば、安永三年に『婦美車紫齋』を出し居れり。但しこの書は『洒落本目錄』には「道良苦先生作」としたり。兩書とも天明三年以後に歸橋の作品見えざれば、藩主の干涉以前に洒落本の戯作を思ひ止まりしにあらざる歟。

さて卷中の見立花は、今はその穿ちも洒落も解し難きものあり。「さくら飴」の高砂屋龜右衞門、「花母衣」の花澤丹吾、「みや咲、ばん藤」の海上一瓢の如きは不明なるが、一見首肯さるゝものを除き、略解を記して覽者の參考に供す。

「餅花」桐や五兵衞は、吉原の引手茶屋桐屋の主人、梧桐亭久儔といひ、『吉原春秋二段の景物』といふ仁和賀に關する著書あり、目黑の餅花に比したる穿ちは其意味不明なり。

「齒みが木」てうしや吉右衞門は、此頃名ある揚枝齒磨商店ならん。安永九年版『名物拜見自由自在』の「尾まけや要次」のところに〈〈蝶じとあるはこれか。

「胴蘭」はるかくや四郎兵衞は、袋物印籠抔の店なるべけれど未詳、殊に文中の文字磨滅して讀みがたき所あり、遺憾ながら其儘黑木となし置けり。

「切もぐさ」三升屋平左衞門は、團十郎艾とて元祿頃より有名なるものなり、『近代世事談』によれば、元祿の初め神田鍛冶町石根屋庄兵衞が箱根の溫泉洒しとて切艾を製し、看板及び艾の印に三升の紋をつけ評判となりしかど、これに模して三升屋兵庫、市川屋何某など名を附けて賣りたり。三升屋の屋號はその傳承ならん。

「まつさ木」名前は原本にも黑木なり。掛行燈にある丁子屋は眞崎の田樂茶屋なり、明和四年天滿宮を勸請してより殊に吉原との關係深く、當時の粹客が隱れ遊びの場所とはなれり。

「願ほどき」かきや小せんは、名高き笠森お仙なり。見立の錢さしはお百度の緡、白黑の丸は、白きは米團子、黑きは土團子。

「めど木」平川右内は、當時名高き賣卜者なり。

「花かんざし」お幸は、麹町の踊子にて美人の譽れ高かりき。

「煮花」みなとやおらくは、淺草二十軒茶屋の茶汲女なり。

「ほね梨」からさき新之助は、この頃評判の輕業の太夫なり。

「そばず木」とうこうあんは、天明版の『七十五日』にも載せし鎌倉川岸龍閑橋の東向庵か。

「煮山椒」ふくろや酒悅は、本文の說明にて明かなり。今も池の端にある有名なる福神漬商これなり。

「菅が木」細身本太夫は、細身造りの脇差に本田に髮を結ひたる半可通の游子が假名にして、菅が木は妓樓にて見世を張るときに彈くすがゝきの綟りなり。又見立の鳶凧は廊下鳶、箒は散し遊びをする所謂はゝきさんの通語によるならん。

「櫻ばり」住吉や忠藏は、池の端の煙管屋なり。享和二年版『賤のをだ卷』に「京都の櫻張のみ萬代不易の形にておとなしき人は用ひたりしが今も替らず」と見ゆ、かの狂言助六の文句にもある「如眞張」などよりも古しとか。

「ふし」富士田吉治は、お囃子方にて皷の上手。

見立の花は皷の譜なり。

因に記す。この『抛入狂花園』と同時に發行したる『大伽藍寶物鏡』の解說の續稿は既に出來居れども、紙面の都合によつて又一回掲載を延期することゝせり。

第五期の刊行について

あと二回にて第四期の復製事業が完成しまするについて、今年十一月より第五期を開始しまする事は前々回の會報紙上に申述べて置きました。次期の復製書目は昨年から選定中で、今回あたりは其大體を發表したいと存じてゐましたのですがまだ原本の所在を確め得ないものや、取捨を決し兼ねるものがありまして、遺憾ながら次回へ讓ることゝしました。從來は豫定目錄の半分位を實際に復製し、其外は適

宜に變更するのを慣例として參りましたが、次期からは原本を實見して複製に差支あるか無いかをたしかめ、尚所藏者の承諾を得たるうへ目錄に掲げ、成るべく變更しない方針を執る事にしました。その爲に全部の決定が遲延しまする次第です。今日既に彫刻に着手しましたのは『長崎むじん物語』『浴衣合』『友禪ひな形』『千代の友鶴』『金々先生榮花夢』『三升增鱗祖』『猫鼠大友の眞島』などで、帝國圖書館所藏の貴重本を許可を得て近日撮影する事に運んで居ます。

第四期既刊書目

一回　浮世續繪盡　竹之丞
二回　新編金瓶梅草稿　九百年忌九重西來
三回　どうけ百人一首
四回　小倉百人一首畫稿
五回　天王寺彼岸中日　島原御影供紋日
六回　伊曾保物語上卷　皇需曾我橘
七回　同　中卷　諸鞍奥州黑
八回　同　下卷
九回　蟲の歌合　爲恭筆重盛諫言圖
十回　貞德狂歌集上卷　ろしやのいろは
十一回　正直ばなし卷一　狂歌浪花丸
十二回　貞德狂歌集中卷　正直ばなし卷二
十三回　吉原戀の道引　鐵砲洲燈籠略圖
十四回　正直ばなし卷三　傾城觴
十五回　貞德狂歌集下卷　正直咄卷四
十六回　俳諧胴骨　正直ばなし卷五
十七回　北里歌
十八回　華山俳畫譜
十九回　春木南湖西遊日簿
二十回　抛入狂花園　大伽藍寶物鏡
廿一回　魚の歌合
廿二回　滸都洒美選　さるかに合戰

寺本に本願寺の奉納経を修復し願寺と
称する寺を建てしも政子の願なり、修禄
寺の僧と変くる朱印と換へて遠
西へ移し、其本、朱印後と寺とあらず
と申す説あり、北庵文と称を存す
る所以なり、北庵の行状あるべかの
序文中、本高麗本と記せと云く
有高麗刊花本、傳国王詳出、素信仏
法深慨震旦花本一無、廣傳宿稽訛
遂致使震旦、求宦本、賓越求至道
天年也、廿四素有前後二花及契丹
花、殊今沙門宋其等参訂校讎、経

十二行

十四春秋、改新成刊刻之久、是宋本二
る三十一年、先元本二る、十三年、本邦
現在花本無、北版無古花北版、
衰乱、北版亦金娘燼矣
と云、高麗花版海印寺にあるもの又孫の
兵燹を免れ今存す北庵燼燼に
すとあるは此なるべき歟北庵延享年
間迄天満宮也

八月三十日記

○八月一日より春帰迄、出版と思ひ当月八日
三十日とある、北間花の北十日とあるも、二十日迄

らす著述と謂つも著稿を整理し略々成る、若干原稿
外に多く、目一時の二冊と為さんとす、乗じて著作の
実に富を惜しむ不成功のもとに考ひ直し、断乎一
冊に任ずることを期めんと欲し、書こゝに今も為版形
ポイント組にすること凡約三百頁
を保存して一巻とすること
略々原稿の整理終る　八月三十日記
右のごとく考し比後果たして如何を試し比
原稿の内に割愛しなるが荒年あり、美
を他日更に随筆一冊を出す場合に収
ある事をすべく、他に折合ふべきを記す
を待つ次第なり　投書してあらかじめ後

十二行

計　一百五拾五冊　内あるのひいろく工
風の赤、第二隠居の扶桑とて左
の如き、これを得たり
一　獄窓書状　淡　去冬
一　趣味ある面顧
天神講
用意合　二件
印の話婚
徳川氏の高貴
俗謡寄の鏡
伊東氏
五色の筋

一　長谷観音　（長谷寺）
一　鎌倉　（長谷寺）
一　酒中趣　（長谷寺）
　　和一百姿

此他多くの名人、和一隨筆を編集せ収めかたきあり
七元入れることなれば優こ一冊の隨筆を為すべし
秋宗田梦海と趣味ある田厳の田厳解の
批判なれども、ここに移し入れることを可とす、鎌倉
酒中趣和方姿の三篇は漢文崩しまた
今の時あらざれども、これを書き改めさるを
可とす、三篇共に毎号世話やしなるべうと共使
公刊を欲す

尚追考して左の隨筆に入れ難い者を入れることとする

一　趣味雑話

○　含蓄の趣味
○　聯想の趣味
○　浮世絵の社会教育
○　閑雅
○　色彩と刻化
○　古書あさり
○　図書趣味
○　紙
○　煙草
○　温泉の今昔

庵原山中圖

（司馬江漢西遊日記卷之一）

○骨董の聖祈伝

名北項と入るべきこの他ある

○駿府清水の茶行茂木脊竹山房の主人の司馬江漢が天明八戊申四月廿三日江戸を発し駿府に着府とも称いと旅の日記の物語が掲載してある、山梨稲川の家を訪ねて和と其味があるから其部分の文を左に引用する、市場稲川い家と左記のとおりである、又三人のうち記のことが無いの点遺憾である、稲川の家は酒屋）家で市家であることや稲川の母の娘子などが新しく稲川の家

九月一日記

八日　同所川を越へて向フなり、山梨平四郎方へ參ル、之も富家にて酒造なり、子共兄弟三人、兄は畫を好ミ、次男は多藏ミ云ツて劍術を好ミ、三男醫者也、量平ト云フ、甲州八代郡石和村の者……

これ以下に家系に關する文句があるが、私の抄本には省いてしまつてある。但し江漢は海翁の家に泊し三男まで畫げておいて當年十八歳になる四男の稲川先生を逸してをる。稲川は去年十七歳母志賀子に從つて江戸に遊び初めて陰山豊洲に見えてその秋歸鄉し、翌々寛政元年の春十九歳に至つて弟惟嚴と共に江戸に遊學入門したのであるからその中間の天明八年には在鄉した筈である。稲川は江漢の滯留中偶々家に居なかつたのかもしれないけれど、江漢が稲川について一言してないのは少々不滿である。量平は亮平をさすことは勿論である。

十日　スツポンを取ンとて壽ケイ、悪坊多藏を連れ、田のあぜ、山の腰シムセウに歩し、スツポンなし。

壽ケイは慈溪すなはち柴隱居である。劍士多藏を悪坊ミ戯稱したのも面白い。この一語よく當日の情景を活躍させてゐるの感がある。季兄亮平は當年二十三。さてこの悪坊は二十五六でもあつたか。長兄の龍湫は少くも二十八九にもなつてゐたらうと推察するが、繪事に關して何等の記事がなくして、仲兄等とズツポン狩りの失敗談などが記るされてゐるのは無邪氣といへば無邪氣である。要するに四十二歳の江漢には此等の青年輩の才能は認められなかつたのかも知れぬ。

十一日　川ノ向フ柴田權左衛門方へかつぽ振舞ニ參ル、江尻海にて取る魚也。

十二日　全体江尻迄歸りたるは府中ニ長ク居タルハ兎角氣不勝、太田原侯仰には夫にては長崎迄はおぼツかなし一先江戸へ歸る氣にて爰迄參りたるなり、然ルに此庵原に居て三人の兄弟ミ共ニ酒を呑ミ誠ニ宿なしの如く一向に苦なし故にや氣分能くなりければ亦々長崎へ往カンと思ふなり、此節雨天續キ大井河渡りければ見合て先ツ爰に居ル、

十二行

十四日　雨、

十五日　雨、三男亮平ハ本宅ヨリハ三丁ほど隔り四面皆田にて一軒家なり、誠に寂漠ミして人語なし、其夜泊ル大雨、樂山亭の額在、誠ニ山四面を廻る、

こゝにも稲川のうはさが出て居ない。この簡潔なる叙景は以て稲川詩草の樂山亭書感並引ヒ詩草拾遺の樂山亭雜咏並序と參照すべき文字である。稲川は少壯この亭に出入して句讀を習つたのであるが、江漢の前には顏を出さなかつたのか。江漢が來訪の時稲川が兄ミ共に亭中に住したか否かは不明である。

本道樂

茂林脩竹山房　五

十六日　偶然ミして暮ス、老婦利口な人也、度々江戸へ出たる故に江戸のはなしをし心安くなる。

是に至つて遂に諸兄弟の賢母志賀子を點出した。志賀子時に五十一歳に當る。「利口な人」の評語能く私たちをして首肯かしめる。志賀子の如才なき待遇振は江漢を滿足させたに違ない。退いて考ふるに、或は年少氣鋭の稲川先生の方からは寧ろ江漢を無視してゐたとも推察されないではない。父の海翁は五十九歳、禪學で鍛へ世故に長けた長者振を發揮してゐたものと想はれる。ともかくも山梨氏一家のもてなしで江漢の元氣は全く回復した。江漢をして歸東の意を翻して西進の勇を起さしめたのは山梨兄弟三人の雅懷ミ、その父母の懇切ミによつたのであるから、江漢の西遊遂行は山梨一家の力多きに居るミいふべきである。

○傳月照一西郎と和歌を薩摩と身を投し時月照

[illegible]

紀念

島津

家と

君も

[illegible]

今も

あり

[illegible]

く

十二行

[illegible]

九月二日

市蔭生

[illegible]

十二行

箱根歌日記の内

雲

りゐ蒸せる砂の煙りかと雲か霞みて見ゆる箱濱のゆ
平懸の中れ原、我赤かむし、箱根の山ゐ雲ゐ、ゐわ、ゐ
我宮の君より見ゆる白い山白布帯して立ちけり
いちまちゐ見ー山見ゑぬ有り空一もいゐ棲霞ゑこめ
山風ゐ吹れて、雨降ゐゑ、ゐうすゐ黒く山の見ゑけり
晴れ日雲の見空あつゐ箱根山日いさーあめ降ゐ有り
山風と高ゐ清水聞き赤めに雨ゐりきゑと見紛ける赤
めていりき行きていゐる雲ゐ空の上ゑ知ら無しする
風吹け空の雲さゑ浮ゑつゐ白の山時見ーことあー

白雲ゐ山のすそ上り入り時と日暮ーのあく
そりたりさ霧のきれー白山ゐ見ゐうたりて平近見る
白雲ゐ西方ゑこめ手山赤ゐ箱根のそとゐ見ゆるなー
白雲の雲西隠れける小清ゐ海の山ゐと思いわつろう

○二三の雜誌を讀み往々興味を感ずるものあり切り抜き左に收む

一、豊後府中惣道場の鐘

豊後府中の人の寄納に係る鐘也
時代古雅なるものとすべし、郵業の為めに
[illegible]
ニズ寧ろ郵業の傳説
迄もいと立派なる傳説がある

集古

大正十五年丙寅九月

豊後府中惣道場の鐘

柴田常惠

備前邑久郡今城村大字北島の上寺山に餘慶寺といふ天台宗の名刹がある。天平勝寶の頃、報恩大師が創建された備前四十八院の一なりと云ひ、また慈覺大師の中興にかゝはるとも傳へて由緒にも富めるが、本尊の藥師如來などは國寶にも指定せられて、什寶に見るべきものがある。

當寺の梵鐘は總高三尺八分で、其内龍頭の高さが三寸七分、笠形の高さが一寸八分あり、口徑が一尺九寸五分で、緣の厚さが一寸七分乳は四列四行と爲つて居るから、各區に十六個宛あり、上下の兩帶には何等の裝飾的文様を附することなく、池の町には陰刻にて、

奉寄進鐘之事
大日本國九州豊後國
大分郡府中今小路
惣道場

右願主大明台州府盧高平羊縣陽愛有高

于時元龜第二辛未歳七月十三日

の銘がある。文字は比較的に小く、書體も手際の善いものとは思はれず、尙ほ銘文の行間には其面を少し削つた樣な痕見ゆるが、さりとて後世の僞刻にはあらず、寧ろ舊銘を削つて元龜の際に此銘を加へたと見られる。併し梵鐘全體の形狀なり、龍頭や撞座の工合から察するに略ぼ元龜頃の作品と思はるゝから、舊銘があつたとしても此鐘の鑄造は元龜より多くの年代を遡らしむることの出來ぬものである。

餘慶寺では、天正十五年に豐臣秀吉が島津氏征伐に九州に出掛けた際、其軍に從つた領主の宇喜多秀家が持歸つて奉納したものと云はれて居る。梵鐘などを戰地より持歸つて其信仰する神社佛閣に納むることは、當時の風習として其例多きことなれば、寺傳は恐らく事實と見て宜しいと思ふ。尙ほ幕末に及んで、外交問題が海內を騷がし、幕府以下諸藩が何れも海防の事に力を注ぐことゝなり、岡山藩でも安政二年に領內の佛寺の梵鐘を集めて大砲を鑄造するに至つたが、和氣郡三國村大字多麻の八塔寺の鐘は新太郎少將光政の經營に關すると云ふので、此鐘は明人寄進の銘文あるといふので、此二個だけが岡山藩では鑄潰しの厄を免れて殘つたと云はれる。

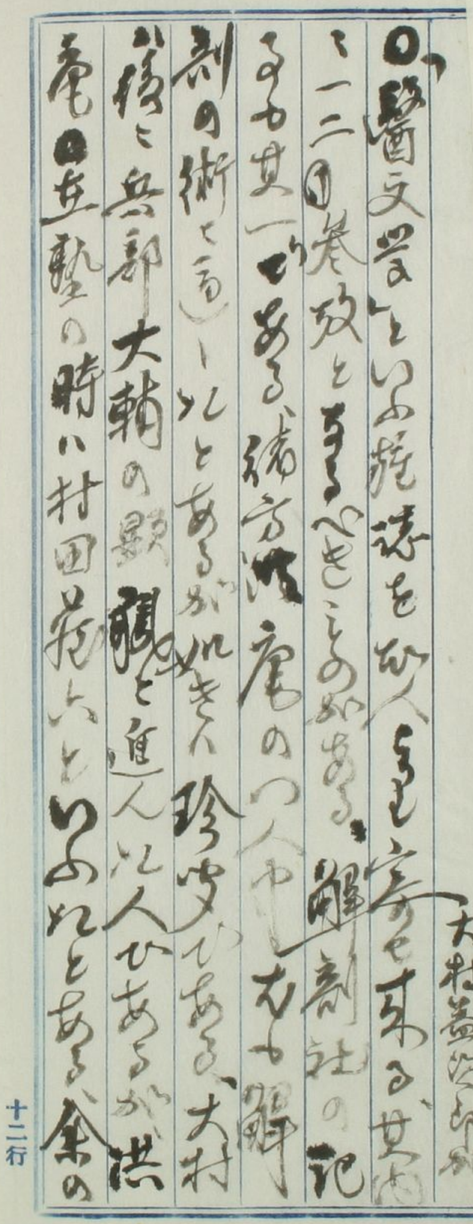
銘文に見ゆる大分郡府中は今の大分市の內に古國府といふ處あるが、古くは豐後の國府ありし場所で、府內とも呼ばれた。次に今小路と云ふ處が現在も殘存するや否やを確めないが、大分の市中には西小路、後小路などの町名ある所から見れば、何々小路と云ふ樣な地名を附ける風習が大分には古くから行はれたと思はれる。惣道場とは何者なるや不明に屬するが、一種の宗敎的會堂で寺名を有せざるものと察せられる。而して其寄附者は二人なれど、何れも支那人で、一は台州府の盧高、一は平陽縣の陽愛有で、今の浙江省に台州府あり、山西省に平陽府あるが、此等の地名に就ては未だ調べて見ないから、何れの地なるやは斷じ兼ね、且また二人の何者なるやも知る處がない。元龜二年は明では穗宗の隆慶五年に當り、我が畿內方面では織田信長が叡山を焚き、中國地方では毛利元就が卒した年で、九州方面では大友宗麟の勢力が强く、切支丹の信仰が盛んに爲つた頃である。

云ふまでもなく豐後府中即ち府內は大友宗麟の居城の地で、宗麟の洗禮を受けたは元龜二年より七年後の天正六年の事と云はるゝが、其以前より旣に心を切支丹に向け、伴天連を優遇すると共に領內の神社佛閣を破壞して、僧侶等の改宗せざるものを放逐せしめたこともあつた。斯る際に其城下の地に在りし惣道場とは如何なるものであるか。若も佛敎關係のものなれば、未だ寺號をも有せざる處を見れば新しく其頃營まれしものかと思はるゝが、切支丹の信仰が熾盛な大友氏の城下に於て見難いことの樣であり、單に何々道場と云ふならば兎に角、各宗派の互に分立するに關はらず、惣道場と云ふ如き概括的の名稱も妥當を欠き、尙ほ立派な寺院と爲れるものでも梵鐘を備へざるもの少からざるに、道場と云へば殆んど普通の民家の布敎的に使用さる建物の程度に過ぎぬ樣に思はるゝものが、如何に寄附者ありしとは云へ梵鐘を有するも奇異に感せらる。殊に佛敎關係の場所なれば邦人の寄附者もあるべき樣なれど、渡來者たる支那人のみなること、銘文には他の事例と趣を異にして破格のものなる上に、何等の佛敎關係の意味が見えぬことである。

反對に之れを以て切支丹の會堂なりとすれば、如何にも府內の地に惣道場の置かれしことが了解せられる。道場なる名稱や梵鐘の樣式が佛敎的であると云ふも、一般に切支丹が新來の佛敎と考へられ、伴天連なども力めて佛敎の儀式を併せ用ゐたことを思へば敢て奇とするに足らない。更に其頃は大友氏の勢力は九州に盛んで、海外との交通も頻繁な時代であつたから、貿易の爲め支那人の府中に來住せるものあるべく、其等

の内の切支丹信者が奉納したものかと思はるゝと共に、銘文が他のものと趣を異にすることも了解される。尙ほ銘文のある部分に舊銘を削つた樣な痕あることを前に述べたが、最初は何れかの社寺に奉納されありしを、神佛破壞の結果として、舊銘を削つて惣道場に置くことに爲つたものと見える。

此等のことは餘慶寺の案内記と見るべき「鐘の響」と云ふに大體記載され居るが、一般に見るべき書物でないから此鐘に就て知る人が少い樣である。若も此鐘が果して切支丹關係のものなれば、京都の妙心寺にあるものと併せて興味あることに屬し、一は純然たる外來のものなるに反し、一は佛敎的の形式なることも面白いと思ひ、先年餘慶寺に登つて銘の拓本などした關係から、紹介の意味で此處に一言した。



大正十五年九月一日發行

解剖社

——幕末時代に於ける人體解剖の事蹟——

本誌第十號に掲載せし『腑分け』の補遺として、幕末時代に行はれた屍體解剖の事蹟の梗概を書き加へてみる。

安永三年、キュルム氏「タブラ、アナトミカ」の譯書たる解體新書の出でゝより以來、歐洲醫學の精緻なることに始めて氣づいた當時の醫人は、同書に刺戟せられて人屍解剖の緊要なることを切實に感ずるようになり、隨つて之を擧行する者の逐次輩出するに至つたが。幕末時代に當つて、屢〻解剖を行つたのは實に緒方洪庵を主盟ミせる解剖社であつた。同社は洪庵が大阪に業を開き且つ緒方塾を設けて蘭學を敎授してゐた時代に出來上つたもので、それが創立されたのは天保十三年であつた。爾來約二十餘年間、同社は永續してゐたが洪庵が大阪を去つて江戸に轉じた後は、主盟者を失つたので、遂に廢絶した。それ迄は每年一二回刑屍を大阪の町奉行より貰ひうけ、刑屍の放棄場なる葭島に假小屋を設けて解剖した。その時期は寒冷の頃を選び、每年九月より翌年の三月に至るまでの間に一二回擧行したのである。

緒方洪庵を始め、その門下生の解剖に熱心であつたことは『福翁自傳』中の『緒方の塾風』の中に『道修町の藥種屋に、丹波か丹後から熊が來たゝ云ふ觸れ込み、ある醫者の紹介で、後學のため解剖を拜見したいから誰か來て熊を解剖してくれぬかゝ塾に云つて來た。「それは面白い」。當時緒方の書生は仲々解剖に熱心であるから、早速行つてやらうゝ云ふので出掛けて行く。私は醫者でないから行かぬが、塾

生中七八人行きました。それから解剖して、これが心臓で、これが肺、これが肝と説明してやつた處が『誠に有難い』といつて、薬種屋も醫者も歸つて了つた。その實は彼等の考に、緒方の書生に解剖して貰へば無疵に熊膽が取れるといふことを知つてるるものだから、解剖に託して熊膽の出るや否や歸つて了つた云々』とあるを見ても明かで、緒方の塾生の解剖に熱心であり且つ器用であつたことが、この一事に徴しても分かる。

緒方塾の書生で、解剖社の同人の中、最も解剖に熟練したのは、村田藏六、即ち後には大村益次郎と改名し、明治の初年兵部大輔に任ぜられし長州の豪傑であつた。彼は人屍の鼓室より小聽骨を巧みに採り出して同人に示したと云ふことである。當時に於ける解剖の次第を少し許り述べてみると、解剖用の機具は解體新書中に列記せるものを選用し、胸腔を開いて心臓、肺臓等の形狀、大小、重量等を調査し、腹腔を開いて同じく諸臓器を調査し、頭蓋腔を開いて腦膜、腦髓及腦神經を調査した。但し腦髓の調査は、その外形だけてあつて別に切開することなく、腦神經もただ其十二對の外見を觀る迄であつたと云ふ。そして解剖に際しては、先づ執刀者を選びて胸部、腹部、頭蓋を各自執刀者に配當し專ら臓腑の位置形狀の剖觀を主としたので、胸腹及び、頭蓋三腔以外の諸部には及ばなかつたが、遂には筋肉、血管、神經等をも解剖するようになり、また心臓、腦髓をも剖開するに至つたそうである。屍體の解剖は毎年一二回で、一日に一屍乃至三屍を解剖した。

江戸では小塚が原の刑場で解剖するのが例となつてるたように、大阪にては木津川の川口にある蔑島が刑屍の放棄場になつてるたので、此處に假小屋を建てゝ解剖することになつてるた。當時に於ける解剖の手續は、先づ出願人を定めて町奉行に解剖願ひを差出すと、無籍無親戚の刑囚のある場合には、死刑執行の二三日前に町同心を介して願ひの趣き聞き屆けた旨を出願人に内々で通知する。この内通知に接すれば、直ちに解剖擧行の準備に著手し、一定の人員を限りて傍觀券を發行し、費用を補ふかために、傍觀券一枚につき、銀一分を徴取する。やがて當日になると、早朝より同人及び傍觀者一同、解剖場に集まり。檢視の役人として二人の町同心の來臨するのを待つて始めて屍囚の解剖に取りかゝるのである。檢視の役人のやつてくる時刻は大抵朝の四つ頃即ち午前十時頃(午後四時頃)には退出する。それ迄には必ず屍體の外形を元のようにし、立會の非人に引渡さねばならない。屍體の引渡しは中〳〵嚴重であつて、たとひ、瑣少の部分でも屍體に缺損する處があると、非人は引取を拒絶したものである。しかし、これは固より表面上のことで、檢視の役人が引き上げた後、非人

却説とゝ勝が幼年のある傍が二人のち年を
ばかり、その一
人へ山川ひ二人
ハ小川亮（陸軍
大佐となり四十
九年で歿し）と
ひあつた、二人も
傍の小姓となり
てやット奥羽
の長不坂ち
移つた後び
あつた後の鎮守府に
出うみえるとと既に
あつたのそ弱後の
ものゝ系乃ち余のもとく来て

奥平謙輔先生

えんへ又行き）つて奥まへ敗と佐渡く行つた後びあつた
とゝふ、関つる）ハ程面倒であつた砲ふの年
しくちて余まへ特別の興味をそゝつた

部に於ける諸隙走の事であるが、之に就いては貴濃山な記載があるから、此項に於ては省略して後日に讓ることにする。

一四　松浦武四郎畫

紙本竪四尺五寸三分巾一尺一寸三分

女體の謎（上）

『世界あつてより不可解は人類なり、人類ありてより不可解は女性なり』とは、鈴木券太郎氏の名著『犯罪論及女性犯人』の序文中の一節である。私共の見地から觀察しても、女性はその精神生活ばかりでなく、肉體機關及びその生理現象にも猶不可解の點が多く、女性は勿論、一般世人の何等疑ひを挾まぬ普通の生活現象の中にさへ、未だ確固たる科學的説明を下し難きものが尠く無い。

私が女體の謎として先づ第一に指摘したいのは外部性機關の構成である。人間に近い猿類にては、大陰脣、陰阜を有せず、また恥毛をも缺いで居り、類人猿にても大陰脣、陰阜の發育は甚だ幽微であるのに、人間には、猿類に缺存し或は發育の極めて弱き前記の性機關が完全に發育してる

九　日柳燕石畫

骨付扇子

十二行

る。之に反して、猿類にては、陰核、小陰脣の發育が著明で、交尾時には、それが著るしく腫大するけれども、人間に於ては陰核の發育は左程著明でなく、猿類に比較すると餘程退化してゐる。エリスは、大陰脣、陰阜、陰毛をば、祖先の獸類より傳へ殘されたものでなく、人間に進化して後、始めて發生したもの、卽ち『高等で且つ特有の人間的發育態』"Ein höhere und eigentlich Menschliche Entwicke-lungsform" と看做し、恐くは性淘汰によつて發育したものであらうと云つた(Ellis. Die krankhaften Geschlechtsempfindungen auf dissoziativer Grundlage) ベルグなどは陰毛の發育の原因を說明して、人間が獸類より進化して起立步行するようになつた結果、垂下する汗液による外陰部の刺戟及び性交時の摩擦による皮膚の傷害を防ぐがために陰毛の發育したのであると說いたが、固より可い加減の目的論的臆想であつて、容易に首肯し得られない。古代の希臘人には婦人自らその陰毛を剃除し或は燒去する風習があつた。女神ウエヌスの裸體彫刻像に全然陰毛の形跡を缺いてゐるのは要するに希臘の風習に基因してゐる。此樣な點から見ても、ベルグの所說を容易に受け納るゝことが出來ない。兎に角、人間が猿類に缺乏せる陰阜、大陰脣及び陰毛を具備することゝ、そして猿類に著るしく發育せる陰核及び小陰脣の小さくなつたことは、如何に說明すれば可いか。

それよりも一層不可解なのは處女膜である。この事に就ては嘗て「メヂチーチル」に書いたこともあるが、猿及び類人猿に處女膜の無いことは、ビショップ、デニケル、ウィデルスハイム等の夙に記述證明した處である。されば處女膜も亦た人間に至て新たに發生した特有の機關で、祖先動物より遺傳されたものでない。さりながらその生理的機能に至ては毫も明白でないのである。もつども、處女膜の存在が純潔無垢なる處女の標徵と認められ、倫理的及び社會的生活の方面には重要の意義を有つてゐるけれども、併し生理的に如何なる意義價値のあるかは全く判らない。否、全く無用有害の一機關であつて、それが比較的に靱韌なる場合には初回性交の際屢〻外陰部の裂傷を伴ひ、また血管に富めるものに於ては可なり高度の出血を惹起して、そのため往々不幸の轉歸を取ることさへある。エリス及びメチニコッフ等は人間に處女膜の發生した理由を說明したけれども、いづれも、目的論的の說明で、生物學的でないから、殆ど取るに足らない。エリスの說に依ると、人間は動物と違つて子供を產む數が少いから、種族繼續の必要上、どうしても健全なる子供を擧けなければならない。そこで、處女膜なるものが發生して、若き女性が、虛弱或は老衰の男子等によつて妊娠せられないように防禦するのである。換言すれば、處女膜は、女性の異性を選擇する際、强健なる

男子を得せしめんがための形態學的表象であると云ひ、メチニコッフの說に依ると、人間が動物より進化した最初の時期にあつては、性機關の未だ十分に發育しない少年時代の頃より旣に性的行爲を營んだものであるらしい。されば此の如き狀態の下にては、處女膜の存在するこも毫も交會に障碍を與ふることなく、寧ろ却てその快感を助長し、また處女膜の破裂することなくして次第に延展するようになつたものであらう。早婚の行はれた原始時代には特に女性の腟口を狹隘ならしめる自然の必要上、處女膜の存在を要したものゝ想像すべく、文化の發達に從つて早婚の風が殆どその跡を絕つに至つた結果、今や處女膜は無要無意義の一機關として殘存し、單に初回の交會によつても破綻するが如き運命に陷つたのであると云つた。併しこれもこれも牽强附會に近い臆說である。兎に角、處女膜なる機關は全く謎の機關である。

女性に認めらるゝ生理的出血卽ち月經も亦唯人間に起るのみで、獸類には起らない。但し人間に近い高等動物では、數週、數ヶ月或は一年に一二回毎に交尾期が反覆し、その際、性機關の充血腫脹し、粘液の分泌增加し、往々少量の血液を混ずる一種固有の臭氣ある粘液を流出し、ことに猿類にては、人間に於けるが如き月經樣出血を來たすこともあるが、併し這般の現象は、性機關の充血腫脹するが

ため、少數の血管の破綻して多少出血する迄のことで、決して人間に於けるが如くに子宮粘膜の大部分の血管が破綻したり、粘膜實質の破壞したりするようなことは無いのである。

ビショッフ、ヘガール、ストラッスマン等は人間の月經期と動物の交尾期との類似することを說いたが、併しそれは單に外觀上の類似であつて、その本性は決して同一でなく、兩者の間には看過すべからざる相違がある。卽ち獸類にては出血することなく、或は出血してもその量は少く、人類に近い猿にては子宮より血液を流出することがあつても、その特性は粘液性であつて血球に乏しく、之に反して外陰部の腫脹することが甚だ顯著である。しかも猿類に於て比較的多量の血液を混ずる粘液を流出するものは、唯だ人爲的生活要件の下に生存するもの、卽ち動物園內に分離されて檻の內に生活するものに於てのみ認めらるゝに過ぎない。然るに人間に於ては、獸類に認めらるゝが如き外陰部の腫脹を來たすことは僅微で、主として血液を多量を流出するのがその特徵である。また獸類は交尾期に於て常に妊娠するけれども、人間は月經時に妊娠することなく、月經終了後十日以內に妊娠することが多い。その他、人間にても、文明の進むに從つて月經血の分量が多く、野蠻種族の婦人は文明民族の婦人よりもその經血量の少いことはエ

リス等の夙に記述した處である。此の如き事實に徴して考ふれば、月經の純血性であるのは、人間に於ける特徴の一であり、またその血量の多寡は人種進化の程度に比例すと言ひ得らるゝ譯である。

こゝに於てか先づ起る所の疑問は、何が故に人間に至て月經の起ることになつたかと云ふことである。メチニコッフの說に依れば、人類が原始生活狀態を去つた後、その豐富なる生殖力を制限し、結婚の時期を延長することになつた結果、始めて今日のような月經が起つてきたのであると云ふ。蓋しその考察では、原始時代にては夙に幼少の頃より性的行爲を營み、女子は月經の起る以前に早くも妊娠した。そして幼年の女子にして月經の未だ來潮せざるにも拘はらず妊娠し得ることは、諸家の實驗上疑ひなき處で、ボラックの如きはペルシアに於て、その經驗した這般の實例を蒐集して世に報告したことがあり、歐洲にても、ラカマノッフは露國に於て十四歲の一少女か未だ一回も月經の通じないのに分娩したことを報告した。思ふに原人時代にては早婚の風の行はれたがため、未だ月經なき幼女にして妊娠した者も多かつたに違ひない。然るに一旦人間が原始時代より次第に進化してより以來は自然の勢として結婚の時期を遲くするの已むなきに至つたので玆に於てか月經が起ることゝなつたのであらう。蓋し原始時代では月經の起る前より早くも性交を營みて早くも妊娠し、隨つて妊娠及び授乳期の間は無論月經の起る筈はなく、そして授乳期の經過した後は再び妊娠するから原始時代の女性には月經は起らなかつたのであるが、一たび原始時代の生活を出てゝからは、自然にその生殖作用を制限し早婚の風の絕えたので、始めて月經現象のあらはるゝに至つたのであらうと云ふのが、メチニコッフの所說で、イワンブロッホも此說を承けて、月經は恐くは生殖を制限し且つ少女の早期結婚を妨ぐるがために人間に至て始めて新たに起つたものであらうと云つた。

さりながら前述の如き所說は固より臆想である。もつとも野蠻種族の中に、今なほ月經來潮以前の少女の早婚することのあるのは事實であるが併しこれより推測して原始人類には月經の來潮したことがなく。この時代を出でゝ後、始めて月經が人間に起つたものゝように考へるのは容易に是認することの出來ない臆想である。

月經時の婦人を不淨視して之を忌避する風習は、古今東西を通じて、多くの民族に認められる處であるが、輓今の研究に依ると、月經時には、血液、汗液中に特殊の毒物、所謂『月經毒』Menotoxin が證明せられると云ふ。今を去ること六年前、卽ち千九百二十年、墺國のウィーンの醫學者シックは、月經の開始後二日以內の婦人がその手に薔薇、

翁草、白菊等の草花を握ると、半時間內に凋み枯れることを認めて、古來歐洲の民俗間に月經時の女性の觸れた草花は早く凋萎し、或は砂糖漬の果實が早く酸敗すると傳へらるゝ俗說の事實であること、また月經期の婦人の汗を取つて酵母に接觸せしめると、その發育を抑制障碍することを說き、月經期には全身血液內に一種の毒物が發現し、それが汗液と共に排出さるゝがため、月經時の女性が草花を手にすると、汗の中に含める毒物の作用によつて早く凋萎するのであると云つた。次で獨逸の醫學者フランクも月經期に際會せる乳母の乳汁が、シックの實驗した如くに、草花を凋枯することを報告し、千九百二十三年には、シーブルグ及びバッツユケは、月經時の婦人の汗の中に「レチ、ン」の分解產物たる「コリン」の多量に存在し、普通の時よりも八十乃至百倍も多いことを報告し、千九百二十四年には、ボラノー及びチートルは、月經時の婦人は發汗の量多くして殆ど每常手掌の濕潤すること、隨つてそれと共に排出せらるゝ「コリン」の分量も多くなるがため、汗液を酵母に作用せしめると、その發育に著るしい影響を及ぼすといひ、また米國の學者マハトは「ルビヌス、アルブス」といへる植物の苗の培養に用ゆる榮養液に、月經中の婦人の血淸を混加すると、苗の發育が著るしく遲くなることを報告した。

是等の報告に徴すると月經期には、血液中に一種有毒の物質が發現し、それが汗と共に排出せらるゝがため、月經時の婦人が草花に接觸すると、それが早く凋萎するといふ古來の俗傳は、事實らしく思はれるが、併し果して『月經毒』と稱すべき特殊の毒素の有るか無いかは固より確かでない。これ亦た謎の問題である。

これを要するに、人間に近い高等動物には、外見上月經に似寄つた現象があつても、それは眞の月經に非ること、そして人間に至て始めて月經の起つたこと、また野蠻種族にては出血量の少く、文明種族に進むに從つてその量の多くなること。こう云ふ事實を綜合してみると、月經は人間に至て始めて發生した生理現象で、人間の進化するに伴うて、愈〻顯著となるものであると云ひ得られる。また古來月經時の婦人を不淨視する民俗的風習は、所謂月經毒の汗の中に排出して草花等に有害作用を及ぼす事實にも淵源するらしく思はれるが、併し月經毒なる者の本體に至ては今日の所明白でない。兎に角、月經なる生理現象が人間に至て始めて發現した者なりとせば、その原因由來果して如何？これに就て聊か私一箇の生物學的觀察を述べてみたい。

抑〻獸類の交尾期に於ける性機關の充血腫脹、粘液分泌の亢進、及び人間の月經時に於ける子宮粘膜の週期的變化が、卵巢濾胞乃至黃體の內分泌作用に起因することは、フレンケル、ハルバン等の研究以來明白なることで、その生

理學的意義に就ては何等疑義を容るべき餘地は無いが、併し今なほ解決することの出來ないのは前述の如く月經其者の生物學的意義で月經が如何なる原因關係より人間に始めて起つたかゝ云ふ疑問である。詳言すれば、何故に人間の月經では純血性であるか。また動物では交尾期の際に於ける性機關の變化は外陰部の充血腫脹が著明であつて、猿類に於ても陰核及び小陰脣が著るしく腫脹するのに反し何故に人間では這般現象の僅微であるか。此の如き兩者間の相違か生物學上いかなる起源に由來するかゝ云ふ疑問である。獸類の交尾期に於ける性機關の變化も、人間の月經時に於ける子宮粘膜の變化も、兩者共に卵巣の内分泌に起因し、その根本的原因は全く同一なるにも拘はらず、前述の如き相違のあるのは如何なる譯であらうか。この謎に對して聊か私の管見を披瀝したい。

（以下次號）（香涯）

戲曲山陽終焉に就て

後藤肅堂

（一）戲曲と史實

本日岡崎醫學博士を訪ふ、談たま〳〵賴山陽の事に及ぶ博士「醫文學」十二號（大正十五年七月發行）を出し示さる。中に戲曲山陽終焉一篇あり、卽ち借り歸りて一讀し、此一文を草す。

いかにも面白く讀了した。善にあれ惡にあれ、山陽先生戲曲に上る吾等山陽黨に取りて萬歲なる哉。行文花の如く藻思縱横よく其舞臺を活現す。作者が劇作家としての手腕大ひに敬服すべきも、いかんせん題材の出所が全く惡しかつた。

戲曲は素より歷史ではないから、必ずしも史實に據るを要せんが左りとて全く誤られたる題材に依るとすれば讀者の感興を牽く事薄きのみならず、劇中の主人公を誣ふるにも到らんか。且つ此題材は單に此劇のみならず近時他にも世を欺く恐れあるものもあれば、こゝに本誌餘白を借りて一言する所あらんとす。

一言にして申すゝ、此題材は曾て歷史の假面の下に世に出でたる架空の小說にして、全く跡方もなき惡說であつたの

以上女の謎迄刊医之著に載せる本誌こゝの收めて他日の考資に充つ

九月三日

○雑俎書商の話料を友人谷村一太郎氏より来る故
中村敬宇翁の名高き一説を一読して父の俤したる
を見るが如き思ひなるに其れ程にあつらしい世
の愛服と云へば
中村先生自ら奉ずることの甚だ高朴の人ひあれど
客室に兎角角ばれてあるけれども翁の常を起居
する書室迄、なるべく寝台もあるストーブ
も有り椅子有り洋式なれども
桂子の白木のまゝ極簡なるそれ卓後も
なる丸上い朱墨の痕狼藉なる墨いれ
国勢りて視いる時の下品而うも一年
三百六十日一家中流くしことなるを見く

十二行

墨堆をなして四隅に満ち、ストーブの為めに
くべし木花を寄せ入れて其前に
こんもりの一現也春台文集い学と枕となる
食い度桟の古物
車夫の身を
谷文晁の蘭
八十日余を三百六十四日の収入あり而して其の
収れ検まる毛を思くの真と汗顔と拭く
さるこゝろなり

春風亭主人（かき）

九月吾稿

私へ壮年の頃から見聞を筆録しておく癖があつて、えんぴつ
おのつから習慣となり、追々種々の事に趣味を覚
（こやうなもの、益々筆録することが多くなり、日々
閑さへあれば筆の習慣をつゞけもきたし、無益のヒマ潰
しのやうでもあるが、午睡の代りと思へば、筆録の時
間へ楽しを惜むを足らめと勝手の理屈をつけも今日
尚ほ此の習慣を持續してゐる。
ことし八月の初めの暑熱を避けて忘れて一法として、
兼ねて書き散らしたこゝの所を整理し、随筆を編輯
幕として見ようと思ひ立ち、多くの雑録を取り出し、
暇に任せて取り調べて見ると、如何にも雑駁の感

漫筆が多いけれども、中に取るべきものも無いでもない
いのでは、日課として書き抜いて見ると、およそ二冊
の随筆として出版し得る稿を得た。これが為め約
四十日間毎日暑熱四五時間没頭したのは、暑熱
の餘り暑熱をひとゝ感せずして盛夏を過
ごすことが出来を得た。
随筆といへども実は漫筆で、人傳へて無を
感じ、書物を読んでおもしろく覚へた時の感
じたことを録したもの。
かゝる採つたのであるから、すこしとして雑然たるもの
である。人傳へとしてハ誤りもあるかも知れ
ず、書物も読んだことも書名を逸したものもある。

うえと今一つ確かめることの出来るのを遺域とすんだとも、大分むつかし難い。

取り入れた材料の内には新聞や雑誌に載せたものもあるが、自己の執筆するけれども、往々他人の著記に係ることもある。他人の著に成つたものは可成書きぶりを統一を期かい、文分手が届きかねて、文体其他を統一を期く所がまだまだ無いひもない。これも亦私の遺憾とする所である。

今度出版の随筆は「雅俗相半録」と題したものと「趣味業務談」と異つたことの互ひを一半を占めてある。題い異ちんとも共に趣味を屬することのある。但し趣味といつても私一家の趣味と人の趣味とは別問題である。

問一般に趣味として受け取らるるやうな分論疑問ひある。私の書き随筆類山陽を世に出した時と同一の勇気を奮して高論を顧みず、試みに世に問いんとするのである。萬一北吉平のことが聊かでも漢者の趣味とならることもあらば、私はそれを本懐とする。

巻中の談論に就ても、を廃北異ふものがある。

○北海道の新聞紙に殖産家の隠居を載せることが流行となり、西京隠居山陽に京都を捨て自分の隠居の趣意をもとめてくる旅行がボツボツある、先頃の情文報に二三家書いてやつたが日本人は古来隠居と就て隠居といふから、高槻一切隠居のことを言ひてやつてゆくと大阪の高槻少から十の河連歳の国者後味と変する隠居者ともと頼んで来たから、流石に実に今春城隠居を作り時間を惜む折柄なので隠居の出版と共に関西の有力な新聞に何か隠居と出してやるも自家の宣伝ものから頼した。

○自分に無ものつかずるあれば十月の末とある東京日々新聞が余の隠居を報じ新山陽と題し無責で評を載せ、入墨者の話を投稿したといふ其の計画もなかなか無論入墨者の話も見すまつたことである、新聞社が廣告を集める略でもあらうが余が隠居を無責の機械に使つたのは余を取つて仕合とある、兎も角北の不景気なるとい云て、抽者を機械に使つたと解してよからう

○八月中から約三十日を費しておらうと春城隠業を既行しあるる未来後の授行をしたることゝ、どうも者きしたいこゝろが出てくる、そこで代

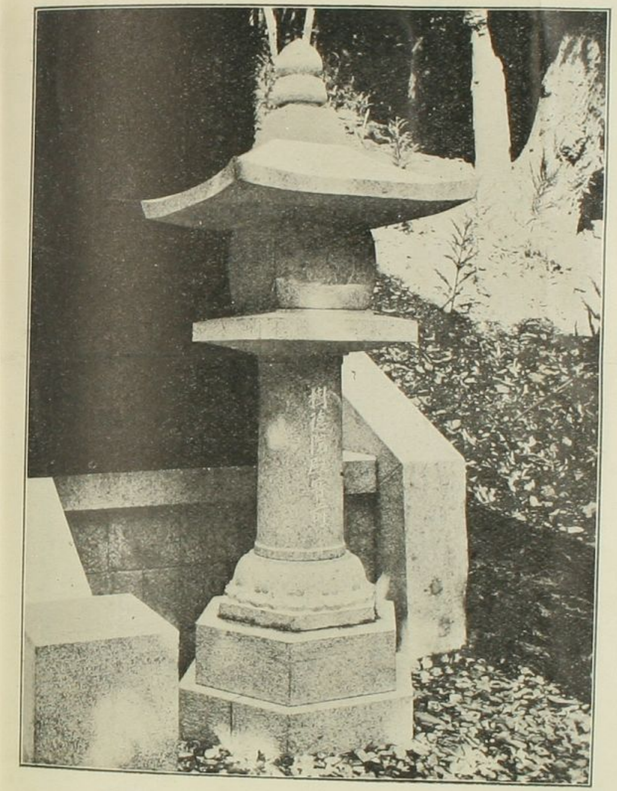
へるものとなりぬ。ゆゑに予は論議することあまたゝびなりしが、ゆゑを書きあらはすまでに少からず時間を費し、漸やく雅俗折衷の一章の脱稿したれば、此の目録をば作ることゝ、約百十話に及ぶ長篇いろ〳〵あるが、約三百頁に及ぶものあらう、琉球の挑合はいろ〳〵あつかましく醜面と変ずることかうきさるべきいろ〳〵ゆゑ、ゆゑこゝに筆をおくとなりけれどもことに少なきまでに、加藤のうちに骨が折れたり、才二の隠れたるの方が多く受けがよいかとも思ふ。目録はいろ〳〵と聊か感ずるまゝ才二隠居さん書ぬもの山の新ものゝ宮の七話、山東京山と鈴木牧之」といふ長篇を取のけたいと思ふて

十二行

切りぬきを拵へしが、ゆゑに元もあらはるべきもの、ひとしきるべし。

後の新聞と見たるものゝ宮ちと偽り入れ、此一篇は都たる人の知らるべき、後の作者家うるる京山の多くの手紙を材料としたのゆゑなり。

和歌山縣海草郡濱中村
長保寺 德川家墳域
樹德院殿寶前



故德川侯爵家の墓前に建設
せられたる石燈籠

石燈籠
高七尺七寸五分
臺座二尺三寸角
材御影石

祭光吉元次郎君文

大正十五年歲在丙寅七月十日光吉君元次郎以疾俄歿越三日行葬儀於四谷長善禪寺友人佐伯仲藏謹告君之靈曰嗚呼君早歲入慶應義塾學成從紡績之業遠航米國圖伸張事業大見才幹而夙好史學喜誦賴氏之書業餘考覈日本外史愈篤愈深註疏字義釋明典故入微穿細不測其本源弗措又評論體裁講論之當否補訂記述之闕漏誤謬周匝精到莫不至焉哀然成帙自題曰日本外史詳註壹註釋外史其詳審正確若君之書者所未曾覩眞可謂註家巨擘矣今並春帝國學士院審査君之書以爲裨益學術業大特授金壹千圓以補考覈資君深衆之益研鑽尋繹矻矻不倦將有刊行之擧道羅篤疾病僅三日溘焉逝矣聞者莫不驚愕嘆惜是豈獨君之不幸乎哉嗚呼哀哉雖然山陽之著外史也拮据二十餘年藏之篋笥及其晚年始得業翁公鑒識以取信於天下後世今君之著外史詳註也亦拮据二十餘年未嘗公之世今而始得學士院鑒裁以取信於天下後世君之於山陽何其遭逢之酷相類如此也豈山陽之靈有所與君默契感通而然歟且山陽之書歿後始刊行而流傳至今君之書亦應刊行有日以永傳干不朽則君亦可以瞑矣願余之於君訂交雖晚而相知特深今也幽明忽隔悲痛曷勝告以並詞亦以自慰嗚呼哀哉尚饗

大正十五年七月十三日

佐伯仲藏肅拜

九段坂下の大橋圖書館

坪谷水哉

久しく工事中の大橋圖書館は、略ほ落成したので、三月末に假事務所から新館へ引移りました。其處は委しく言へば東京市麴町區飯田町一丁目六番地だが、最も分り宜いのは九段坂下であるから、今後は東京九段坂下大橋圖書館と稱します。

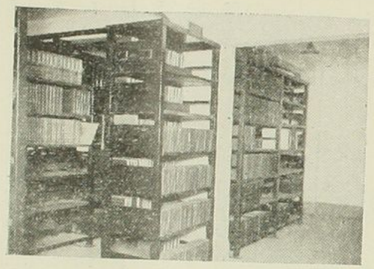
九段坂下と稱するは、唯だ呼び易いからと謂ふ丈けで無く、此處は我國近世文明に頗る緣故が多い所故であります。本來九段坂下南側の飯田町一丁目は、江戸時代には幕府最親の一門、所謂御三卿の田安、清水、一橋の三邸に近く、九段坂上に田安邸、坂下の牛ヶ淵内が清水邸、清水門の隣りの雉子橋と一橋に連なる土手の内が、一橋家の邸であつたから、現今の牛ヶ淵公園とその對ひ側とは、旗本屋敷ばかりで、嘉永二年版の江戸圖に依れば、牛ヶ淵側は、九段坂の方から竹本主水正、櫻井正之助、菅沼信濃守、土屋平三郎の四邸が清水邸門前まで並び、對ひ側の九段坂下の角が、井關縫殿正、それから能勢河内守、小笠原順三郎、御用屋敷、竹田伊豆守預り野馬仕込所と並んで、雉子橋に達するのだ。(方今の佛蘭西大使館が野馬仕込所の跡、大橋圖書館の所は小笠原の屋敷跡)然るにその後安政四年版の江戸圖には、九段坂下牛ヶ淵側の竹本、櫻井の兩屋敷に代つて、蕃書取調所と爲て居る。是が實に方今の東京帝國大學の最初の前身だ。

久しく鎖國主義を嚴守して、一切の外國書を讀むことを禁じた幕府も、嘉永六年米艦來航の爲に促され、始めて洋學の必要を悟つて、先づ幕府旗下の子弟に和蘭の學術を教授すべく、安政二年に創立したる洋學校がこの蕃書取調所であつた。而も當初は未だ學校と言はずして洋學所と名け、次に蕃書取調所と改稱し、この九段坂下にて、箕作阮圃、杉田成卿、川本幸民等を教授したのだ。後に蕃書の二字を洋書と改め、更にその位地を一橋外(現時の商科大學用地)へ移り、名を開成所と改め、王政維新の後、明治二年に名を大學南校と稱し、同五年にまた開成學校と改稱し、同十年に現時の本郷なる舊加賀藩邸跡へ移つて東京大學と稱し、最後に東京帝國大學と爲つたのだから、九段坂下牛ヶ淵附近は、實に我國近世文明の發祥地である。

維新後、この邊りの旗本屋敷跡は陸軍省に屬し、靖國神社附屬地となり、暫らく荒廢に歸して居たが、明治十六年中、故内閣大書記官法學博士杉亨二氏(故高山樗牛氏の岳父)はこの地の一部を借用して共立統計學校を創設し、時の統計院長陸軍中將鳥尾小彌太氏を校長に戴いて、始めて統計學を教授した。この學校は明治十九年に閉校したから存續期間は短かゝつたが、而も現時の内閣統計官横山雅男氏を首とし、多數の統計學者を輩出し、爾來諸官廳の統計整理に貢獻した功績は甚だ多かつた。

更にまた此地は曾て帝國圖書館の建設地として決定したことがある。それは明治三十一年で、現今の上野の帝國圖書館を新築するに方り、文部省にてはその候補地を九段坂下と、霞ヶ關の陸軍教導團跡(方今の司法省向ひ側)及び現在の上野との三所に選み、交通の利便に重きを置いて、九段坂下に決定し、その時まで牛ヶ淵は遊園地として、花木を植ゑ、園池を設け、藤棚を造つたり、噴水を備へたり、懸茶屋も數軒出來たのを、圖書館用地として俄に一切取拂ふたが、その後に至り、地質が大建築に適しないとて見合せとなり、方今の上野へ移つたのだ。

この邊りは市内に四通五達の地なる上に、舊江戸城の石垣や濠に對し、且蕃書取調所跡といふ史蹟でもあり、附近は靜かにして交通に利便多き爲に、これを圖書館に利用するの適當なるは誰が見ても一致する故、大橋圖書館にても、震災前に早くから此處へ注目し、敷地の拜借を屢ゞば陸軍省へ請願したが、その前に同省は、舊清水家表門前の一部を、精華學校と愛國婦人會とに貸下げられしも、その後は他に一切貸すことを止めて專ら遊園地とする方針の趣で、終に許可にならなんだが、幸ひに大橋圖書館は、公園の對ひ側民有地を買收することを得て、積年の望を達した次第だ。



大橋圖書館書庫の一部

去れば新築の大橋圖書館の表門の對ひ側の、櫻樹や柳の間に大きな石碑が三基立て居るが、その一は西南戰役の熊本籠城中、鎭臺司令官(方今の師團長)谷干城將軍の命を受け、巧みに變裝して城外に脫出し、萬難を排して重要使命を授軍に傳へ、後終に戰死したる勇士谷村計介の記念碑で、軍人龜鑑の四字の篆額は、有栖川大將宮殿下、撰文は當年の熊本鎭臺司令官谷干城將軍だ。その他の二碑は、西南戰役中に戰死したる陸軍士官學校生徒の記念碑と、同戰役中の一般戰死者の表忠碑で、前者は川田剛、後者は中村敬宇二先生の撰文だ。尙ほその外に一大鐵圓塔に、蜂の巢の如く大小の孔のあるは、日露戰役中、我軍の觀測所に利用したる東清鐵道沙河驛の給水槽で、大小の孔は砲銃の彈痕であるから、當時の激戰を記念する爲に此處へ移し運んで立てられた理由も詳りに鐵板に刻してある。

大橋圖書館は此等の記念物を前にして建設したもの故、面倒な宛名の肩名を省き、單に東京九段坂下の數字を普通信書に用ふる積りであります。斯くて開館は來る六月中の豫定で、ゆえに圖書の蒐集と整理に從事し、館外貸出は最早實行して居ります。(大正一五、四、三〇稿)

○高島数日間旅行の帰途中俄に春風亭の脱稿に没頭したのが今の主なる原因である、脱稿を着手してから満三十日目に脱稿したばかりだ、

近頃新聞紙上に盛んに出る河野の重傷の件は早速花柳病院の大出身の高橋の大臣で英文ひあつらへ出しことである、高橋から癌の疑ひがあるとの高橋入院した以上、主治医の表現を拘らず癌と自信した、とうく公首癌とすることが判明した、公首の兄弟は未だ見ない、破裂して死ぬものだとの、一旦復活と新聞に載り漸次平快に赴くらしい

十二行

から、田舎に行きたくなんと云ふ考へを抱き、今社にも実江を見舞とやつて見ること、あるものとまぐ床から離れることも出来ず、公氣を不安感じも無しとの情報を得て、別庭に赴と直覚した此が果して如何ようも無しと雖も真と嘉も出来ず、早速は前志はく余を訪ひ来り時と面白の話を交へた、大臣の送と洗面して職員迎賓室を無理押付さる此時もさすがに訪れ来て心配を跡やたことがある後と大臣大臣ようてから、余ら三吉を伝聞したことがあるようの一は的劇会社の争議と関したもあった其の際は宮部く余初めて訪問して、入院の後は訪

間にても面倒が出来るとの説、即ち一住郎と過つれのハ意義
であつた、長い昔話の政治生活をやつて終こ迄
筆を引き得たのハ成切といふべきものである、今数月流
かして漸く然る処の消息を知つた、彼女早く養
家の帰を失つて一世あり、養あるとも一世を暮けれ
ども養ふの義務と失敗とも離縁とを、今ハ獨身
の女と孫を貴すの傍紙ありて然者ならん哀れなる
境界也

早大方面のこと新聞紙に三記載きたる新聞社の玄関
真正面の田窓と描くべく新山大観をいつそや
いの掲く拙き、余ら日提御し二人分擔して此時の
図を仕るべしとす、其こと決しとなるが彼其

十二行

ハ金と考案を立て面白き
日雲間を上野と地日の昇るを図ることと
空ますとこと分るとこと分るとこの時の図る拙
画なり、文野をシ山ポライッすることあしく不
用の物ものきたるあらさんとも日本書の意匠とも
ハこの位のものであろう、昔一事ハ思うく富士山麓
三大公園を設けるとの甲州の富豪を中心とした
会社おこり(株式)設と地位を起手として
此の株式を募りつつあるか一万株を有力なる二
三大のと定の附日まる事と定まる、早大なる定の附を
申込来るとの、此の公園任意ハ金が故味上頗る
賛成を表し居るが早大かの公園

と今度は山形屋さんと於ける写真を紀念の為めこゝに収めおく

記事は本巻の前頁に

過渡と土地を有することハ吾々の社会と謂ふべし

於保田の業を廃して新に隠業の務を終む

ます奮勉ひたすらに其後隆々盛の矣敬業が次ひ

来たれば松の木の目抜段を後しも業組を信

新しく、皆んが出来もきれ乃ち隠業中に

かくることゝなりし此の村山亀蔵が業祈る此の新

柄舟江の岐に新なる余が考察を書いて送んよ

と考へ新しく仮令のことを頼んで来れば武

ん乃ち本隠業を書間休に書いてやつれこんも面

白のひまつぶしとなつた。

○過般新潟県内有志と弥彦

参拝の帰途岩室の温泉に飲んだ折の写真

あり（九月十七日）

十二行

○大阪毎日新聞社に図書こ部を設置せられたることは誠に慶賀の至りである、其の分布の大略を掲ぐれば左の如し

九月十七日録

一　帝室

皇室典範年表や歴代天子の宸翰
皇室の記録の類の別、として美術
花本は図書寮に保管してある、
こんどは徳川氏の紅葉山文庫の
原本も保管されてあり、献上本其他の
からすである

二　官廳

各官廳又ハそれ〳〵其所屬の記錄があるに立ちまさるのが、宮者所藏の本ハ内閣文庫と京書庫に藏もあつてこれらハ幾萬の圖書が藏せられ中ゝ古版もあり珍らしき写本もある

各藩士の書
民間や社寺
ちゃんと
ちゃんと本
徳川家ち
拾取本

三　圖書館

宮内公立の圖書館を特殊圖書館と名くハ尤も包含し藏書の數と云くハ尤も大なることゝ云ふらしいが、これまゝ一私人の文庫が閲覧を許してゐるものも包含する

東洋文庫
美術公立
帝國図書館

四　特別館

左に掲ぐる特別館表慶館ここに藏する圖書のあるものが多くあり殊に善本の圖書館に備はるものが多くあるが、ある時代と特別館と圖書館の分野が混淆して普通或る出版物と特別館と圖書館とのものとしたことがあるのハ地故也ある、書画などの類いも圖書館と別館とのちがいあるが、特別館と差してあることゝきん一例である

五　寺院と宮社

寺と宮とハ仏典と神典のあるのハ勿論
以外寺や宮の縁起、古文書、寺記
の類で、寺宝ゆゑ宝物となるものもあ
り、経の如きハ勿論大部のものがある
一切経の如きそれである三縁山うち
三大花経が有り、文書も云へば寺
又ハ文書がある、真福寺等も古
勅本がのこり、高野山に文書
のあることハ言ふを待たぬ

六　学校

大小官私の学校ハ附属の図書館を有す

法隆寺
東大寺
聖武天皇

高山寺

るものハ第三類の部に入れるとが、第書
かゝるものハ図書館を設け目さうるの
図書ハ飯りあるくハそうらうが、各宮寺
の設けた学校の倍いまゝ家塾
倍くてある図書ハ此部類に入れる

七　藤家（華族）

藤家弾と華族家ハ世上家と世家に
倍する古記共家が同じとなる儀式典例に
関する記録ハ及ぶ古来倍ふ
る古版本古刊の本い決してあるべく大華
族加賀の前田侯とハ松雲侯の
集さる此度本ハ此度の新考館を

そうこう清くそび墨書のものがある

八　帝王家

帝王家とは書道門閥とさすべき人金馬家をいふのである、全に任ぜん天下無双のことを買ひあつめてそれを義とするを誇りとすることゆゑ、多くは書道部類と属せけれども中すべし同者と見るべきことのもある、古墨蹟や法帖の類がそれである、或は古写経もそれである

九　花書家

同者と筆味を有することが多くの同

書をあつめ何巻揃ひといふてある類の同者と筆と全く性質の異なるものゆゑ大小の差ことなれど花書家とは別種なれども清しくそれ、多の四家の部と嘆ぜんばかりきゆゑ、今ふ抜ぬかい一類のとする

十　特殊蒐集家

花書家と云ふてもそれ多方面に数多く同者を義とせざるも或る特殊のものを蒐集し、或は微度的に集め長るものかいくらもある、例へば詩集はやり、或は八川柳もこうする或は俳句もこうする或は

往来物、或ハ英志術、或ハ酒蔵本はかりといふことゝ範圍を狭めてぬけ不と偏しに英集家ハ四方の書つゞけん稿獻のこゝろもあるか数ハ必ずしも多くなきハ、其数が多額に上んハ是也家に列すべきなれが英集の意味に異なることゝ思ふ所あるから一類とする方面を漏せもある

十一　史料編纂所

こんへ帝大の圖籍にあんとも図書館とハおのへこゝ其の性質を異にする史料の集積所にあく、おのを史料とする

十二行

〇大阪毎日新聞から頼まれて原稿ハ三日間没頭して七十枚書きつけて出来て、図書館の不備とを訴ふる特殊図書館の創設とて、全国に散在する現在書物を調べ其の名の知れある台帳を調べ其の書目を整理して一覧表を作る前、図書館令及び行令全文を掲げ

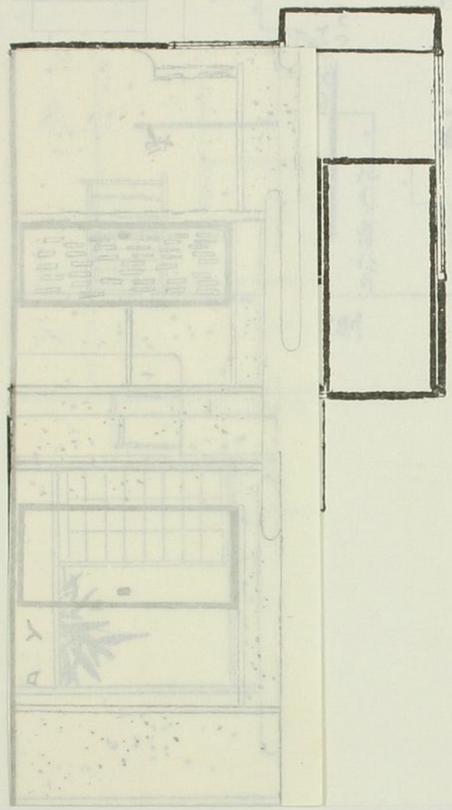
〇大阪毎日新聞から頼まれて原稿ハ三日間没頭して七十枚書きつけて出来て、図書館の不備とを訴ふる特殊図書館の創設とて、全国に散在する現在書物を調べ其の名の知れある台帳を調べ其の書目を整理して一覧表を作る前、図書館令及び行令全文を掲げ

べき各代の文書を謄写し頒ける備ハなるこの世法家の貴重書籍の副本ハこれに備ハるとふも可也又分布の一部となるべハず

と頼むから、取り敢ず前野氏の手の届を探くやうに
其の大要を話した
雑誌太陽が近頃すつかりと余が投稿を求めてくるのは何故かとうらぬぎすると隨筆一篇を求めて来た、今度は新しいことを思つたから
余は的軍出發を約する隨筆中に入るべき
稿の内容をいとの首都を要することがある
から之れを以て応ぜんとし、一応の手紙を
之れ外出も出来ぬ無聊の時に乗じ
故郷の情景追想録を列挙して
のまを少しく書いて見ようと思ひ、
○第七編書斎が刊行された、其間に一二篇を
つくることがある、

十二行

きれ屋の図

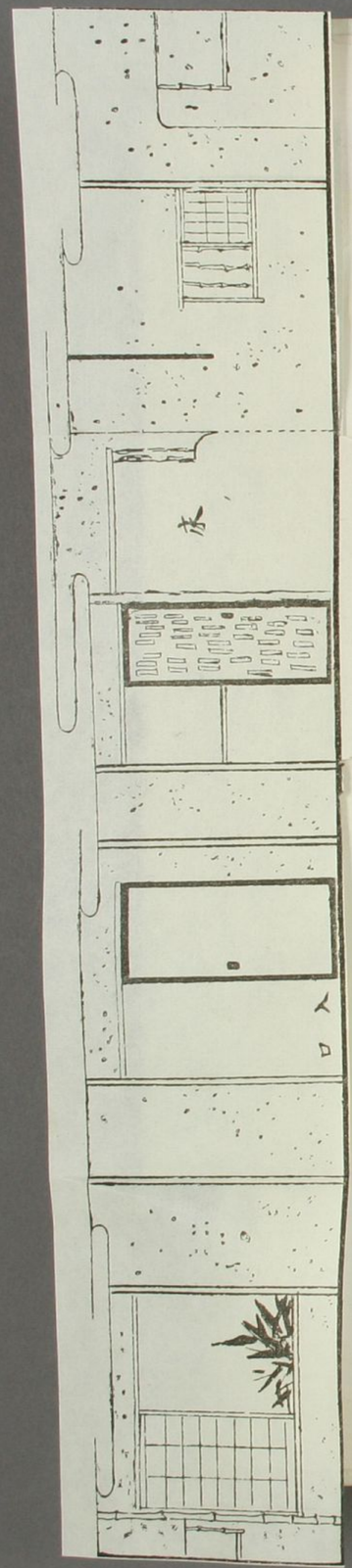


鈴屋の階段

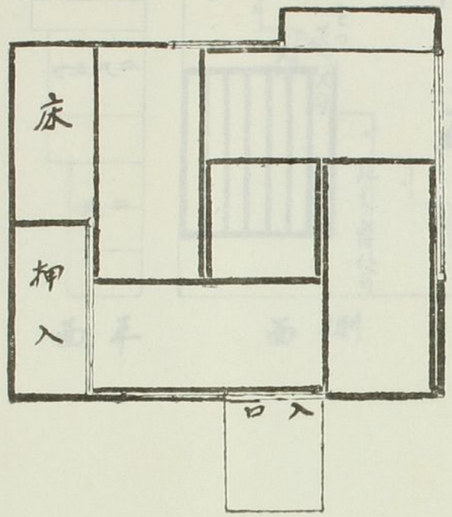
と頼むから、取り敢ず前段の事の為を書くやうな事が投稿を求めてくるのは何故かとうるぬぎる。隨筆一篇を求めて来た。八つ斗の断片うとも思つたが、今日の年出版を約する隨筆中に入るべき筈の物、とのことの為、執筆を要することがあるから、それを以て応ぜんとし、一応の事情を外出も出来ず、書物の時に乗じ、執筆の時間を過ぎ、別荘に居りて」と題し、過去の事をやしく書いたもの、

○第七編書斎

かれ刊行さん、第二巻を表と



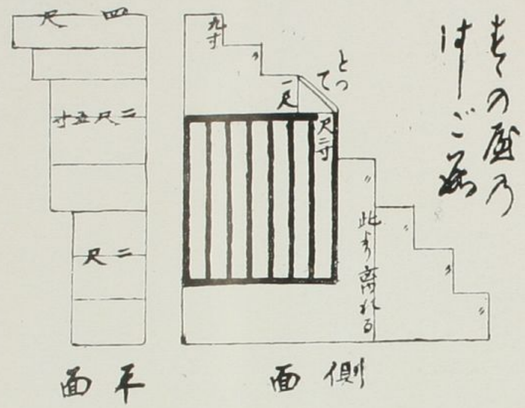
きれ屋の図



鈴屋の階段

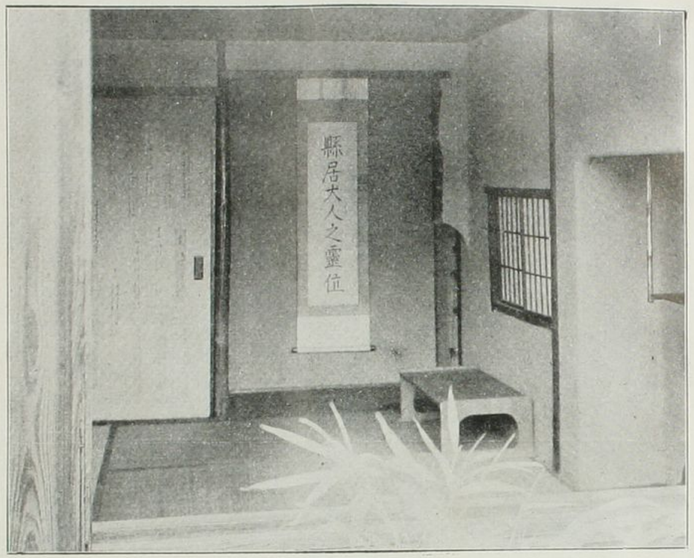
と頼むから、取り敢ず前段の事柄を抜くべき
其の次第を詳しく
雑誌太陽が近頃まうそうの余が投稿を求めてくるのは何故かとうらめしく思ふ。隨筆一篇を求めて来たれば、今の所謂いろいろ思つたが、余が所出設を約する隨筆中に入るべき筈の物なれども、とのゝ首(執筆)と要するとあるから、それを以て座右の一冊とし、一冊の手帖に書かんとて外出も出来ざりしなり。無聊の時に乗じ、拙筆の情況を述べ別荘に居りて」と題して、追追の事をやしく書いたれども、
○第七編書簡」が刊行されん其間に二三巻を及ぶ

十二行

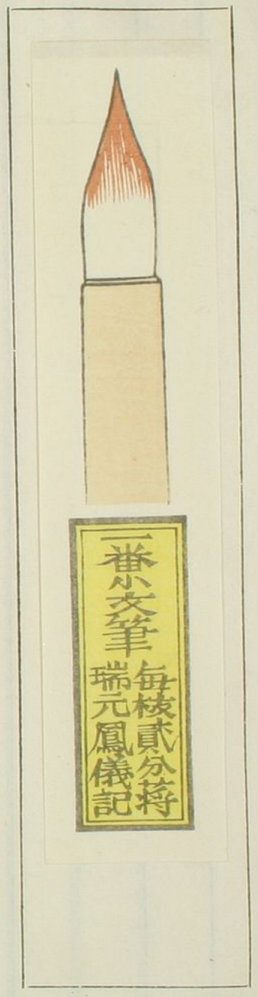


段階の屋鈴

十二行



鈴屋の内部



鈴屋とその鈴について

本居清造

鈴屋は自ら（宣長）好みて造れる四疊半にして、天明二年（五十三歳）十月十三日に其の工を起し、十二月上旬に至りて成れり、室の概略をいへば、八級（下部三級は箱形となし、紙屑入れに使用し、取外すことを得）の階段を昇れば入口（西北）に、襖一枚の引戸を建つ、室内は左側（東北）に床と押入とあり、（押入の襖には、もと淡彩の山水を畫きたりしが、破損せしを以て後にこれを張り替へ、門人の當座短冊を貼附したり）床の口右脇の壁に細長き板を塗り込めあり、右側（西南）は幅一間の中窓にして、中庭を見下し得べし、正面（東南）の中央に

小窓ありて（窓先に竹格子を設く）障子二枚を建てたり、（後年隣家二階増築の事あり、窓はその側壁に妨げられて用をなさず、依て竹格子を除き、板を以てこれを張り塞ぎたり）、小窓の右に敷込ありて、その一隅に棚を釣れり、壁はすべて眞土を以て上塗となせり、庭に植ゑたるは、松、棕梠竹、榊、矢竹の四種なり。

宣長性鈴を愛し、自ら好みて造らせたるものに、三十六の小鈴を六個づゝ赤き緒に貫き垂れたるあり、新築の書齋の柱にかけて朝夕の慰みとなす、鈴屋の號これより出づ、但し原品は、宣長の歿後、遺物として人々に分與したれば今存せず、現存せるは文政五年（二四八二）の冬、男春庭の模造せるものなり、尚門人蓬萊、尚賢の贈れるものあり、寛政十二年紀州侯徳川治寶の覽に供せる時、宣長の記して添へたる由來書左の如し。

右鈴出處之事

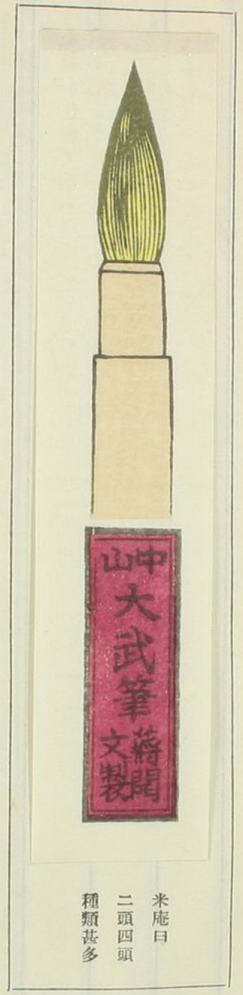
伊勢國渡會郡神路山之内
内宮御境内五十鈴川之邊土中より堀出し候古物、天明之頃彼宮祠官蓬萊雅樂荒木田神主尚賢許より所贈與宣長所藏之鈴也。

寛政十二年庚申十二月　　本居宣長

書中「天明之頃」とあるにつきて、本居大平は「按ずるに安永年中也、若山客舍にて認られたる時、闇記のまゝにて天明とされたる也」といへり、又濱田の藩主松平康定の贈れるものあ

り、春庭の書付に「唐金の大きなる形は、隠岐國造の家に古くつたはりたる形を鑄させて、松平周防守殿よりおくられたるなり」とあり。

尙宣長京都にありけるほど造らせたる鈴もあり、鈴屋衣の地紋と同じく、紗綾形を一面に刻せり、其の外「養老年製」を刻したるもの、人面の鈴等あれどその由來詳かならず。



米庵曰
二頭四頭
種類甚多

宣長大人の書齋

山中靜齋

鈴屋と云へば、本居宣長の舊宅全體の名のやうに考へる人があるかも知れないが、嚴密に云へば二階の四疊半の一ト間に名付けられた名稱で、舊宅全部を指して云ふのでない。

一體この二階の一ト間と、階下とは建築された年代を異にしてゐる。階下は宣長以前からあつたもので、二階は宣長の代となつて建て增したものである。

宣長の日記によると、天明二年十月十三日（宣長五十三歳の時）から二階の普請に取りかゝつたとあり、その年の十二月の上旬に普請を畢つてゐる。越えて三年三月九日に二階で始めて

歌會を催してゐるが、その時の歌に

おとめらかま手にまきもつさく鈴の五十鈴のすゝの鈴の屋はしこのしきやの丸木屋のを屋にはあれとしなたてる梯ふみならしのぼりたちふりさけ見れば御城のへのそのみつ山はみつえさししに生たるはしきやし君まつの木もうるはしく見かほし山そいさなとり海のはまひによる浪のいやしく〳〵にとこしへに來入つとひてまそかゝみ見し明らめねみやひをのともとある。この歌から考へて、此の時既に鈴屋と名付けられて居たことが知られる。のみならず危げな段梯子——天井の低い四疊半——腰窓から屋根越に見える松坂城……など、四圍の景色までが歌はれてゐる。移轉後の鈴屋はそれを偲ぶによしないとは云へ、部屋の中は大人在世の時分とは變つてゐないと云ふ。

窓の反對の側は床と押入れとになつてゐて、押入は上下二段に分れ、上の方は棚になつてゐる。床は板床で、變つた一種の寶螺床になつて居り、その内うらの壁に幅五六寸、長三尺計りの杉板が折釘で垂られてゐる。杉板の上には赤い緒にくゝりつけられた幾つかの大小とり〳〵の鈴がある。嘗て大人が自ら記して、

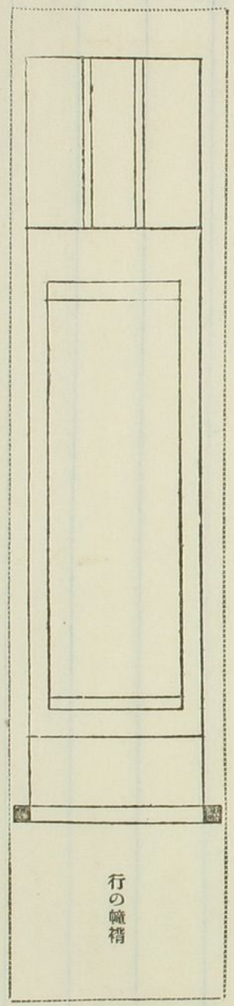
三十六の小鈴を赤き緒にぬきたれて、はしらなどにかけおきて、物むづかしきをり〳〵引ならして、それが音をきけば、こゝちもすが〳〵しくおもほゆ、そのすゞの歌は、

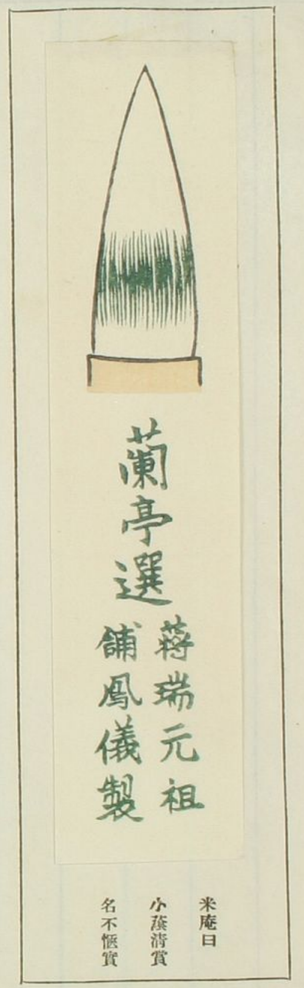
とこのへにわかゝけていにしへしぬふ鈴かねのさや〳〵、

かくて此屋の名にもおほせつかし。

とある如く、鈴の音にうさをはらしつゝ、遂に幾多の著述が完成せられたのである。その著述をものされた机の置き場所は、入口の突當りにある。床脇の小窓の下邊りではなかつたらうかと聞いたが、自分の考へでは肱掛け窓のところでなかつたらうかと想像する。何故といふに第一床脇の小窓は高過ぎるので、座ると顔だけに光りが來て、肝心な机の上に光りが流れて來ない。脇掛け窓の方なれば机上は凡て明るいわけである。さうして例の鈴は、右横の柱にかけられてあつたのではあるまいかと想像する。さすれば左横にある吊り棚にも手がとゞく、何かと便利であらうし、第一床の直ぐ横に座ると云ふのがおかしい。床を背負ふた方がまだ自然な氣がする。

室内は如何にも狹苦しい。窓は尠く、少さいが二階のことである。決して陰欝ではない。併し夏などは如何にも暑さうである。





鈴屋について

金子元臣

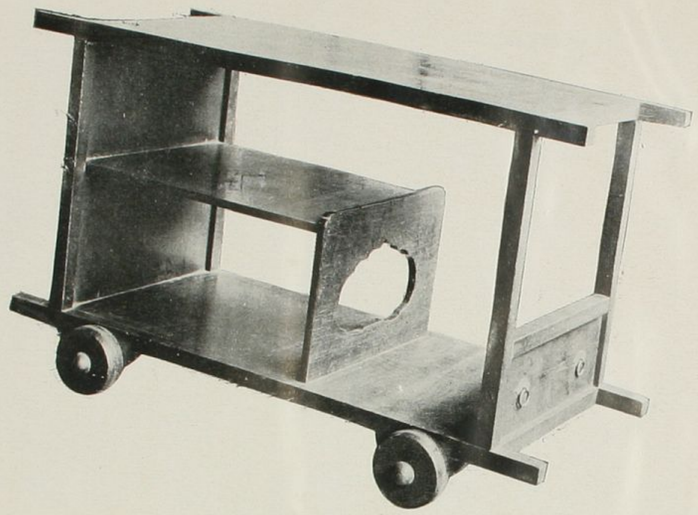
宣長翁は頗る奮鬪的な學者で、非常に精力家でありましたが、五十三歳の時瘧を病むに至り靜なる研究の生活へ入つたのでありまして、此年に普請した二階建が卽ち翁の書齋鈴屋であります。

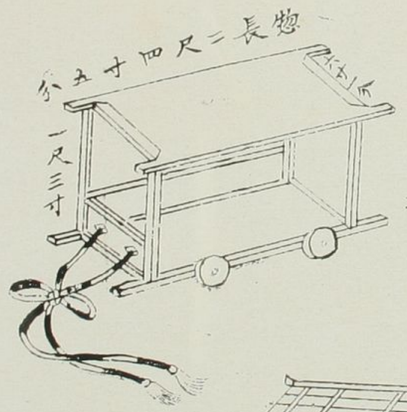
この書齋は棟の高い茅葺の屋根裏を利用したものですから、狹いもので、やう〳〵四疊半ほど、天井はうつかり起つと頭を打ちさうに低く、明り取りは南の窓が主で、それに對した北の方は、右が淺い床の間、左が押入で二枚襖になつてゐ、その横手が出入口であり、丸で穴のやうな感じのする部屋ですから、暑中などは實に堪るまいと思はれます。

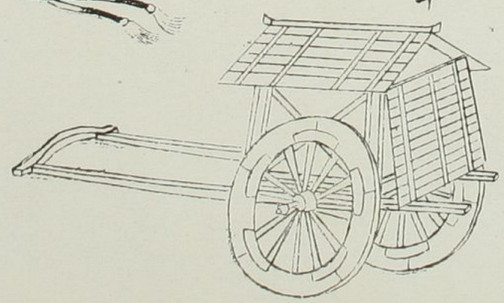
變つてゐるのは可なり急勾配の箱梯子で、下の三段ばかりは別に造つた箱段を寄せかけてあります。この細工は翁自身の手をおろしたものと傳へられ、それに用ゐた大工道具なども現に保存されてあります。下箱段を取りはづし自在にした理由は、下座敷の邪魔にならぬ爲が主であると想像されるが、面白いのは翁は書齋にのぼる時、この箱段を蹶やつて昇降を斷つたことであります、背水の陣を布いて研究に沒頭する、何といふ尊い事でありませう。かうして翁が幾多の生命ある大著述が生れたと思ふと、實に涙がこぼれます。

家人との交渉を避けて、得難き靜寂に入るには、我々もかうした必要があると思ひます。私は元から書齋をもたず、あつたらさぞと常に羨やむでゐましたので、この頃郊外にバラックを拵へ、書齋らしいものを造りましたが、明る過ぎて勉强も何も出來ません。よく明窓淨几といふ事をいひますが、本當の勉强にはむしろ不明窓不淨几の方が適當である事を發見しました。攝心の室なども薄闇くしてある事は精神の統一集注を計るのに好都合だからであります。

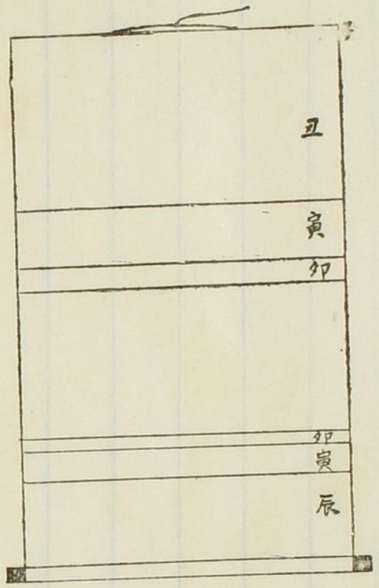
翁の書齋はこんなに狹い。それに著述に要する數多の古ぼけた蟲喰だらけの參考書や、各種の著書の原稿や、學友故舊門人達の書簡などが、山と堆積されてあつたらうと想像すると、隨分ごみ〳〵として汚なかつたらう。明り取りはさう惡くない部屋だが。



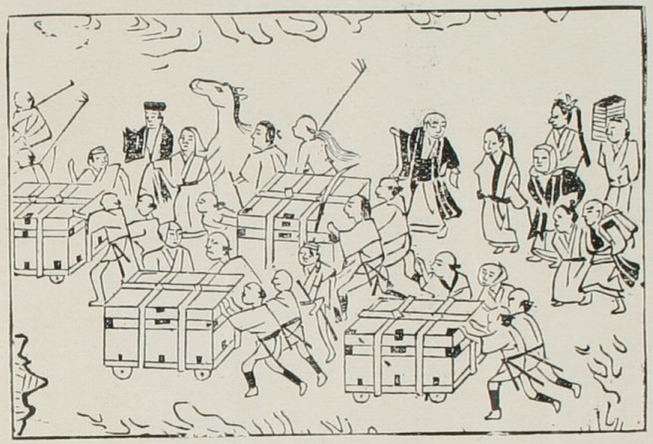




此室に鈴屋といふ屋號を附したのは、室内に鈴を懸けてものむつかしくなつた時、之を引鳴して心氣の轉展を計られた故であります、此趣のある工夫は周知の話でありますから委しくはいひません。



子 打柵竹
丑 上標
寅 引首
卯 經帶
辰 下標
（宋周密思陵書畫記所載）



車付長持
むさしあぶみかから

金玉交辯 陸中選

文車

關根正直

私のもつてゐる文車といふのは、例の和訓栞にあります「昔は文席に引出して書籍の用を辨ず」と云つたものは、徒然草の「多くて見苦しからぬは、文車のふみ、塵塚のちり」とある文車の事だと申すので、傳へる所に依りますと定家卿が創作したかの如くになつて居りますが明確な話ではありません。

然し私は日本百科辭典や其他に引用してあります、例へば輿車圖考や、古圖類聚の中の文車の類、卽ち山槐記に載せたる「法承三年十二月五日の條に前關白文書、於大内左兵衞陳屋被

「合目錄云々被召寄文車七輛櫃百餘合、衞士等守護之」とある文車と同一の物で書籍を積み込んだ車の圖には疑ひがあるのであります。尤も徒然草の文車は文庫の广を失つた誤寫であると云ふ說でありますが、常に書物を積み込んで運送する爲に、大きな荷車の樣な物を、幾輛も常備しておいたかどうか、そういふ事があつたかゞ疑はしいのです。石山緣起や鳴門中將の繪卷にある文車といふのは文書のみならず、他の物品をも積む一種の、上等な荷車ではないでせうか。

兎に角私が先代から持ち繼いた文車といふのが是で在ります、(口繪參照)今日では古くなりまして實用には致しませんが、その工夫と云ふことが非常に氣に入つたので大切にして居ります。定家卿が用ひたと云ふものと是れとは寸尺が合ふ樣に覺えて居ります。私のは

巾　一尺一寸程
横　二尺四寸程
柱高　一尺三寸程

でありまして材料は「櫟の樹」で、塗料は全く何にも用ひてありません。昔は室內みな板敷ですから何處へでも引ひて行く便利を考へたもので、文人の好みを十分に現はしてゐまして極めて雅致に富んで居ります。

車付の長持、戸棚

長持や戸棚に車が付いてゐると云ふのは、或は蛇足の感があるかも知れない、然し乍ら長持が例の平家物語紅葉の段に出てくる「あやしの女の童のながもちの蓋さげたる云々」といふ小供に所持出來るものから、二人にて棒を渡し擔ふやうに出來てゐる大型に到るまで、既に移動を必要としてゐるものであり、又戸棚に於ても、本來家屋に作り付けのものが置戸棚に變化したといふ事が既に移動への一歩である。

此の兩者が車を付けるまでに發達してゐなは、牛然の歩みと云ふ可きである。

それにはそれだけの自然淘汰をさせた何物かから、何故に今日其姿を見せないかといふに、

ゞ在つたのである。今その一例を挙いて見るにむさし鐙に「天正より以來明暦のころまで都鄙ともに車長持と云へるもの家々に備へて非常の具になしたり、後江戸にて是を禁ぜられ皆在方に轉じたり」とある。江戸時代に車長持を禁じたといふ事は一寸異様に思はれるが、嬉遊笑覽にある説を見ると「明暦の回祿に不便利にて夥しく燒たるより、後廢れて用ひざりしといへるは非なり、天和元年辛酉十一月町觸に火事出來の節、兩國橋かり橋長持並車長持通り候へば、往還の妨げに成候間通し申間敷候云々とあり、其頃より次第に廢れしなり」とある。大正十二年の大震災を經驗した私共はよく之が了解出來るやうな氣がする、尚ほむさし鐙の挿繪を見ると、一層にその感を深くするものがある。

偖て廢され物と雖も、吾々が今日參考とし得る物ならば大いに復活せしめたい、今文車が生長して、否偶然の一致を以て、大型本箱に車の付けたものが外國の圖書館には使用されてゐると聞く、所謂西洋文車が便利視されてゐるからには、車付の長持、戸棚も改良を加へて何等かの方法で現代化したらと思ふのである。（金華山人）

○世界と新たな要人に墓を刻すべき家へ無量壽國」の四字と略を定め、自筆集字を富士に登り見るを思ひ、柿瀬日年が訪ひ来たるから是幸り之れと依頼し、且つ泰山の金剛經の家び自分の形まる此の字が何かあるまいかとお話しをしたる者為社まであるところから、元字の七と見れば、成るほど此の金字もあるくらいなら、珠と經の字を合はせるのだから妙法蓮華經の意味もある、此の泰山の慶雀は誰れの者とも判然しないが、日年は鄭道昭説を主張してゐる

○本年分の所得稅かひとく增加しこんまむ一朝四万五十四円位ひあつたのが五万二千四円しかなれ

その他の場合にて来る以、前日期の不得ハ配当金を減じとあり、収入の大体のようなものなれ、毎年の税率の改正があったとの言く、何かを）某がある事を知ったる税務署く人を出しも怪為を守ってそれ
ると思しも帝国通信の高もあるべきもの
が千円以上となるとみる、なる早大の年金千三百円
とする場合の収入となる限りを隠してみるから、主
の代りと思へハ幸抱の出来ないようなものかいる他
るもの）某があるなる知れ人が（迫）つも特査する
免書類と実と収めおく

大正十五年九月廿三日

十二行

立別	所得ノ生ズル場所	金額	摘要	戸主分
報酬	帝国通信	一、〇二二〇円		
〃	日清印刷	二、五〇〇		
〃	出版部	二、三〇〇		
手当	〃	一、四〇〇		
報酬	文明書院	四八〇	所得金共債	
賞與	日清印刷（二月）	三、四五〇		
〃	出版部（〃）	三、二〇〇		
〃	文明書院	一、二〇〇		
印税	出版部	八〇六		

NISSHIN PRINTING CO., LTD ENOKICHO USHIGOME-KU TOKYO.

配当金	文明書院（二四分）	四五	
〃	日清印刷（〃）	六〇〇	配当金ノ方掛
〃	出版部（〃）	三九一四	
田	新潟県新発田神山	三三八	
畑	〃	一四	収入ニ必要経費ヲ加除シタルモノ
宅地	〃	二五	
計		三〇一一四	決定ハ四円ヲ切捨テ
貸家	東五軒ヶ		家族 昌介
配当	日本石油（二四分）	六〇	収入ニ経費ヲ加除シタルモノ
計		一八六	配当金ノ方掛
		三三〇	

配当	日本郵船（二四分）	三〇	配当金ノ方掛
			家族 みつ介
配当	日清印刷（二四分）	一五五	配当金ノ方掛
〃	日清生命	五〇〇	〃
計		三一一	
但決定通知ハ総テ四位ヲ切捨テ			

○威冒未全く癒すに至らざれども無聊を慰するに足る
事二随筆一の行を修めて見ること、如何あるべきこの十数
の、すべて嘉稿を投ずしても附けかのべきこの十数
件を書記しに、中〻に注意なる事柄多く
もあり、

九月朱四日

○故味なる田園の風のいい

一 西京故と国十郎と会せし記

二 朴泉寺と歓梅の会 六月廿九日の記

三 近衛公と西京に遊ぶの記

四 野崎武左衛門の歓待に禁酒を破る
の記

五 西本願寺にて六朝の書を観るの記

六 五海の遊 の別荘に行るの記

○高砂の内まで着くべきこの岩午あり
更に海のほうの左のかし

一 伊藤春畝と会談

二 大村益次郎の解剖を観るの記

三 赤倶の盃盤

四 西郷牙城の動静 焔硝

五 勝伯芳原の招待 浪解と云く

六 大木喬任の慢癖

七 北海道 麦酒会社のお鼻

八 中津 雪嶺の陽抱

九 日柳 蕉風のこと

十　早川京平のうつし

以上

○長かく市岡芝集の道楽をやつて一時八巻幅堂
こ満ち父伯年師匠を始め多くの賞を彩して弧
人と全部を四巻大完こ流り遺ます筆所は
ちく、その後い多く勝ふことなるべく白うく
書画の美を尋ね以陶ふ、僅くれ弱める二〇
間部類を陶のして、四巻の村山秀海の祝賀
任かたに前日市岡芝十本を千円と売ちし今
又物物とうう長くこの十二幅を秀海をして書

十二行

却やしもることとなり、北斗の幅ものの絵張あ
り、其の梗概の別紙目六と秀海の注する不の
如し、夢ゆて家巻ゆうし紀念のと、変と目録
を取めおく、家巻右物十巻の書簡ものを右
皆は文四親戚さの四ゆうて多くい家を作あべき
ものも

九月朱言記

特別即賣品目錄

一、石川丈山先生尺牘紙本　横幅

先生名は重之、六六山人、四明山人、凸凹窩、東溪等の號あり、初め德川家康に仕へ、大阪役に殊勳ありしも軍律に觸るゝ處あり遂に京都に屏居す、藤原惺窩、林羅山と親交あり、詩を能くし日東李杜の稱あり、後詩仙堂を建て三十六詩人の像を掲げて自ら娛しむ其高風欣すべし、此幅普通の消息文に過ぎざるも辭意懇切鄭寧を極め書法亦風神超越意に隨て縱横佳境に入る妙と云ふべし、先生の書贋作甚だ多く大抵信ずべからず、今此幅文、書雙絕珍賞すべきかな。

二、細川三齋公小文（侍女に遣したるもの）　立幅

細川三齋公（忠興）は幽齋の長子、父に肖て智勇兼備の良將たるは世人の熟知する處なり、傍ら和歌、茶の湯、乃劍の鑑定等百技に長ず、此幅僅々二十五文字の小文なるも押捺せる小判の羅馬字にて刻せるは最も珍とするに足らん、蓋し大事のきれつゝらを其侍女より取寄せんが爲めなるを以てなり。

三、契沖阿闍梨消息　横幅

函題は故東久世通禧伯の筆、所藏者は千葉胤明氏、鑑定者は此種の第一人者たりし大口鯛二氏にて、大口氏より拜復契沖師の消息は御察しの通り千葉氏の所有にて保證の出來る眞蹟に候へば御取入れ然るべきかと被存候代は廿五圓と申す事に候不庵と申す程にも無之故月日の闕如は高示の通り此種の消息の常習に候半尙價格等御意見と相違致し候はゞ御戻しにて差支無之候其邊は御斟酌御無用に成下さるべく候云々と、以て此文の眞價を知るべし。

四、心越禪師尺牘　横物

日本印人傳に曰く心越書畫、彈琴を善くし、頗る神妙を得、殊に篆刻に精しく、能く其法を傳ふ、我邦篆刻の技心越獨立を得て始めて明らかと、以て禪師の人となりを知るべし、德川光圀深く師に歸依し、水戸祇園寺の開山たり、此書蓋法を學んで神解あり、天賦の才人たるを見るべし。

五、立花北枝芭蕉句入尺牘　横物

北枝は加賀小松町の產にして、蕉門に入り、夙とに其妙境に至り、花月傳、北枝傳、金言抄等多し、而かも遺蹟極めて少し珍重すべし。

六、園女歌入消息文　横物

園女は伊勢松坂の人にして、岡西惟中の妻となり大阪に住す、和歌に秀で、又俳句を善くす、元祿二年芭蕉翁の門に入る、夫死して後江戸に來り、深く禪に參し、悟道に入り髮を剃して智鏡と云ふ、此文及び和歌は、何人かの七回忌を悼みて作りしものにて、晩年の筆たる疑ふ所なし、是れ亦珍蹟の一たり、觀者輕々看過する勿れ。

七、大淀三千風句入俳文　横幅

名は友翰伊勢の人、初め佛門に入り呑空と名付く、頗る文才あり自から俳諧に達し、一日に三千句を詠ず、是れより三千風と號す、四方に行脚し仙臺に留ること十五年、後大磯に西行庵及び妓虎の碑を建て、此處に居る、後去て之く所を知らず奇人と云ふべし、無言堂、無非軒は其別號なり、此幅文、簡にして俳味深く不盡の妙あり、句亦た誦すべし。

八、夜半翁寒菊版畫入尺牘　横幅

畫聖としての蕪村、俳聖としての夜半翁は、一代の傑物にして斷簡零片と雖も、世人爭ふて珍賞す、此幅翁直筆の寒菊の圖を「チラシ」に摺りて、知友に頒たんとして、其初刷りを見れば色合の點に於て大に意に滿たざる處あり、仍て一々其箇所を指摘して改正を促す手紙の文にて、無頓着極まる俳聖の半面にも、尙ほ此の如き用意周到の處あるかなと嘆賞せしむ、蕪村研究の第一人者たる碧梧桐大人等熟知の名幅なり。

九、大江丸消息文　横幅

大江丸は、大阪飛脚問屋の主人にして、雪中庵蓼太の門人なり、句調常人に異り馬に降れば丹波與作が時雨かな　白圓扇隣の義之に書せけり　以て滑稽飄逸の妙を知るべし、此幅大江の里に生れたれば、大江丸と名乘り、他に號なき旨說き明しある所、重ずべし。

十、横井也有詩入尺牘　横幅

也有は尾藩の家老にして、俳諧の大家にして、名句少なからず、最も俳文に長ず、彼の鶉衣の如き、千古の名文と云ふべし、此幅也有が人の韻に次せし七律を咏ぜし詩入の消息文にて、極めて珍らしく又た稀れなるものなり。

十一、韓天壽尺牘　横幅

韓天壽と云へば、書畫篆刻に秀で、大雅、芙蓉と共に登岳好きにて、三岳道者と唱へた風流洒落の人であつたが、半面非常なる綿密家である、此手紙が夫れで、織屋へ反物と袴地の注文をするのに、見本の小切れを貼り付けて在て、夫れに色々の細注を加へ、縞柄や色合を八釜しく丁寧反覆して說明して居る、普通の尺牘中、此の樣な變りたる手紙は餘り見た事がない、珍物と云ふべきである。

十二、高久隆古菖蒲人形圖入の消息文　横物

隆古は大和繪及び南畫の名家なり、大和繪は中年京都に到り渡邊清、浮田一蕙諸氏に就き妙境に臻る、此幅全く鳥羽僧正の筆意より脫化し來り、筆々飛動大に渡邊華山に酷似す、書法亦た秀逸雙絕と云ふべし。

以上十二幅、皆な市島春城先生の舊藏に係る物なり、函題の書先生の筆に成るを以て知るべし、先生は本會特別賛助員の一人にて何會本會の爲めに幾多の珍蹟妙卷を寄せらる、本會の光榮之れに過ぐるなし、先生往年美術倶樂部に於て珍藏の尺牘約四十卷を讓與せし以來、燃犀の鑑識眼を以て蒐集せし名品、就中其傑出せしもの前回の十卷と、今回の十二幅とす、請ふ博雅の君子來りて鑑賞する處あれ。

○回書を過ぐ一二を挙ぐ、　九月朱吉録、

一　忠臣水滸傳　十冊

北斎山東京傳が忠臣義士を水滸傳
式に翻案したる読本、流石に京傳
なれば、水滸傳らしく虞候の吉き
振を徒と點し来れども、硬氣を避
け軟かく淡きまでに成りたる所
ふべきし、忠臣義士と流れ
の高時北條の亡るも自ら
の為とすべし

一　加古川本蔵実録　五冊

これも忠臣義士物語の一也、文政
五年三月江戸山崎屋河内屋
利兵衛の出版に係る、まづ史籍自
笑の書述の体裁と倣らひ、自序
の自笑主人似増谷自樂と
花鳥歌もて、今北斎翁の挿画
かな三巻目の目録と共に頒ち

一　鎮西武士　文化十二巻　一冊

的流廿三年の頃、春陽堂と称して住所十
二番地に刊行し、其内の一にて低高い

南新二郎、宮本の勝負、彼の比
ぬしとなる。当時読み合ることあれども、これは
宮目録、南新二郎の見文書を基
南の見物する事あるべしとも、其段新
誠潔清白、こゝに、陽会武士
といふ比保高時の天狗攻を扶料
こゝ物語る故なれども味わひ
なり、一部滑稽を終始
と見れば可なり、南の劇を見れば其
面こゝ物語る事を見る、北条珠らし
かゝる壮年時代に有日し
の文を、今の見れば何ともなく憶し

きも心地せらる、北国の悲歌日本紙幅
まも装幀味あり、北次の四方界
の風潮の一斑を見る

○此本上海に刷行の文翼に宋版の模刻を模刻
したるものを出す、古雅愛すべく、殊に版書家
に喜ばるべき二三種を収む　九月廿九日

涵芬樓藏宋刻本

南華眞經篇目

第一卷　内篇　逍遥遊　齊物論
第二卷　養生主　人間世　德充符
第三卷　大宗師　應帝王
第四卷

北磵文集目録

卷之一

石賦　水仙十客賦
食力賦　問景賦
幽情賦　種竹賦

涵芬樓藏宋崔尚書宅刊本

涵芬樓藏宋慶元黄善夫本

史記目録

集解宋中郎外兵曹參軍裴駰

補史唐朝散大夫國子博士弘文館學士

河内司馬貞

索隱唐朝散大夫國子博士弘文館學士

北磵文集目録

涵芳樓藏宋崔尚書宅刊本

卷之一

石賦　水仙十客賦
食力賦　問景賦
幽情賦　種竹賦
糶賦　竹齋賦

卷之二

姚山僧舍怪梅詞　杭州鹽官縣開福寺圓滿閣記

史記目録

集解宋中郎外兵曹參軍裴駰
補史唐朝散大夫國子博士弘文館學士
河内司馬貞
索隱唐朝散大夫國子博士弘文館學士
河内司馬貞

幽情賦　種竹賦

涵芬樓藏宋慶元黃善夫本

史記目録

集解宋中郎外兵曹參軍裴駰

補史唐朝散大夫國子博士弘文館學士

河内司馬貞

索隱唐朝散大夫國子博士弘文館學士

河内司馬貞

正義唐諸王侍讀宣義郎守右清道率

府長史張守節

帝紀

十二行

稀書複製會第一期既刊書目（三十七種四十冊外に解説一冊）

犬百一首　原本松廼舍文庫藏　一冊
寛文九年版の狂歌繪本である。特に其畫に價値があつて一種の職人盡とも見られる。

江戸名所百人一首　原本和田雲村氏藏　一冊
享保頃の江戸名所百圖を描き各階級の人物と流行物を取入れた狂歌繪本。近藤清春畫作。

大津みやげ　原本打越晴亭氏藏　一冊
大津繪卅六圖を集めてカッパと稱する特殊の型紙彩色を施した一標本。安永九年刊行。

萬歳躍　原本永田文庫藏　一冊
一名友甫流踊りとき。萬治三年版。道念節の起源を眞享頃とする俗説を裏切つた珍本。

たかたち　原本松廼舍文庫藏　一冊
寛永二年版。最古の現存繪入淨瑠璃本。挿畫は豐富且筆彩色を施した所謂丹緣本。

亂曲揃　原本永田文庫藏　一冊
音譜と挿畫の外に頭註まで加へた珍しい版式の亂曲集。宇治加賀掾正本。天和元年開版。

仙人龍王威勢諍　原本永田文庫藏　一冊
寛文十一年江戸版の六段本、虎屋永閑正本。金平式の荒事に景事や道行を配したもの。

文七一周忌　原本永田文庫藏　一冊
カラクリの名人で作者を兼ねた山本飛彈掾の作、壓金屋文七の一週忌に上演した淨瑠璃。

曾我扇八景　原本早稲田大學圖書館藏　一冊
巢林子作、筑後掾正本、時代物の繪入細字本

舞曲扇林　原本松廼舍文庫藏　二冊
歌舞伎劇の胎生、舞踊の淵源を説明した初代河原崎權之助の著、貞享頃發行。

剃野老　原本松廼舍文庫藏　一冊
江戸の役者評判記の濫觴。寛文二年刊行。

親船太平記　原本松廼舍文庫藏　一冊

菊慈童酒宴岩屈　同　一冊

花相撲源氏張膽　同　一冊
此三本は安永四年江戸三芝居顔見世狂言の繪番附で、鳥居清滿清經筆の彩色刷美本。

風流諧年代記　原本松廼舍文庫藏　一冊
諧曲名寄を年代記體に綴り見立畫を添ふ。

桃太郎　原本松廼舍文庫藏　一冊
草双紙の先驅といはれる赤本。藤田秀素畫。

名人そろへ　原本永田文庫藏　一冊
區村を悉く外國の事物に採つた小形の赤本。

新板謎づくし　原本松廼舍文庫藏　一冊
寶曆初期の黑本、鼈頭に二重謎掲載。

稗史億説年代記　原本早稲田圖書館藏　三冊
式亭三馬の傑作の黃表紙。享和二年刊行。

當世風俗通　原本松廼舍文庫藏　同
後編女風俗通　同
正續兩編、酒落本中の逸品。豐富なる挿畫は明和安永時代の江戸町家の風俗を知るに便。

人遠茶懸物　原本永田文庫藏　一冊
人物を皆鉤鼻無目に畫いた奇書。芝甘交著。

吉原大雜書　原本岡本橘仙氏藏　一冊
延寶二年の刊本、萬治寛文の盛時から過渡期の遊女を遠慮なく眞面目に批評した評判記。

難波立聞昔語　原本永田文庫藏　一冊
眞享三年版の大阪風三右衛門座役者評判記。

傾城王昭君　原本松廼舍文庫藏　一冊
初代市川團十郎自作、鳥居清信挿畫の狂言本である。歌舞伎十八番の內象引の出所は是。

けいせい筑波山　原本永田文庫藏　一冊
繪双紙に筋書を兼ねた特色ある京版狂言本。

筑波山戀問書　原本長原止水氏藏　一冊
筑波山の案內記を兼ねた繪入の短篇小説集。

徐景作り庭の圖　原本小山曉杜氏藏　一冊
菱川師宣筆、新案の築庭書。延寶八年の初版本に據つて複製。後摺本は人物丸て省略。

陪駕日記　原本溝部洋六氏藏　一冊
田能村竹田が文政三年老侯に扈從して豐後へ下つた時の自筆日記、和歌九十二首を含む。

遊相日記　原本宮本仲氏藏　一冊
渡邊華山が天保二年相州厚木に遊んだ時の畫日記、其文字其畫共に氣韻生動の概がある。

呑込多靈寶緣起　原本松廼舍文庫藏　一冊
山東京傳の黃表紙の草稿、挿畫も著者自筆。式亭三馬自筆自畫の合卷（草双紙）の草稿。

腹之內戲作種本　原本松廼舍文庫藏　一冊
山東京傳の一代の傑作田舍源氏八編の草稿。

偐紫田舍源氏　原本松廼舍文庫藏　一冊
烟亭種彥の一代の傑作田舍源氏八編の草稿。

八犬傳草稿　原本早稲田圖書館藏　一冊
曲亭馬琴失明の前年卽ち天保二年の力作第八輯卷一の草稿、文字既に亂れ挿畫は代筆。

繫升三升繫　原本松廼舍文庫藏　一冊
櫻川吐芳自筆の黃表紙草稿、門人慈悲成筆の吐芳肖像及び四方歌垣筆の跋文添附。

武江扁額集　原本松廼舍文庫藏　一冊
文久時代江戸現在の神社佛閣五十餘を齊藤月岑が縮寫した緻密なる自筆稿本。

歌舞伎十八番圖　原本松廼舍文庫藏　十九枚
明和安永時代の江戸町家の黑本、鼈頭に二重謎掲載。

稀書解説（第一編）　一冊
淺二年間の複製品卅七種の詳細解説。

稀書複製會第二期既刊書目（二十五種四十冊外に解説一冊）

人倫訓蒙圖彙　原本松廼舍文庫藏七　冊
上下階級を通じて人事に關する四百七十餘圖を類別し説明を加へた一種の通俗社會辭典。元祿三年版。畫工菱繪師源三郎署名。

月次の遊び　原本東京帝國大學圖書館藏　一冊
元祿四年版、菱川師宣の最圓熟の筆、諸書に引用さるゝ江戸年中行事の大形繪本。

對相四言雜字　原本松廼舍文庫藏　一冊
支那の日用單語に略圖を添へた明版覆刻本。

鼠花見　原本若樹文庫藏　一冊
鼠の花見の繪本であるが、享保時代の人間の花見風俗を知るに便利な密畫。近藤清春筆。

いろは短歌　原本若樹文庫藏　一冊
往古兒童の暗誦したいろは短歌の繪入黑本、開版は元文頃畫工は近藤清春と思はれる。

風流鱗魚退治　原本若樹文庫藏　二冊
內容は赤本又は初期の黃表紙に似て居て、表紙は綠色である。青本の名稱は或は此等の表紙色から胚胎したものか。鳥居清信畫。

ふきあげ　原本岩崎文庫藏　一冊
江戸淨瑠璃の繪入古版、長門掾爲英の正本、聲曲類纂にも且一節が抄出されてゐる。

新板役者繪盡　原本河竹繁俊氏藏　三冊
菱川派初期の名匠古山師重筆の元祿時代江戸演劇繪本、古來斷片だけ傳はつて聲曲類纂にも書名不詳とし米國の浮世繪研究家の間にも問題にされた稀本。原本は巳亥大火に燒失。

元祿歌舞妓小唄番附盡　原本岩崎文庫藏　一冊
上方芝居の番附、心中たしき、はやり小唄の刷物類、零碎ながら好箇の風俗研究資料。

明月餘情　原本久原文庫藏　三冊
吉原のニワカの再興後三年目の安永六年に大興行した時の繪本、喜多川歌麿畫と傳ふ。

吉原やは小唄總まくり　原本三田村一鳶魚氏藏　冊
廓內流行の小唄集の古版、挿畫は菱川風。遊女を樣付にし客を買手ともと記してある。

繪本江戸土産　原本松廼舍文庫藏　三冊

繪本續江戸土産　同上　三冊
正編は西村重長晩年の作二十六圖を載せ續編は鈴木春信の密畫廿八圖を掲げて寶曆明和時代の江戸名所の實景を眼前に彷彿せしむ。

追分繪　原本小山曉杜氏藏　一冊
追分繪卽ち大津繪を題目とした畫風の變つた寶永頃の刊本、俳人松田珍舍編、高城等碩畫

新花摘　原本米山堂藏　一冊
俳壇の巨星謝蕪村の自筆遺稿に門人松村月溪（別號莫春）が淡彩の俳畫を添へて上梓したもの、俳句あり俳論あり旅中誌もある。

手拭合　原本久保田米齋氏藏　一冊
天明四年手拭合の會を催し珍意匠の色々な山東京傳が寫して色摺にしたのが本書である。

こんてむつすむんぢ　原本若樹文庫藏　一冊
慶長十五年日本耶蘇會の出版「全部平假名交りの木活字印刷、德川時代には嚴禁の祕書、紙數が多い故に玻璃版で見本だけ刊行。

酒佛妙樂經　原本若樹文庫藏　一冊
經文に擬して酒德を頌した龜田鵬齋の戲寫、文晁と抱一の題畫がある。用紙は雲母引。

繪本阿國歌舞伎　原本京都帝國大學圖書館藏　廿八枚
尾州德川家の歌舞妓草紙よりも古く、我が演劇史の原始的貴重資料、奈良繪中稀に見る細緻の描寫、精巧の彩色。複製の苦心も無比。

戲子卅六歌撰檜色紙　原本岩崎文庫藏　一冊
江戸三座の俳優を歌仙に見立てた曲亭馬琴壯年の著、不思議にも未刊に終つた自筆稿本。

胸算用嘘の店卸　原本三村竹清氏藏　一冊
葛飾北齋の自作自畫の黃表紙の草稿、著者時太郎可候とは北齋の別號である。

竹齋老寶山吹色　原本若樹文庫藏　一冊
二代目風來山人築地善交自筆の黃表紙草稿。

參海雜志　原本宮本仲氏藏　一冊
渡邊華山が天保四年三河沿岸の沙漠を踏破し伊勢の一孤島へ渡つた時の寫生日記、筆力を其儘に玻璃版を以て複製し淡彩も省略せぬ。

惺々曉齋繪日記　原本若樹文庫藏　一冊
奇人河鍋曉齋の傷ちず飾らざる繪日記。

洗張浮世模樣　原本久保田米齋氏藏　一冊
久保田米僊の自筆稿本、京傳の小紋雜話に倣つて明治新時代の事物を模樣に見立てた物。

稀書解説第二編　一冊
第二期に於ける複製本二十五種の總解説。

稀書複製會第三期既刊書目（二十七種三十七册外に解説一册）

新添江戸之圖 原圖平澤綠山氏藏 一枚
明暦三年刊行、現存の古版江戸圖中最古の稀品。殆ど全市を燒いた明暦大火以前の江戸市街を知るに無比の典據。縱四尺横二尺、繼目のない一枚紙に刷り丹綠彩色を施したもの。

新板大阪之圖 原圖平澤綠山氏藏 一枚
是も明暦三年の開版で、今から二百四十餘年前の大阪圖である。版式も江戸圖に同じい。橋梁の數だけを見ても今日とは大差がある。

澤庵和尚鎌倉記 原本岩崎文庫藏 二冊
澤庵和尚の詩歌を骨子とした萬治版鎌倉紀行

野郎蟲 原本松廼舍文庫藏 一冊
萬治二年刊行の傍證があつて、年代の上から役者評判記の第一位に推されてゐる。

休息句合 原本川喜田久太夫氏藏 一冊
野々口立圃の自畫自咏自筆の刻本に丹綠の筆彩色を加へたもの、卅六歌仙像の端然たる古型を破つて休息の姿態に描いた會心の作。

獸太平記 原本岩崎文庫藏 二冊
狸の叛逆を十二支軍が討伐するといふ筋の假名草紙で、文體も畫風も書體も古雅である。

長崎土産 原本京都帝國大學圖書館藏 五冊
延寶九年版。著者は畠山箕山、畫工は吉田半兵衛と推定される。長崎丸山遊廓の案内記兼評判記、當時の居留外人の狀態と彼等との關係を詳細に記述してある。

長歌古今集 原本渡邊庄三郎氏藏 一冊
吉原の流行唄を集め名妓の繪姿を添へた天和二年の江戸版、署名はないが菱川師宣の筆。

豐世見久佐 原本水落京二氏藏 一冊
新春行事の俳諧繪本。天和三年版。

天和長久四季遊 原本若樹文庫藏 一冊
天和年間に於ける京都民間年中行事の繪本。

六方ことば 原本松廼舍文庫藏 一冊
柳亭種彦は友人豐芥子珍藏として『用捨箱』に引用した。複製の原本も亦豐芥子の舊藏。

初春のいわひ 原本松廼舍文庫藏 一冊
小形の赤本卽ち玩具本。延寶六年正月發行。

年の花 原本河竹繁俊氏藏 一冊
元祿四年の序はあるが書名未詳。人氣俳優と流行の衣裳模様を相對せしめた繪本。

誹諧童子敎 原本水落京二氏藏 三冊
京坂俳壇の巨頭等の句を集め句意に因んだ密畫を鼇頭に掲げた特殊形式の元祿七年刊本。

役者友喰評判 原本松廼舍文庫藏 一冊
俳優が互に評し合ふ趣向の書簡文體評判記、俳優が互に評し合ふ趣向の書簡文體評判記、

風流四方屏風 原本三原繁吉氏藏 二冊
元祿十三年版。當時の著名俳優四十三圖に紋章を配した大形繪本。其名廣く傳はつて其刊本久しく知られなかつた稀書。

娼妓畫帙 原本打越晴亭氏藏 一冊
元祿版、書名未詳、遊君鑑といふ説もある。鳥居清信筆か奥村政信筆か興味ある問題。

天滿神明氷の朔日 原本村山龍平氏藏 一冊
寶永七年、七十餘歲の宇治加賀掾が新進に對抗して京都の都萬太夫座に上演した淨瑠璃の繪入細字本、作者は近松門左衛門。

俳諧繪文匣 原本米山堂藏 二冊
和漢の人物百二人の繪像に、時の俳人等の讃咏を配した享保七年の版本。

江都二色 原本萬場末吉氏藏 一冊
玩具數十種を北尾政演が淡彩畫において狂歌を添へた小本である。唯一の原本既に燒失。

茶番三階圖繪 原本松廼舍文庫藏 一冊
素人茶番の心得を書いた稽古本であるが、雜藝研究の上に重きをなすもの、明和頃の版。

名物拜見自由自在 原本若樹文庫藏 一冊
體裁を遊女の細見に擬した江戸名物の番附。

江戸自慢繪入新狂言 原本若樹文庫藏 一冊
鄕土自慢を經とし商賣繁昌を緯として商品を役名に商店を役者に見立てた脚本體の戲作。

客衆肝照子 原本若樹文庫藏 一冊
嫖客及び遊女の身振聲色を巧に畫と文に寫した山東京傳著の洒落本。天明六年發行。

七十五日 原本若樹文庫藏 一冊
天明七年版。菓子店の二百十九軒を始め、江戸の食物店の看板、引札等を列擧した横本。

江戸名所圖會畫稿 原本若樹文庫藏 一冊
長谷川雪旦の自筆草稿八葉に、それと對照すべき板刻圖八葉を併せて玻璃版に附した物。

北國一覽寫 原本若樹文庫藏 一冊
天保二年長谷川雪旦が東北地方を巡遊した時の寫生畫であつて、風俗に關する圖が多い。

稀書解説第三編 一冊
第三期刊行廿七種の解説は一層詳細である。

稀書複製會第四期既刊書目（三十一種三十九册外に解説一册）

蟲の歌合 原本岩崎文庫藏 一冊
寛永頃の木活字版、挿畫總て筆彩色、丹綠本の好標本。蟲鳥魚獸の四編を四生歌合と云。

魚の歌合 原本同上 一冊
前書と同類同版式、歌合の歌體に短歌、長歌俳諧歌、旋頭歌、折句、廻文歌などある。

伊曾保物語 原本早稻田大學圖書館藏 三冊
イソップ物語の飜譯、萬治二年卽ち今より二百七十餘年前の繪入本、行文明快挿畫古雅。

俳諧胴ばね 原本丸尾俊彦氏藏 一冊
井原西鶴と門下由平西國の三吟に成る『胴骨三百韻』は其名のみ傳はつて實物を見た人がなかつた。西鶴自筆稿本の複製は是である。

吉原繼の道引 原本南葵文庫藏 一冊
菱川師宣畫作中第一流の名品、延寶六年刊。

天王寺彼岸中日 原本米山堂藏 一冊
延寶版繪入細字十七行本、山本土佐樣正本。

島原御影供紋日 原本米山堂藏 一冊
繪入十二行本、刊年延寶、土佐一派の語物。

貞德狂歌集 原本奚園氏藏 三冊
松永貞德の狂歌集、師宣の繪が主位を占む。近年某大名華族の文庫から出た天和版珍本。

浮世續繪盡 原本山田年風氏藏 一冊
天和四年刊行菱川師宣筆の繪本。各階級の人物を描いて當時の風俗世態を現はした傑作。

正直ばなし 原本若樹文庫藏 五冊
元祿七年發行の最も名高い笑話本、作者石川流舟、繪師菱川師宣。時代も古く話も輕妙。

大伽藍寶物鏡 原本米山堂藏 一冊
細字繪入古淨瑠璃本。大仕掛の水からくりを舞臺に用ひた松本治太夫正本、元祿九年刊。

道化百人一首 原本若樹文庫藏 一冊
近藤清春最終の畫作と傳へられる狂歌百首。

竹之丞 原本若樹文庫藏 一冊
享保四年市村座顔見世狂言の繪本、『寸錦雜綴』轉載の稀な赤本。

九百年忌九重西來繪盡 原本安田文庫藏 一冊
享保十九年後、榊山四郎太夫座狂言繪本。

猿蟹合戰 原本若樹文庫藏 一冊
西村重長筆、『寸錦雜綴』轉載の稀な赤本。

諸鞍奥州黑 原本早稻田大學圖書館藏 一冊
寶暦二年の中村座秋芝居の狂言繪盡。筆者は初代鳥居清滿で、芝居繪双紙の前身である。

皇雲曾我橘 原本早稻田大學圖書館藏 一冊
寶暦四年の市村座春芝居の繪本畫工同前。

抛入狂花園 原本米山堂藏 一冊
明和七年刊行、其頃流行した見立本の一種。

狂歌浪花丸 原本打越晴亭氏藏 一冊
涙花狂歌師白綠齋梅好の著、大阪の俗言方語を主題として狂歌と滑稽畫を添へたもの。

娼妃地理記 原本三村竹清氏藏 一冊
安永六年刊朋誠堂喜三二作の稀覯洒落本。

役者手かがみ 原本田中喜作氏藏 一冊
役者自筆の俳句に繪を配した手鑑、卷頭卷軸の圖を色摺にした凝つた繪本。安永八年刊。

繪草紙年代記 原本若樹文庫藏 一冊
杜芳作、政演畫、作者畫工の特癖を穿つた青本、式亭三馬作稗史臆說年代記は此の模倣。

滸都酒美選 原本三村竹清氏藏 一冊
娼妃地理記の續編清水燕十作天明三年刊。

傾城觸 原本三村竹清氏藏 一冊
山東京傳の傑作洒落本、吉原名妓の筆跡、提灯、紋、傘等を掲ぐ、天明八年刊行。

北里歌 原本米山堂藏 一冊
男女廿三名の自筆を集めた妖艶な詩集、儒者市河寛齋が匿名の戲編、挿畫は磯田湖龍齋筆。

西遊日簿 原本高橋南湖氏藏 一冊
南畫家春木南湖が天明八年長崎に遊んだ時の自筆淡彩畫入日記、居留外人の狀況を寫す。

新編金瓶梅草稿 原本若樹文庫藏 一冊
曲亭馬琴が盲目に瀕した天保十一年の草稿と同十三年朱明後の代筆草稿を併せ收む。

鐵砲洲燈籠略圖 原本若樹文庫藏 一冊
初代廣重目筆の鐵砲洲稻荷祭燈籠繪の下圖。

華山俳畫譜 原本市島春城氏藏 一帖
渡邊華山筆俳畫の色摺刻本、嘉永二年印行。

小倉百人一首畫稿 原本安田文庫藏 一冊
藤命畫家岡田爲恭が反古紙の裏面にかいた稀有の稿本、參考に同筆重盛諺言圖を添ふ。

ろしやのいろは 原本若樹文庫藏 一冊
萬延二年兩館版露人編、日露對譯書の嚆矢。

稀書解説第四編 一冊
第四期復製本三十一種の詳細なる解説の

稀書複製會既刊書發行順序一覽

第一期

一 曾我扇八景　剝野老
二 遊相日記　桃太郎
三 たかたち
四 江戸名所百人一首
五 舞曲扇林二册
六 稗史億說年代記三册　文七一週忌
七 當世風俗通　後編女風俗通
八 仙人龍王威勢諍　人遠茶懸物
九 里見八犬傳草稿
一〇 吉原大雜書
一一 呑込多靈寶緣起草稿　大津みやげ
一二 萬歲躍　風流謠年代記
一三 犬百人一首　傾城筑波山
一四 難波立聞昔語
一五 腹之內戲作種本名人揃　親船太平記
一六 傾城王昭君　繫升三升繫
一七 餘景作庭之圖
一八 武江扁額集
一九 筑波山戀明書
二〇 菊慈童酒宴岩屈　陪駕日記
二一 歌舞伎十八番圖十二枚
二二 同　七枚　謎づくし
二三 花相撲源氏張膽　田舍源氏草稿
二四 亂曲揃　稀書解說初篇

第二期

人倫訓蒙圖彙一　對相四言雜字
同　二　明月餘情初編
繪本江戸土產三册
人倫訓蒙圖彙三　手拭合
參海雜志
役者繪盡　上
同　中　いろは短歌
人倫訓蒙圖彙四　同　五
同　六　洗張浮世模樣
明月餘情二編　同三編
惺々曉齋繪日記　役者繪盡下
人倫訓蒙圖彙七　こんぢきつすおんな
胸算用嘘の店卸　追分繪
新花摘
月次の遊び　鼠花見
戲子卅六歌撰檜色紙鱗魚浪治二册
酒佛妙樂經　ふきあげ
阿國歌舞妓六枚
阿國歌舞妓六枚　竹齋老寶山吹色
元祿歌舞妓小唄番附盡
阿國歌舞妓八枚
繪本續江戸土產上　同中
同　下　吉原はやり小唄
阿國歌舞妓八枚　稀書解說二篇

第三期

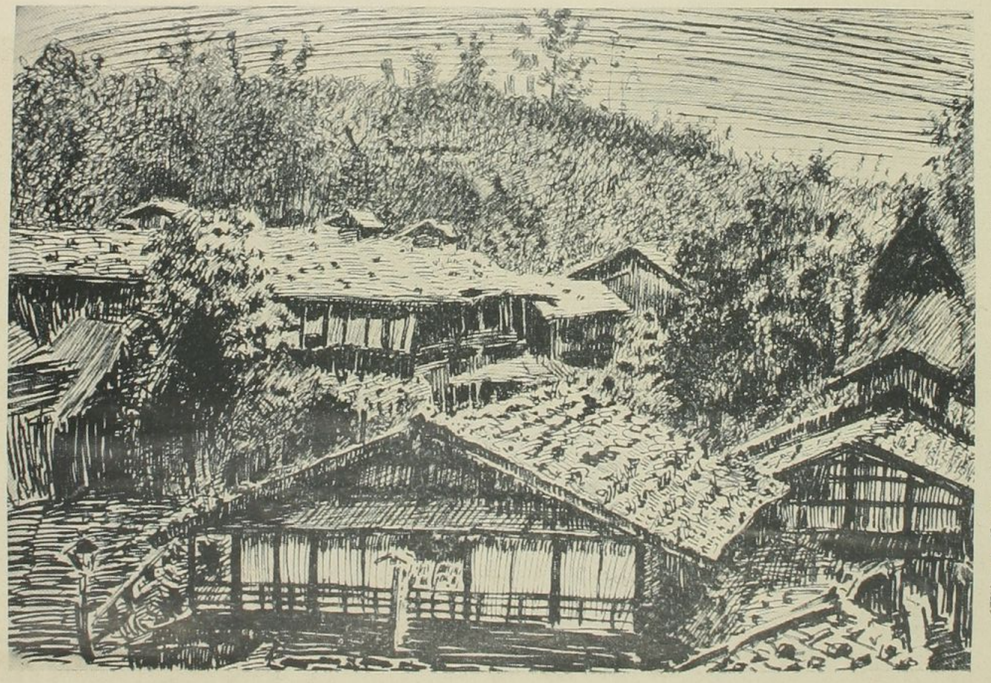
風流四方屛風上天和長久四季遊
休息句合　野郎蟲
誹諧童子教上　豐世見久佐
風流四方屛風下
誹諧童子教中　同　下
獸太平記上
明暦版江戸圖
初春のいわひ　獸太平記下
江戸名所圖會畫稿　氷の朔日
娼妓畫帙　客衆肝照子
七十五日
六方詞　繪入新狂言
長崎土產　一
明暦版大阪圖
江都二色　年の花
長崎土產　二
同　三　同　四
同　五
名物拜見自由自在俳諧繪文匣上
俳諧繪文匣　下
長歌古今集　茶番三階圖繪
役者友喰評判　北國一覽寫
澤庵和尙鎌倉記上
澤庵和尙鎌倉記下　稀書解說三篇

第四期

浮世續繪盡　竹之丞
新編金瓶梅草稿　九百年忌九重西來
どうけ百人一首畫稿
小倉百人一首畫稿
天王寺彼岸中日　島原御影供紋日
伊曾保物語上　皐需曾我橘
同　中　諸鞍奧州黑
同　下
蟲の歌合　爲恭筆重盛諫言圖
貞德狂歌集上　ろしやのいろは
正直ばなし一　狂歌浪花丸
貞德狂歌集中　正直ばなし二
吉原戀の道引　鐵砲洲燈籠略圖
正直ばなし三　傾城飜
貞德狂歌集下　正直咄四
俳諧胴骨　正直咄五
北里歌
華山俳畫譜
春木南湖西遊日簿
抛入狂花園　大伽藍寶物鏡
魚の歌合
浮都酒美選　さるかに合戰
娼妓地理記　繪草紙年代記
役者手鑑　稀書解說四篇

十二枚

温泉スケツチ　（信州猿渡）



故岩村透男遺作

（水谷鐵也氏藏）